

この子あり

# 『笑顔』

横井 秀治

## 目次

- 第一話 命の芽生え
- 第二話 喜びの声
- 第三話 有りのまま
- 第四話 幸せなら手をたたこう
- 第五話 心温かい二人
- 第六話 新生活
- 第七話 排除しない社会
- 第八話 アルプスの夏
- 第九話 森の雪道
- 第十話 別れ
- 第十一話 自分なりに
- 第十二話 歴史に映る命
- 第十三話 挑戦
- 第十四話 関係自立
- 第十五話 このままでいい
- 第十六話 平和への祈り
- 第十七話 繋がり

## 第一話 命の芽生え

「なぜ、生まれたのかって？」

それは、すべての生きものと同様に、ボクの命が世の中で必要とされ、意味を持っているからなのだ。たとえボクのような身でもね。

いや、もしかしたら、だからこそ、まわりの人たちと一緒に生きていく中で、ボクの命は光を放しているといえるだろうな。

さらに、付け加えたいのだ。そもそもボクには、なぜという言葉はないのだ。「ボクはボク」と言う姿勢で毎日暮らしているのだから。

この「ボクはボクだ」という言葉、ボクは大好きだ。そこには、自分なりの行為があるからなのだ。それを始めて体験したのは、ボクの命が芽生えて、まもない時のことだった。

体が溶けそうになった。このままでいたら、ボクは消えてしまう。懸命に踏みとどまったのだ。と、今まで激しく揺れていたボクの身長十五ミリメートルの体が、止まって動かなくなつたな。と同時に、優しく撫でる二つの手があつたのだ。

一つは柔らかく、もう一つは硬かった。

その二つの手が、会話を始めたのだった。

「急にお腹の調子が悪くなったと言ったので、すぐにここの病院へ駆けつけたのがよかったです」

「そうね。あなたのお父さんがタクシーを呼んでくれて」

「まさか小さな命が、きみのお腹に宿っていたとは思っても寄らなかつたよ。流産をしないで本当によかつた。ドイツのテュービンゲンから、実家がある東京に来て、ここ二週間目まぐるしい日々が続いたよね。きみにとっては、緊張した日々だったに違いない。お腹にも、その影響が出たのだろう」

「そうかもしれないわ。でも、妊娠していたとは知らなかつたわ」

「きみは呑気なところもあるからな。とにかく、近くに病院があつたのが幸いしたよ」

「まったく、その通りね」

「きみにとっては、初めての地日本。何かとドイツの文化や習慣が違うので、戸惑うことが多くあつただろう。まして暑い夏、参つたのでは？」

「そうね。この湿気、今まで体験したことがなかつたわ」

「今のお腹の調子はどうなの？」

「いいわよ」

「きみに見守れながら、小さな命は懸命に生きようとしたのだよ」

「そうよね。この新しい命、うれしいわ」

「あと八ヶ月したら、産まれてくるとドクターは話してくれたね。きみは慣れぬ地なので大変だろうが、踏ん張ってほしい」

「もちろんよ。お腹にいる新しい命と一緒にね」

そう言いながら、柔らかい手がお腹を撫で出すと、ボクの体が一回転したのだった。

翌日、硬い手が病院に来て、柔らかい手に話したのだ。

「昨日、病院から戻ると、母から『きみは三十二歳、初めて子供を産むにはすこし高齢な

ので、羊水検査を受けたらどうか』と勧められたよ。母は心配してそう言ったのだろうか。でも、『その必要はない』と答えたからね」

「わたしも、そう思うわ。このお腹のなかに宿っている命、わたしたちによるこびをもたらした命、どんなことがあっても産むわよ」

力強い声が、壁を通してボクの体に響いてきたな。そのあと、硬い手が、柔らかい手を握りながら言ったのだ。

「きみの体が落ち着くまでのあと四日間ここにいて、それから退院だ。それ以後は、いつもの生活に戻れるとドクターが言っていたね」

「そう」

「それと、今日の朝、よい知らせが入ったのだよ。ドイツから職を求めて書き送った手紙の返事がきて、知的ハンデイを抱えながら暮らしている子供たちが住む施設で、指導員としてすぐに採用してもよいとの知らせだったのだ」

「それは、よかったわね」

「うん、これでひと安心だ」

「そうね」

「東京からすこし離れた浜松の地で、二人、いや三人の暮らしとなるね。とにかく、きみはここを退院して、一週間ほどまた実家で過ごしてから、採用してくれた施設に行くことにしたからね」

「わかったわ」

それにしても、柔らかい手は勇気があったのだ。

南ドイツのテュービンゲンという町で幼稚園の保育士として働いたあと、こんどは北ドイツ地方にある、癲癇発作のある人たちが暮らす大きなコロニーで研修をしていた際、日本からドイツへ治療教育学を勉強しようとの志で来ていた二十八歳の硬い手と知り合いになり、半年後にはテュービンゲンの市庁舎の戸籍係員の前で結婚式を挙げ、そのあとすぐに日本へ行ったのだから。

よほど柔らかい手は、硬い手と一緒に暮らしたかったのだろうな。

柔らかい手のお父さんは、硬い手と出会う二年前に交通事故で跳ね飛ばされて即死。その一年後には車椅子に乗っていた姉も亡くなり、お母さんは一人暮らし。二人のお兄さんのうち、一人は日本行きに諸手を挙げての賛成ではなく、それを押し切って、柔らかい手は一大決心をして日本に行ったのだ。

何も知らない、未知の国日本へ。

## 第二話 喜びの声

硬い手、それはパパ。柔らかい手、それはママ。

その二人の新婚生活が、気候の温暖な浜松の三方原ではじまったのだ。住いは、パパが勤め出した施設近くのプレハブ造りの六畳と四畳半。それに小さなキッチンがついた職員寮だった。

パパがこの職場を選んだのは、牧師家庭で育ったママだったので、キリスト教の考えを背景とした施設だったら、ドイツとは異なる日本の生活様式に、いくらか馴染んでくれるだろうと思っていたのだ。

ママが暮らし出して最初に困ったことは、トイレだったな。腰かけて用を足す部類ではなく、しゃがんでする汲み取り式のタイプだったからだ。早速、パパは初任給で洋式の簡易便器を購入したのだった。ママはとてもよろこんだな。

何しろトランク二つで引越して来た。パパとママ。家の中には家具がなかったため、簡易のソファ、テーブル、それに食器類を近くのスーパーで買い求め、生活できるように整えていったのだった。

蒲団は、施設のお客さん用に使われていたものが支給され、畳の上で寝るようになったママだった。

パパは、ママが畳の上で寝られるどうか心配したが、何の支障もなかったな。反対に、蒲団は押入れに納まるので、居間兼寝室のスペースが、広くなるのでよろこんだママだった。

胎盤が形成され、ボクとママの間でへその緒が結ばれ、栄養素や老廃物などのやり取りがはじまったのだ。ボクはママの温かいお腹の中で、次第に大きくなっていったな。

体長が三十センチメートルぐらいになったボク。と、聴覚がより発達して、ママがドイツから持ってきた縦笛の音がよく聞こえるようになったのだ。そうすると、ボクは拍手をする替わりに、足でママのお腹を蹴ったりもするようになったな。

ママは女学生の時代、宗教と音楽で抜群により点数を取っていたこともあって、日本の民謡や童謡を二、三回聞くと、もうその時点ではじまっていたのだ。ボクとママのコミュニケーションは、もうその時点ではじまっていたのだ。

とにかく、ママのお腹の中は居心地良く、特に、ママがボクによく語りかけてくれたのがうれしかったな。でも、ママは大変だったのだ。初めてのお産。それもまわりには、ドイツ語や英語を話す外国人は任んでなく、日本語をまったく話せなかったからだ。

そのような中、近くにキリスト教会があったので、ママはそこによく出かけるようになったのだ。教会員の中に英語を話す人が一人いたので、その人を、ママは家に招いたりもするようになったのだ。

また、近くにキリスト教組織団体の『母の家』があって、そのシユベスター(奉仕女)との交わりは、ママにとっては心安らぐものになっていったな。

それに社会性を重んじているママだったので、買物などで一人出かけたたりすると、すれ違う人と「こんにちワ」と笑顔で必ず挨拶を交わし、まわりの人たちと溶け込もうと心がけていたのだ。

パパは時間があると、ママに日本語を教えていたが、日常会話はドイツ語だったので、ママの日本語は上達していかなかったな。

パパの勤務は当直もあり、また早番、遅番などもあったりしての一定した時間ではなかったのだ。ママは戸惑ったりもしていたな。

そのようなママを、パパは自分の職場を案内したり、それに休日になると、ママのお腹の中にいるボクと一緒に、近くの自然豊かな地を散歩したりしていたのだ。

また、施設内で行われた秋の運動会では、ママはパン食い競争にも参加して一等賞をと

ったこともあったのだ。その時のママの弾んだ心がボクにも伝わり、ボクの体は何度も回転したのだった。

そのようなパパとママの新婚生活が続き、出産予定日の二週間前のことだった。ボクの体を優しく包んでいた羊水が、急におかしくなってしまうのだ。

ママはトイレに駆け込んだあと、六畳の居間で、体を横にしながら大きな声を張り上げたのだ。それを耳にした隣家の人が玄関のドアを開け、ママのところに来て、パパの職場にすぐに電話をかけたのだった。

それから五分もしないで、息を切らせながら家に戻ってきたパパ。そのパパに、隣の人が、

「破水となっていますよ」

と早口で言うと、パパは、

「すぐに病院へ行かねば」

と声を出し、隣の人の車にママを乗せ、近くのクリニックへ向ったのだ。

病院に着くや、ママとボクは分娩室に運ばれたのだった。

ママは少しも動揺した様子もなく、平静だったが、パパはソワソワして落ち着きがなかったな。そのパパは、看護師に「外で待っていてください」と言われ、外で待つことになったのだった。

ママは、パパが傍にいて、ボクが産まれる瞬間を見てほしかったのに。それに、男性医師も勇気がなかったのか、パパを外で待たせようとしたのだった。ママの残念がった気持ち、ボクに伝わってきたな。パパはママの気持ちを察して、医師にお願いすればよかったのに。

ママが分娩室に入ってから三時間して、パパはボクの産声をドアの外で聞いたのだ。一九七八年三月一九日二三時四五分だったな。

パパは、すぐにボクとママのところに来ようとしたが、看護師に、

「明日、会ってはどうぞですか」

と勧められ、それに従ってしまったのだ。ここまでお腹にいるボクを、大切に守ってきたママの手を握り、声をかければ、ママはよろこんだのに。なんて不甲斐ないパパなのだ。

翌朝、ボクは、パパと初対面をしたのだった。

パパはボクを抱きながら、うれしそうな顔でママに、

「ごくろうさん。色が白く、ばっちり二重瞼で整った顔だ。ありがとう」

と、言ったのだ。二人はよろこびに満ちた目で、ボクを交互に抱きながら見つめ続けていたのだった。

それから五日して、ボクとママは、パパと一緒にタクシーに乗って帰宅したのだ。

ボクの名前は男か女かわからなかったの、二人とも考えていなかったのだ。数日してから、ママがドイツ名を、パパが日本名を名づけたのだった。

そのボクは、ママの乳を吸う力がほとんどなかったのだ。そこで、ママは自分の乳を哺乳瓶に入れて飲ませようとしたのだったが、ボクはほんの僅かしか飲まなかったな。

ママがパパに言ったのだ。

「お乳をほとんど吸ってくれないわ。一日にどれくらい飲んだかわからないわ。こうやって哺乳瓶に入れて飲ませると、いくら飲んでくれるのだけれど。ほら、このノートを見

て。毎日、彼が飲んだ量が記されてあるでしょ」

そのノートを見た。パパは、呟いたのだった。

「昨日の朝六時は六十cc、お昼は五十cc、夕方の六時は五十cc、二四時は六十cc、合計すると一日に二百二十ccか。産まれたときが未熟児すれすれの二五〇グラムだったな。それから二週間経っても体重が二六四〇グラムか」

そのあと、パパは力強い声を出したのだ。

「でも、これから吸いつくように飲むよ」

「そうよね。こうやって乳を搾り出す必要もなくなるでしょうね」

ママはそう応えながら、ボクに哺乳瓶の乳を飲ませようとしたのだが、ボクはあまり飲まなかったな。飲みたいという欲求が体から生じなかったからだ。

それを見ていたパパが、ママに言ったのだ。

「なぜ、彼が乳を飲まないかを、きみの担当看護師に訊ねてみようか」

「それはいいわね。あの看護師さん、とても優しくったわ。乳を飲ませる工夫が何かあるかもしれないわね」

「よし、彼女を家に呼ぶことにしよう」

二日してから、病院での仕事を終えた看護師がママのところに来て来たのだ。

ボクがあまり乳を飲まず、体重も増えないことをパパが話すと、その人はボクを抱いて、ママに乳の飲ませ方を教え出したのだった。でも、ボクはいつものように飲む気はしなかったな。

その人は一時間ほどいてから、帰ることになったのだ。

パパはその人と一緒に家を出て、バス停までの途中、思っていることを話したのだ。

「知的ハンディを抱えている子供たちが住む施設で働いているので、察したりするのですが、もしかしたら、息子はダウン症ではないでしょうか」

「いや、そんなことはありませんよ」

暗い夜道だったので、パパは彼女の表情を読み取ることができないでいたな。

「仕事柄、彼らのことはわかっていきますので、本当のことを言ってください」

「いえ、そんなことは…」

看護師は、言葉を濁して答えるだけだったな。

パパはもうこれ以上訊くことはできないと思い、家まで来てくれたことにお礼をのべてから、ママとボクのところに戻ってきたのだった。でも、パパはその人と話した内容を、鵜呑みにはしていなかったな。

ママはドイツのお母さんと時々電話で話をし、その内容をパパにいつも伝えていたな。パパの給与は低かったの、いつもドイツから電話がかかってくるのだった。そのママが、ボクがあまりミルクを飲まないことを話したためか、ドイツのおばあさんから粉ミルクなどがよく届くようになったのだ。

そのミルクを、飲むようになったボク。そのおかげで、ボクの体重はほんの少しずつだけ増えていったのだ。でも、他の子と較べると極端に少なかったな。

生後一ヶ月経っても、ボクの体重は三〇〇〇グラムしかなかったのだ。

ママの献身的な見守りにも拘わらず、ボクの首は四ヶ月過ぎても座らなかつたのだ。そ

こで、パパは、ボクが産まれた病院ではなくて、他のクリニックで血液を調べてもらおうとしたのだ。二週間以内に、その結果を知らせてくれることになったな。

パパが職場で働いていると、事務職員がやって来て、「電話ですよ」と言ったので、パパはすぐに電話機が置いてあるところに行き、受話器を取ったのだ。

「息子さんの血液の結果が出ました」

電話線を通しての声に、ハツとしたパパ。いくらか恐さを覚えながら、その声に耳を傾け続けていたな。

「検査の結果、二十一トリソミーのダウン症と判明しました」

それを聴いたパパは、気が動転して、何かをしゃべろうとしたのだったが、言葉が出ないでいたな。受話器の向こうで何かを語っている声が、パパの耳に入ってこないでいたのだ。

しばらくしてから、パパは、

「そうでしたか。ありがとうございます」

と言って、受話器を置いたのだ。

その時、パパの耳に、「ありがとうございます」と反射的に口から出た言葉が残り続けていたな。と同時に、パパはボクが産まれた病院では、なぜ教えてくれなかったのだろうとの思いになっていたのだ。

「外国人の妻だったからなのか。でも、それならいずれダウン症だとわかるのに。あとで言うおうとしたのだろうか。いや、違うだろう。出産したあとに、すぐにわが子を見ることができず、また極端に乳を吸う力のなかった子だったので、担当の医師はこの子の生命力はないと判断したのではないだろうか。だから言わなかったのだろう。そうとしか考えられない」

パパは目の前の受話器をじっとしばらく見つめたあと、仕事場に戻ったのだ。

体から力が抜けたようになったパパ。やはりそうだったのかと何度も心の中で呟き、家に戻ったら、ママにどのように伝えたらよいのだろうかと考え続けていたな。

勤務時間が終わり、帰宅して玄関で靴を脱ぎ出したパパに、ママがいつものように明るい声で、「おかえりなさい」と日本語で声を出したのだ。それを耳にしたあと、六畳の居間に入ったパパ。その姿を見るや、ママが言ったのだ。

「今日、母から小包が届いたわ。あなたが戻ってから、紐をほどこうとしたのだけれども、待ちきれなくて開けてしまったわ。ほら、母が送ってくれた木のおもちゃがあるでしょう。彼は、まだあのようなおもちゃで遊ばないのに。でも、そのうちに関心を示すでしょうね」  
ママはおもちゃを手にとって、パパに見せたのだ。

パパはそれを手に持ちながら、話さなければならぬと自分に言い聞かせ、ママを畳の上に乗らせたのだ。

「きみに伝えなければならぬことがある。今日、クリニックから電話があつて」

そこまで言うと、おもちゃを動かしていたママの手がびたつと止まったのだ。

「検査の結果、息子は」

パパは、次にいう言葉が重たくて、なかなか口から出てこないでいたな。やっと声を絞って、ママの目を見ながら言ったのだ。

「彼は、ダウン症だとわかった」



ママは一瞬、体をギクツと震わせ、視線を下に落としたのだ。そこには、ドイツから届いたおもちやなどが包まれた、包装紙がきちんとたたまれてあったな。

何ということ言ってしまったのだろうと思った。パパ。ママをさらに正視しなければならぬのに、パパもママと同様に、その包装紙に目を落とし続けていたな。

二人の間に、沈黙が流れ続けていたのだった。

しばらくすると、ママが立ち上がり、隣の三畳の寝室で寝ているボクのところに来て、ぐっすり眠っているボクの寝顔に自分の顔を重ねたのだった。ボクは眠っていたが、何か震えるような手と顔がボクを包んでいたのを感じたな。

ボクが目を開けると、パパがママの肩に手をかけながら、二人ともボクをじっと見つめていたな。そのあと、ママとパパは居間に戻ったのだった。

ママがローソクを灯し、それを見ながら、パパに話したのだ。

「彼がわたしを母として、そして、あなたを父として選んだのだわ。それを心に留めながら、暮らしていきましょう」

「もちろんだ。この子をどうしても育てる」

パパの力強い声を聴いたママは、パパに手を伸ばしたのだった。二つの手が重なったな。

この日の夜、ボクの家ではローソクの明りがずっと灯り続けていたのだった。

### 第三話 有りのまま

浜松の冬はドイツと較べると明るく暖かかったのだろう、ママはセーターなしで毎日過ごしていたな。

そのママは、聖隷事業団を創設した人の夫人から借りた竹作りの乳母車に、ボクを乗せて毎日のように外に出ていたのだった。休日になると、パパもその乳母車を押して一緒に散歩するようにもなっていたな。

ママは道行く人と出会うと、親しそうに挨拶を交わし、ボクをいつも笑顔で皆に誇らしそうに見せていたな。

日本語を話せず、親戚や友人もなく、ボクを今後どのように育ててよいのかとの見通しも立てることができなかったママだったが、明るい性格のママは、少しずつ体重が増えてきたボクの成長を、パパと一緒によろこびながら、浜松の地で暮らしていたのだった。

パパとママの絆は、ボクを通してより強くなっていったな。

ただ、残念なことに、パパはボクへの早期治療をすぐには考えていなかったのだ。もし考えていれば、ママが知っていたいくらかの質問を、専門の人に訊くこともできて、ママは安心した気持ちで毎日を過ごすことができただろうに。

パパは知的ハンディを持つ子供たちが暮らす施設に勤めていたにも関わらず、そのことをしなかった。また、地域の保健婦さんともコンタクトを持たなかった。もう少し、パパはママのことを考えるべきだったのだ。

クリスマスが近づいてくると、ママは近くの林から高さ一メートルほどの木を採ってきて、居間にそれを置き、自分で作った麦わら星や月などを枝に吊るしはじめ、十二月二十四日を待ち望んでいたな。

ドイツのおばあさんからは、木のおもちゃが多く入っている小包がよく届くようになったのだ。とくに、ボクは音のする木のおもちゃが気に入って、それを手に持ってよく遊ぶようになったのだ。それを目にしていたパパは、ボクがよるこんで遊ぶような音のする木のおもちゃを作りはじめるようになっていったのだ。作っては、ボクにくれていたのだ。

そのようなある日、パパは町の図書館に行き、一冊の本が目にとまり、それを借りて夢中で読み出したのだ。ママは毎晩、寝る前には聖書を必ず読んでいたが、パパもその本と出合ってから、毎晩のように、それを枕元において目を通して寝るようになったのだ。

その本というのは、宗教哲学に関するものだった。

学生時代から、鶴見の総持寺に座禅を組に行き、そこで寝泊りもしていたこともあったパパだ。その本の内容が体を通して自分の中に入ってくるように感じられ、その著者の教えている大学へ、職場の休日を利用して行くようになったのだ。

それから数カ月してから、パパは考え抜いた末、ママに話したのだ。

「浜松から茨城県の土浦に引っ越そうと考えているのだけど、どうだろう？ 木のおもちゃ作り、それもハンディのある幼児のためのおもちゃ作りをしたいのだ。それに、時間が許せば、再び大学で勉強したいのだ。土浦は故郷のような地なのだ。また友人もいる。それに近くに筑波大学があって、そこで池田先生という人がダウン症の早期治療セラピー教室を開いている。そこに彼を通わせたいのだ」

さらに、パパは土浦が自分にとって、いかに大切な地なのかをママに伝えたのだ。「知的ハンディを持つ人に初めて出会ったのは、学生最後の年だった。そろそろ就職先を考えはじめたときだった。友人に誘われて、ある施設に行き、そこで一週間過ごしたことがあったのだ。ハンディを持つ彼らは、初めてのわたしに親しく寄ってきては、何かと話しかけてきたのだ。その振る舞いは明るく、素直で、とても純粹に映ったのだよ。とにかく、彼らと一緒にいるだけで楽しかった。それから数週間して再びその施設に行き、園長に、『是非、ここで働かせて下さい』と願いを出して、職員になったのだ」

パパはさらに続けたのだ。

「言葉での会話が乏しい彼らと寝泊りを共にしていると、ますます彼らに魅せられてしまったよ。ぜいたくにも、彼らと同じような心境になりたかったのだ。その心境というのは、自分を有りのままに出して、自分を守り、防御しないということ。そして、人を疑わないということだった。そこに、言葉を越えた真実性があると感じたのだ。とにかく、彼らと接していると、彼らが鏡となって自分が映し出され、それもエゴ的な自分を見出し、ハッとするときがしばしばあったよ」

一息入れてから、パパはまた話したのだ。

「その例の一つとして、手づかみでご飯を食べている子の手をつい軽く叩いてしまったことがあったのだ。そのとき、そしてそれから数日間、自分の手をじっと見つめたよ。その子は素直に食べていたのに、こちらの瞬間的な強い思いで手を打ってしまったことに後悔を覚えたね。もうすこし自分を抑え、彼を尊重しながら接しなければならなかったのに」

ママは、肯きながら聴いていたな。

パパの話は、さらに続いたのだ。

「その施設には重いハンディをもつ子供も多く、彼らは自ら語りかけることがすくなくいともあつて、問いかけるこちら側の真摯な心が大切となってくるのだ。それはまさに自然との出遭いのなかで、自然からは言葉としての語りかけはないが、こちらから話しかけ、問いかけると、それなりの返事を得るのに似ていると思つたのだ。自然も彼らも、まわりと共に懸命に生きていたから」

ママは、耳を傾け続けていたな。

「そのような経験をしているなかで、こんどはダウン症の息子を持つたよね。それはネガティブなことではなく、彼を通して自分や社会を見つめるチャンスでもあるとの考えとなつたのだ。そこから自分の生きる方向性を見つけようと。それには、慣れ親しんだ土浦の地だと、何かと活動がし易いのだ」

ママは、パパの話す内容を聴き終えたあと、パパの目を正視しながら、

「あなたが語つた内容、よくわかつた。あなたがそう望むなら、協力するわ」

と、応えたのだ。この地にくらか慣れてきたママだったので、パパの願いを素直に受け入れるのは、そう容易ではなかつただろう。パパは深く感謝したな。

数カ月後、ボクたち三人は土浦に引っ越すことになつたのだ。

## 第四話 幸せなら手をたたこう

ボクが生まれた浜松を離れ、土浦に引っ越したのは、ボクがちょうど一歳になつた時だつた。

こんどの住いもブリキ屋根の簡易な平屋の借家。町の外れに建つていたので。ここでもしやがんで用を足す汲み取り式の便器だったので、パパはすぐにプラスチックの簡単な洋式タイプを買い、それを取りつけたのだつた。

その家から、ボクは筑波大学で開かれていたダウン症のための療育教室に通い出し、体の動作訓練などを受けるようになったのだ。ボクはゆっくりだったが、少しずつ発達していったな。大学生たちとのコンタクトはたのしく、彼らはボクの家を訪れてもくるようになつたのだ。

ママは先生と英語で会話をし、また大学付近にドイツ人女性が二人住んでいたの、その二人の家にボクを背中におんぶして、時々行くようになつたのだつた。

パパはハンディのある幼児が遊ぶような木のおもちゃや、友人が働いている土浦市内の施設内で作るようになり、それらを市内のデパートや地域の子供祭りなどで販売することをはじめたのだ。

でも、それだけでは生活費が足りなかつたので、パパは作つたおもちゃをダンボール箱に詰めて、近くの幼稚園や保育園に行つて売り込む活動もするようになっていったのだ。パパが初めて幼稚園へ売りに行った時だつたな。園の外でパパが戻ってくるのを待つていたママ。気が弱い。パパなので、ママが一緒だと心強く感じたのだろうな。

最初の頃は園の門をなかなか潜れなかつた。しかし、生活費を稼ぐにはこれしかないと思つたのだろう、売り廻っていたな。二つ、三つ買ってくれると、うれしそうな顔で家に戻ってくる。パパだつた。

パパはおもちゃを作る傍ら、火曜日の午前中の二時間だけ、筑波大学の大学院に通い、宗教哲学の三枝先生のゼミを聴講するようになっていたな。それを許してくれたママに感謝しながら、パパは机に向かっていたのだった。

ママは生活がいくらか厳しくなっても、何一つ辛いとは口に出さないうで、いつも明るく振舞っていたな。それだけでなく、家近くにあるプリマハムという会社の社員たち六名にドイツ語を教え、その授業料を生活費にまわしていたママ。パパはそのことにとっても感謝していたな。

そのような日々が続く、三歳となったボクは、新しい年を迎えることになったのだ。と同時に、ボクたちの生活に、新局面が加わったのだった。

パパがおもちゃ作りの仕事を終えて家の玄関を開けると、ママが、「おかえりなさい」といつもの明るい声を出したのだ。それを聞き、靴を脱いでから台所に来たパパ。ボクを背負いながら包丁で人参を切っているママに、キスをしてから言ったのだ。

「日本の包丁にも大分慣れてきたね」

「そうね。この大きな包丁、なんでも切り易く、いいわね」

ママはそう声を出したあと、パパに、

「今日二つの電話がかかってきたわ。一つは母からで、もう一つはテレビ局からだったわ」と言うと、パパが、

「テレビ局？」

と、訊いたのだ。

「ええ、内容をすこし話してくれたのだけれど、わたしにはよくわからなかったわ。でも、明日の朝、もう一度電話をかけるそうよ」

済まなそうなママの声だったな。

日本語がまだよく話せないので、受話器では相手の姿も見えず、話も聞き取りにくいと、ママはパパによく言い、電話に出るのが好きでないと話していたな。ボクが産まれてから、ボクを育てるのに精一杯で、日本語を習う時間はママにはなかったのだ。それでも、まわりの人たちと接するうちに、日常会話はどうにかできるようにはなったママだった。しかし、まだまだ十分ではなかったのだ。

翌朝、パパがいつものように作業所へ行こうとすると、家の電話ベルが鳴ったので、パパが受話器を取ったのだ。

そのあと、パパがママに伝えたのだ。

「NHKのテレビ局からの知らせで、私たちが開設しているおもちゃライブラリーを取材したいとの申し込みだったね。思いも寄らない話だったので、明日返事をしますと応えたよ」

その日の晩、パパとママは話し合っていたな。

「どうしよう、ぼくはマスコミが好きではないのだ。断ろうか」

「でも、あなたが開いているおもちゃライブラリーは、商売でしているわけではないし、ハンディのある幼児を持つ親たちが、自然と集まって、できたのでしょ。それとあなたがいつも言っているように、この活動がここだけでなく、日本の至るところにできてくればと願っているでしょ」

「そうだが。しかし、どのように放映されるか」

「では、あなたの希望をそのテレビ局の人に話してみたら？」

「そうだな」

パパはしばらく考えていたな。

「よし、承諾しよう。さらによい活動となるように。しかし、もっと忙しくなるかもしれないぞ」

「わたしで、できることはするわ」

ママは、ハンディのある幼児用のおもちゃライブラリー活動にとっても協力的だったのだ。

翌日、NHKから電話がかかってきて、パパは自分の希望を伝えたあと、承諾したのだった。

そのパパは、頭の中で、ここに至るまでのおもちゃライブラリーの活動を思い起こしていたな。

【ハンディのある幼児は、市販されている一般の玩具ではなかなか遊ぼうとはしない。でも、音のするおもちゃには関心を示し、遊ぼうとする。息子もそうだった。そこで、音のする木のいろいろなおもちゃを作っては、彼に与えるようになったのだ。

その作ったおもちゃで、家の三畳間は、足の踏むところもないほどとなってしまったな。そのことを知った、近所に住むハンディを持つ幼児の親たちが家に来るようになったのだ。そして、おもちゃを借りていくようになったのだ。

そのようなことをしているうちに、おもちゃを借りに来る親子が次第に増えて、家では十分な応対ができなくなってしまうた。そこで、土浦市内の古い木造アパートの一室を借りて、毎週の土・日曜日をおもちゃの貸出日として、無料で提供することをはじめたのだ。

生活費が足りないのに、アパートの一室の家賃を払い、そのようなことをするには勇気がいった。でも、共通する悩みを持つ親たちと付き合っていると、お互い共感するのを覚え、どうしてもおもちゃライブラリーを開こうと決心したのだ】

さらに、パパは想起していたな。

【開設当初は、妻と二人で訪れてくる幼児と親に対応していたが、そのことが地域の新聞に載り、訪れてくる親子の数がすこずつ増え、彼女との二人だけでは十分に対応ができなくなってしまうた。さいわいなことに、近くの筑波大学で福祉を専門に学んでいた大学院生数名が、手伝いに来るようになったのだ。

手作りの木のおもちゃを貸し出していたので、数を増やさねばならなかったな。しかし、これもまたうれしいことに、近くに住む主婦グループの人たちがおもちゃ作りに参加してくれるようになったのだ。

学生たちも主婦たちも、皆ボランティア。私たちはお互いに助け合いながら、おもちゃライブラリーの活動をするようになっていったのだ。

息子だけでなく、他の幼児たちがおもちゃであそぶ姿によるこびを見つけ、わたしはしあわせを感じたものだった。それに新たに作ったいろいろな種類のおもちゃを、妻は必ず褒めてくれたな。その声に押され、他の幼児にも薦めることができたのだ】

土浦おもちゃライブラリーが放映されたのは約十分ほどだった。多くの人が観る朝の時間帯だったこともあって、大きな反響があったのだ。

放映後、関東地区にはおもちゃライブラリーがほとんどなかったもので、毎日数十件の問

い合わせの電話が家にかかってきて、それに応じなければならなかったママは、不自由な日本語、それも電話での対応だったので苦労していたな。

おもちゃライブラリーに来る家族は、増え続け、県外からも訪れるようになったのだ。また、マスコミなどの取材も多くあったな。

パパは、この活動が関東地区、さらには全国にまで広がって、ハンデイのある幼児を持つ家族に、温かい場となるようにと願いながら、ママと活動していたのだ。

そのようなある日、おもちゃライブラリーに、安田火災保険会社が援助金として五十万円を出したのだった。パパはとてもよるこび、それで市販の木のおもちゃを購入して数を増やしたり、手づくりのおもちゃのカタログを作成したりもしていたな。

パパが、おもちゃライブラリーを開いてから二年が過ぎた時だった。ある有名な人が訪れてきたのだ。

ボクはママの自転車に乗って、町の繁華街に建つ六畳と四畳半の木造づくりの古いアパートの一角にあるおもちゃライブラリーへ向ったのだ。

家から五分ほどで着き、ドアを開けて中に入ると、いつもとは違う明るさにびっくりしたな。まだ、一人歩きができなかったボクは、パパに抱かれて、真っ白いシャツに紺のズボンをはいた人の前に行ったのだ。と、パパがその人に、

「息子です」

と紹介すると、顔にニキビの痕がいくつも残っているその人が、

「こんにちわ」

と言い、澄んだ目でボクを見て、ニッコリしたのだ。

ボクが、

「アー、アー」

と声を上げると、その人は笑顔でボクを抱いてくれたな。ボクは挨拶の代わりに、

「アー、アー」

とまた声を出すと、その人は優しい目でボクを見たのだ。

そのあとボクは、畳の上に敷かれた絨毯の上で、ボクと同じくらいの年齢の子たちと、いつものようにおもちゃで遊びはじめたのだ。

その人は、おもちゃで遊んでいるボクたちを目にしながら、パパに言ったのだ。

「このような情景はいいな」

「ええ、おもちゃを媒介にして、親は子供と遊び、会話もできますので。それにここにあるおもちゃは、子供たちの発達を助長するように作られてもいます。そのほとんどが手作りです」

パパはそう応えたあと、その人に説明したのだ。

「ハンデイを持っている幼児たちは、家からなかなか出られないのです。でも、このようなどころで、同じ悩みを持つ親がお互いに会話をしたりするなかで励まされたり、不安なども軽減されたりして、親、とくに、お母さん方が元気になるのです。連帯意識は大切なのです」

パパは、さらに続けたな。

「ここに来るには、父親が車で運転して、父親も養育の役割を知っていくのです。ハンデ

イのある子供を育てるのは、母親だけでは無理です。母親にもストレスが溜まります。それを和らげるためにも、父親そして地域の人たちの協力が必要です。このおもちゃライブラリーは、そのようなことを考慮に入れながら活動しているのです」

その人は、それを聴いたあと、ボクたちが遊んでいる輪に入ってきたのだ。と、照明が一段と明るくなって、カメラの回る音がより高くなったな。

おもちゃライブラリーに、その人は三時間ほどいてから、帰り際、優しい顔でパパとママ、それにボクを見ながら、

「このような活動が全国に広がって行くといいなあ」

と言い、さらに、

「何か書くものはありますか」

と訊いたので、ママが一枚の紙とペンをその人に渡すと、その人はその紙に、

どの花にも

草にも

どのおもちゃにも

ひとつのいのち

坂本 九

と、筆を運ばせたのだった。

それを讀んだパパは、その人が、どのような花にも草にもおもちゃにも、それぞれの命の輝きを見つめているのを知ったのだった。

パパは感動して、

「ありがとうございます」

と、その人の瞳を見ながら声を出し、手を強く握ったのだ。

最後に、その人はニッコリしながら言ったのだ。

「わたしの祖母は茨城に住んでいるのですよ。またこのライブラリーに来るよ」

それからというもの、ママはその人が歌っていた『幸せなら手をたたこう』をしばしば口ずさむようになったのだ。ボクはその歌を聞くと、笑顔になるのだった。

ある日、テレビのニュースを観ていた。パパがママに伝えたのだ。

「九さんが飛行機事故で亡くなったよ」

「まさか。そんなこと。信じられないわ」

「あの優しい目をした顔を、もう見られなくなってしまった。残念でしかたない」

ママは、深く肯いていたな。

## 第五話 心温かい二人

ボクが四歳半を過ぎた頃だった。ドイツに住んでいるママのお母さんが、ボクたちの家を訪れてくることになったのだ。ママは、「台風の季節に、日本に来るなんて」と言いながらも、ニコニコしてその日を待っていたな。

パパの運転する車が止まる音を聞いたママ。すると、ママは直ぐに立ち上がって、玄関先へ行ったのだ。そのあと、三人で居間に入ってきたのだった。

ボクは畳の上で寝転びながら、パパが作った木のおもちゃを手にして遊んでいたな。と、パパがボクを抱き上げたのだ。すると、ボクの前に、ママよりも背の高い、まだ見たこともない顔があったのだ。その時、ママがボクに、

「ここに居る人が、あなたのおばあさんなのよ」

と、言ったのだ。すると、その人はボクの手を取って、

「こんにちは」

と声を出して、青い瞳でボクを見たのだ。ボクはまだ言葉が出てこないでいたので、「アー、アー」と応えたな。

おばあさんはボクをしばらく見つめてから、ボクの頬に自分の頬を重ねたのだ。そのあと、ボクはおばあさんの胸に抱かれたのだった。

「柔らかい体だわね」

おばあさんがそう言った時だった。家の外からスピーカーを通して、ママがよく歌っていた『こんにちワ、赤ちゃん』のメロディーが流れはじめたのだ。

「あの音は何なの？」

おばあさんが、ママに訊いたのだ。

「あれは果物や野菜、それに牛乳などを車に積んで売っている人が来たことを知らせるメロディーなのよ。新鮮な食べ物があって、わたしも時々買ったりしているわ」

日本の生活に慣れてきたママは、そう説明し出したのだった。おばあさんはコートも脱がずに、ボクを抱きながら、ママの言うことに耳を傾けていたな。

しばらくすると、おばあさんは居間の簡易ソファに腰かけ、コーヒーを飲みながら、飛行機内で起こったことやママの二人の兄家族のことを話し出したのだった。

一時間もすると、おばあさんは欠伸をするようになったな。それを見たパパが、おばあさんに言ったのだ。

「疲れていませんか」

「ええ、そうですね」

「時差の違いもあるし、すこし休んだほうがいいですよ。お母さんはいつも昼寝を欠かさずにしていたし、機内ではそれもできなかったでしょうから」

「それでは、そうさせてもらおうかしら」

パパは、押し入れから蒲団を取り出して畳の上に敷きはじめたのだ。と、おばあさんが低い声で隣にいたママに、

「寝るといっても、この部屋で横になるの？」

と、ささやいたのだ。

「ええ、そうよ。そこに四枚の襖があるでしょ。それで仕切るから、向こうが寝室となつて、こちらが居間になるのよ」

ママはさらに続けたのだ。

「食事のときは、この居間がこんどはダイニングルームにもなるのよ。そればかりではなく、ここが教室にもなるのよ。今、近くのプリマム会社の社員六名に、ドイツ語を週に一回教えているわ。彼らがここに来て、ドイツ語会話の時間となるわ」

おばあさんは、ママの話を書きながら聴いていたな。驚いた様子も見せず、ママの言うことに耳を傾けていたおばあさんだった。



そのおばあさんは、一日目と二日目はママと絶えず話をしていたな。

三日目の夕方から、関東地方が台風の暴風雨圏内に入ったのだった。でも、土浦に近づくにつれてその勢力は少し弱くなり出したのだ。それでも、強い風と雨で、木枠で作られた家の窓がガタガタと音を立てて揺れ出し、横なぐりの雨が窓を沫くようにもなったな。

台風がさらに接近してくると、窓の隙間から水と風が部屋に漏れ出してきたので、パパが急いでトタン製の雨戸を閉めたのだ。でも、どこからか水と風が侵入してきたな。しかし、おばあさんは心配そうな表情を見せずに、ママと夜が更けるまで話し続けていたのだった。

翌日、ボクはベビーカーに乗せられ、ママとおばあさんと一緒に、三ヶ月前から通いはじめた地域の幼稚園に向ったのだ。

その聖母幼稚園はイギリスの牧師が運営していて、ママはその人をお願いしてボクの入園となったのだった。

ボクはやっとひとり歩きができるようになっていたが、排便はまだ一人ではできず、保育士たちを何かと悩ませていたのだった。家の中ではドイツ語、外では日本語の日々だったので、ボクの頭の中は混乱していたな。まして、筑波大学の先生がパパとママに、「ダウン症のなかでも重たいほうで、動きが多いですね」と言ったことがあったのだ。

ボクは無断で幼稚園の門から出たことも何回もあったのだ。その度に、保育士さんたちを困らせてしまったな。

でも、ボク自身、ママの自転車の前座席に乗って幼稚園へ行き、皆と一緒にいるのがたのしかったのだ。また、ママも、お母さん同士でよく話をしてたのしそだったな。ボクの誕生日には、園の仲間とお母さんたちを家に呼んだりもしていたママだった。

その幼稚園へ、ボクはおばあさんと一緒に毎日通ったのだ。おばあさんはいつもニコニコしてうれしそうな顔をしていたな。

ママが、パパに言ったことがあったのだ。

「母は、親戚の人からリンゴのおばさんと呼ばれていた」

と、話したことがあったな。

笑うと頬が赤くなるおばあさん。ボクの頬が赤いのは、おばあさんに似たのだろうか。

パパがおばあさんに、

「どこかへ行きましょうか」

と訊くと、

「娘と孫と家にいるのが一番いいわ」

と、静かに答えるおばあさんだった。

日本を発つ前日、これから寒くなるからと言って、おばあさんはママに自分の二枚のセーターを手渡し、ボクには、一カ月の滞在中に編んだ毛糸の靴下をテーブルの上に置いたのだった。

ボクは一日に何回もおばあさんに抱かれ、その胸の中にと、いつも温かさを感じていたな。

青い瞳のおばあさんがドイツに帰ってからというものの、パパはさらにおもちゃ作りに精を出していたな。おもちゃの注文は全国からくるようになり、それに追われていた。パパだ

った。そのおかげで、ボクたち家族は、時々、外食もできるほどの経済的余裕も出てきたのだった。

そのようなある日、リュウマチとパーキンソン病に患って、自分一人では歩けない状態のパパのお母さんが、ボクたちの住まいに四週間の予定で遊びに来ることになったのだ。

ボクたちはよろこんでおばあさんを迎えたな。そして、たのしい時を過ごす日々となったのだった。

そのおばあさんが東京の家に戻る一週間前、パパに、  
「よかつたら、あなたたちと一緒に暮らしたいのだけれど」

と、言ったのだ。それを聴いたパパは、すぐに返事をしなかったな。というのも、ボクがいるからで、さらにママに負担がかかると思ったからだだった。

その夜、パパはママにおばあさんの願いを伝えると、ママは躊躇もなく、「いいわよ」と返事をしたのだった。そこで、ボクは、そのおばあさんと一緒に暮らすことになったのだ。おじいさんはすでに二年前亡くなっていなかったな。

おばあさんがボクたちの住いに遊びに来る前、ママがパパに、  
「あなたのお母さんは、どんな人なの。知りたいわ」

と、訊いたのだ。その時、パパはママに語ったのだ。

「母は多くを語らず、大変苦労した人だったね。わたしの少年時代は、父が不在だったので、母は私たち子供四人を育てるために、朝から夜遅くまで着物の仕立てをしていたよ。学校から戻ると、母はいつも四畳半の居間兼仕事場で、長い裁縫台を前に座っていたね。わたしの『ただいま』の声を聞くと、母はすこし顔を上げて、『おかえり』と優しい声で返事をし、手を休めずに着物を縫い続けていたよ。私たち子供たちが布団に入ってから、隣の四畳半部屋には、ずっと明かりが灯っていたね。私たちが起きるころは、隣で寝ていた母の姿はなかったのを覚えているよ。台所のトントンという音でいつも目が覚めたね。私たちが子供を育てるのが生き甲斐と語った母だったよ」

パパはさらに続けたな。

「高校受験を前にすることだった。勉強が好きでなかったわたしだったので、学校はどこでもよいと思い、受験する高校への願書も出さずにいたのだ。

それを知った母が、

『なぜ、願書を出さないの』

と四畳半の居間で一緒に炬燵に入っていたわたしに、いつになく真剣な顔で言ったのだ。  
しばらく黙っていると、こちらを凝視していた母が、急に炬燵から出て、

『バカ、バカ、バカ』

と声を荒げて、わたしの頭を何度もたたいたのだった。

隣にいた妹が、

『お母さん、お母さん』

と声を出して、止めに入ったよ。

母にたたかれたのは、初めてだったね。いつも私たち子供の言うことに、耳を傾け、怒ったことのない母だったので、驚きのあまり、自分は何もできずにいたね。

その母は、兄の友人である慶応大学の学生に頼んで、わたしの成績がなんとか向上するようにと、中学三年から週に一回の割りで家庭教師をつけてくれたのだった。

それによって、並だった数学と英語の成績はたしかに向上したよ。家庭教師代などとも出せない家計の中で、それをしてくれたのだった。

母にたたかれたことは、それ以後、ずっと忘れたことはないね。今も骨身に応えているよ。裁縫を毎日していたせいで、指が変形してリウマチに悩まされてしまった母だった」

「そうだったの」

ママは、パパの語る話に耳を傾けながら聴いていたな。

そのおばあさんと暮らすようになってからは、今よりもやや広い住宅に引っ越しすることになったのだ。

おばあさんは、自分一人では歩けなかったので、ママはおばあさんを車椅子に乗せ、ボクが幼稚園にいる午前中は、毎日のように外に散歩に出かけていたのだ。

パパは、近くに住む主婦たちが、

「お宅の奥さんえらいですね。感心するわ」

と、言ったのを何度も聴いたな。また、おばあさんを連れて週に一回ほど通う国立霞ヶ浦病院の婦長さんも、

「親孝行のお嫁さんね」

と、褒めたのだった。

それを耳にするたびに、パパはママに感謝していたな。特に、頭を下げていたのは、夏の暑い日には三日に一回の割で、ママが体重三十六キロになってしまった寝たきりのおばあさんを抱きかかえ、一緒にお風呂に入っていたことだろうな。力のあるママだから、できたのだ。ママはおばあさんを親身になって尽くしていたのだった。

そのおばあさんから、ママは赤飯の作り方や魚の焼き方を、「おかあさん、おかあさん」と言いながら教わったりもしていたな。

パパは仕事から戻ると、先ずベッドで横になっているおばあさんの部屋に行くのだった。そのあと、ボクとママが部屋に入り、四人で今日何が起こったかを話したり、テレビと一緒に観たりの日々が続いたのだ。パパは、ママがいつもニコニコしながらおばあさんと接しているのを見るたびに、深く感謝していたな。おばあさんはボクを見ると、いつもニコツとしてくれるのだった。

そのおばあさん、身体が日ごとに衰えてしまい、要介護を必要とする高齢者ホームに入ってしまった、寝たきりの体になってしまったのだ。

ボクが土浦特別支援学校に入学して、ちょうど丸一年が過ぎた頃だったな。

夕食を終えたパパが、居間でお茶を飲みながら新聞を読んでいると、ママが寄ってきて、パパにドイツのおばあさんからの手紙を見せたのだ。

そこには、おばあさんの住んでいる五階建ての家の三階が数カ月したら空くと書かれてあったのだ。そして、遠回しにボクたち三人が、そこに住んではどうかと記されてあったのだ。

それを読み終えたパパが、ママに言ったのだ。

「お母さんは、体が弱ってきたのだろうか」

「そんなことないと思うわ。ただ、その手紙に書いてある通り、三階に住んでいる家族が引越しをするそうなの」

いつもとは違う、ママの低い声だったな。

「この手紙を一週間前に受け取ってから、彼のことを考え続けたわ。このままここで教育を受けさせていてよいのかと。そうすると、肯定的な答えがわたしのなかで見つからないの」

ママはゆっくりと自分にも言い聞かせるように言ったのだ。

それを聴いたパパは、驚いたのだった。というのも、今やつとこの土浦の地でそれなりに生活ができるようになり、これから本格的におもちゃの製作活動に取りかかり、ハンデイのある人たちと一緒に活動しようとしていたからだだった。そして、今ボクが通うようになった特別支援学校を卒業するまでに、それなりの作業所を開こうと思っていたからでもあったからだ。

パパはママの顔をしばらく見つめながら、

「このことはよく考えてから、お互いよく話し合ってから決めよう」と、応えたのだ。

それから数日間、パパはママのことを考え続けていたな。

【よくよく考えた末、妻は言ったのだ。今まで不満やグチを何一つ口に出さず、よくやってきた彼女だ。もう限界なのかも知れない。ダウン症候群のなかでもハンデイの重いほうに入る息子を異国の地で八年間育て、わたしの病身の母を二年間介護し、経済的困窮をしいたげたのだ。それに、筑波大学近くに住むドイツ人夫人から、『あなたは息子を連れて、ドイツに戻ったほうがいいのではないの?』と忠告されたこともあったのだ。その時でも、妻は、『夫と共に暮らしていくわ』と応えてくれたのだ】

そのことを、パパは思い起こしていたのだった。

パパは、さらに思ったのだ。

【おばあさんが住んでいる家の三階が空くということは、何かの縁があつてのことかもしれない。息子を中心にして動いている私たち家族だ。彼が活動し易いようにしなければならぬ。ここ土浦での本格的な作業所作りはできなくなるが、ドイツにいても何か福祉的な活動はできるだろう。おもちゃライブラリーも軌道に乗りつつある。自分がいなくても大丈夫だろうし、全国に広がっていくだろう。何よりも、浜松でわたしの願いを反対もしないで素直に受け入れてくれた妻だ】

パパはそれからママとしばしば語り合っていたのだった。

ある日、パパとママがまた話し合っていたな。

「向こうで暮らし始めたら、月々の生活費をどのようにしていいのかを考えたりするよ。自分はドイツで通用する資格はないからね。家賃も払わなければならないし」

「そうね」

「ただ、行くとなったら、やってみたいことがあるのだ。ドイツの福祉事情を書いて、自分が知っている人たちや友人たちに定期的に発行したいのだ。それと、福祉関係の人が日本から来たら、その方面の関連施設など通訳を兼ねて案内したいのだ。日本とドイツの架け橋的なことをやってみたいのだ」

「それは、いい案ではないかしら」

「ただ、それで生活費が捻出できるかどうか」

「その際は、わたしが働くわ。心配しないでいいわよ。私たちは協力して彼を育てていけ

るわよ」

パパは黙っていたな。そのパパに、ママが、

「私たちがドイツに引越したら、すぐに彼を町の特別支援学校に入れるように、今から学校当局と連絡して、手続きしようと思っっているわ」

と言うと、パパは青いたな。そして、ボクたちはテュービンゲンに移り住むことが決まったのだった。

それから出発までの半年間、ママは生き生きしていたな。その姿を見て、ボクは何かが始まるのだろうと思っただったのだった。

## 第六話 新生活

こんどの住いは、四百五十年前に建てられた五階建ての大きな石造りの家なのだ。二階におばあさんが一人で住み、ボクたち三人は三階だ。その他にも、二家族がこの家で暮らしているのだ。

この家の裏門を出ると、前にお城の門が見え、三階の住いの窓からは川が望め、飽きない眺めなのだ。

テュービンゲンの町（人口八万人）で暮らすようになって四日目だった。ボクは市郊外にある特別支援学校へ、小さなマイクロバスで通うようになったのだ。

その特別支援学校に通い出して三ヶ月が過ぎた頃、ママがパパに、

「こんどは、わたしが外に仕事に出るわ。ちようど今、テュービンゲン駅の駅ミツシヨンの職場に一つの空きがあるので、そこで働こうと思っっているわ」

と言うと、パパが、

「駅ミツシヨン？」

と、訊いたのだ。

「ええ、テュービンゲン駅構内で助けを必要としている高齢者やハンデイのある人たちに手を貸したり、時にはカバンを持ってあげたりするのよ。その他にも、ホームレスの人やお腹を空かしている人に、駅内にあるミツシヨン室でスープやコーヒーなどを出したりするわ。とにかく、駅構内にいる困った人たちを援助、世話するのが務めなのよ」

「人の助けを自ら進んでするその仕事、きみに合った職場のような気がするね。ということとは、わたしが家の炊事と家事、そして子供の世話をする主夫となるな」

「よろしくたのむわ。もちろん、わたしも母も協力するから」

「わかった。やってみるよ」

家事とボクの世話をするようになったパパ。と同時に、パパは時間を見つけては、ドイツの福祉に関するミニ情報誌を作って、日本の友人や知人たちに定期的に送る活動をするようにもなったのだ。ドイツに引越する前、パパが遣ろうと目標にしたことを実行しようとしたパパだった。また、日本から福祉関係の人たちが来ると、その関係の施設や高齢者ホームを案内するようにもなったのだ。

主夫をやり出した最初の頃、それに意味を見出していなかったパパ。でも、そのうち一

緒に住むおばあさんとの三世代家族のあり方を体験していくうちに、主夫の存在に意味を見出していったのだ。

パパは毎日の料理や洗濯や子育てをしながら、ゴミや食べ物や健康などの問題点を知り、主夫の活動は、人間が生きていくうえで最も基本的でかつ重要なことに気づいたのだった。そして、それが社会及び地域と結びついているのを発見もしたのだった。そのようなことで、パパは主夫の活動を一層深めようとしていたな。

人を妬んだり、人と競争したり、人と比較したりすることが嫌いなパパだ。家族一人ひとりが穏やかに、共に暮らそうとする役目を担う主夫の活動に、よるこびを見出していったのだろうな。そのようなパパがいつも傍にいたので、ボクはうれしいのだ。

ボクは、パパとママの他におばあさんも暮らしているのだ。そのおばあさん、ボクにとっては恋人なのだ。

学校から家に戻ると、ボクは先ずおばあさんの部屋に行き、ボクのために用意したジャム入りのパンを食べるのだ。これがとても美味しく、おばあさんとテーブルを囲みながら時を過ごすのだった。

このおばあさん、ボクが小さい頃、ボクに会うためにドイツから日本にやって来たことがあったのだ。ボクは、当時のことをまったく忘れていたな。でも、ボクはすぐにおばあさんと仲良くなったのだった。

おばあさんには、ママの他にもう一人娘がいて、その人はボクの伯母さんにあたり、車椅子で移動をしていたと、ママがパパに話したことがあった。「母は、三十七年間、体に支障を持った姉をよく介護していたわ」とママは言ったこともあったな。

その伯母さん、ボクが生まれる三年前に亡くなってしまったのだ。

そのようなハンディを持つ自分の娘との経験があったからか、おばあさんはボクをすぐに受け入れてくれて、ボクとゲームをしたり、ボールを投げたりしてよく遊んでくれるのだった。

ボクと遊ぶには、かなり忍耐と寛容が必要なのだが、おばあさんは決して怒ったりはせず、常にニコニコしてボクに接してくれるのだ。ボクはおばあさんの顔を見ると、いつもホッとして笑顔になるのだった。ボクはこのおばあさんが大好きなのだ。

ママが仕事場へ、ボクは学校へ、その間、パパが昼食を作ることになったのだ。昼食に限らず、夕食も大体パパが作るのだったが、おばあさんはお皿に盛ったものは必ずきれいに食べるのだった。今まで慣れ親しんできたドイツ料理の味ではなく、パパの醤油味となるが、すべてを食べるおばあさんなのだ。ボクは、今までおばあさんがお皿に残したのを見たことがないな。

夕食したあとは、おばあさんはいつもボクたちと一緒にテレビを観たり、ゲームをしたりして過ごすのだった。

それも終わり、階下の自分の部屋へ戻る時は、おばあさんは必ずパパに、

「ありがとう」

と声をかけ、ボクにも笑顔で、

「よく眠りなさい。また、明日ね」

と、優しい顔で言うのだった。

おばあさんのお父さんも牧師だった。その職は忙しく、家には常にお手伝いさんがいたようで、おばあさんは料理をしなかったようだ。そのようなことで、ボクはおばあさんの料理をあまり口にしたことがないのだ。

そのおばあさん、自分の衣類は自分の手で洗い、ボクたちの洗濯物を中庭に干してくれるのだ。そればかりでなく、パパのワイシャツやボクのズボンなども、アイロンをかけてくれるのだ。そのきれいに仕上がった服を着ると、パパはいつも心までも温かくなるとママに伝えていたな。

そのおばあさんに、ボクは心配をかけさせてしまうこともあるのだ。それは、ボクが町の中で時々迷子になるからだ。警察のお世話になったことも二回あったな。衝動的にボクの体は動き、ママやパパから離れてしまい、一人でバスに乗ったこともあったのだ。

ある時、ボクはまた迷子になってしまい、八時間以上もおばあさんやパパやママに心配をかけさせてしまったことがあったのだ。

警察署にいるボクを、パパとママが迎えにきてくれて、そのあと家に戻ったのだ。

家に帰ったボクは、おばあさんの姿を見るや、大きな声を出して、

「おばあさん、おばあさん」

と、駆け寄ったのだ。と、おばあさんはボクを抱きながら、

「どこにいたの？」

と、優しい声で言ったのだ。ボクは、おばあさんの胸に顔をあて続けていたな。

少しすると、おばあさんがママとパパとボクの顔を見て、

「みんな、お腹が空いたでしょう。今日は、わたしが夕食の支度をしましたよ」

と言いつつ、キッチンへ向ったのだ。居間のテーブルには、おばあさんが用意したお皿がすでに並んであったな。

ジャガイモスープの鍋を持って、おばあさんが居間に入ってきたのを見た時、ボクは今までのことはすっかり忘れてしまい、笑顔となったのだ。

湯気が昇っているスープとパンを前にしての夕食になったのだ。

ママがスープを飲みながらボクたちに、

「彼が買ってきた今日のパンは、何か特別な味がするわね」

と言いつつ、パパが、

「苦かったり、甘かったり、複雑な味だね」

と、応えたのだった。

おばあさんはスープを飲んでいるボクを見たあと、パパに、

「これを食べたら、明日はまた新たな一日のはじまりとなりますね」

と言いつつ、ママもママも肯いたな。

ボクたちは、「美味しい、おいしい」と声を出しながら、スープを飲み続けたのだった。

ボクはおばあさんという、いつも心がウキウキしてたのしくなってくるのだ。クリスマスの時もそうだ。イブの夕食はこの地方の習慣に従って、ボクたち四人はジャガイモのサラダとソーセージで簡単に済ませてから、昨日ボクとパパが飾りつけをした高さ二メートル近くの樅の木に立つ七本のローソクに、パパが火を灯すのだ。そうすると、ボクはもう何をするかを知っているの、賛美歌集を本棚から取り出して、パパに渡すのだ。そして、皆で一緒に歌を唄うのだった。

パパは音痴なので、ママの声に併せ、ボクは口を開け、「アーアー」と声を出すのだ。おばあさんの声はママに似てきれいで、その歌声がローソクの炎を揺らすのだった。

ボクの横に座っているおばあさんの顔を見ると、いつもよりもほっぺが赤く、いかにもうれしそうな顔なのだ。と、ボクの心はウキウキとなつてたのしくなり、自然と笑顔となつてくるのだった。

また、ボクのおばあさんは優しいのだ。おばあさんと昼食を摂っていると、開けっ放しにしていた窓から、蜂がボクのリンゴジュースのコップに入り、コップから出られずにいたことがあったな。

ボクがおびえた目でそれを見ていると、おばあさんはその蜂を自分の両手で包み、窓から放したのだった。

パパが、

「刺されませんか」

と訊くと、

「今まで刺されたことはありませんよ」

と、おばあさんはニッコリした顔で答えたのだった。優しいボクのおばあさん。そのおばあさんの前でボクの育て方で、パパとママが口喧嘩したことがあったな。パパもママも思っていることは、口に出して言うほうだから、結構激しくなつたのだ。

ボクは争いごとを見るのが一番いやなのだ。まして、ボクの前でパパとママが言い争うのは最も嫌なのだ。その時、おばあさんがやわらかい言葉を二人にかけて静まり、ボクはホッとするのだった。

なにしろ、ボクは感受性が強いほうなので、パパとママの気持ちを汲んだりすると、頭の中が混乱してしまうのだ。と、不安になって、心が意固地となつてしまう時もあるのだ。

ボクは言葉で、自分の意志を表現できない。そのようなボクの傍に、おばあさんがいてくれるので、うれしいのだ。

## 第七話 排除しない社会

特別支援学校に通って二年が過ぎた頃だった。パパがママに話したのだ。

「彼のクラスには、年齢が異なる子供が三人いるね。学習能力も差があつてバラバラで、彼らはいつも一緒になつて授業を受けてないよね。たとえば、読み書きでも、まだその段階に達していない子は下のクラスに参加したり、それに言語治療士が一对一で発音訓練を指導したり、また、とくにできる子は上のクラスにいたりして、その子に応じた授業を受けているね。日本でも一人ひとりの子供の学習能力や、生来の素質に応じた学習ができるように、プログラムがつけられてるが、日本では主にそれらは集団のなかの力動性によつて教育される面が強いね。でも、こちらではそれぞれの子供の能力に応じて個別的に学習が行われる場合が多いね。授業も幅広い多様性のなかで教育されているし、一人ひとりの個を尊重した教育のように映ったね」

パパはさらに続けたのだ。

「特別支援学校の先生も一般の先生のように、週二十八時間労働だね。土・日以外に週一



日休みが取れるので、ゆったりと教えているように思えるね」

ママは肯きながら、パパが話すことに耳を傾けていたな。二人とも、ボクが通っている学校に満足しているようだった。

そのパパとママ、日本にいた時は、ボクを地域の普通幼稚園へ行かせた経験もあって、ボクがこちらの特別支援学校に通い出してしばらくしてから、担当の先生に、地域の普通学校へボクを週に一、二回通わせたいと希望を伝えていたのだった。

それからしばらくして、特別支援学校と普通学校の先生二人が話し合い、ボクはクラスの仲間一人と一緒に週二回ほど、午前中の授業に二年間通うことになったのだ。こちらでは、二人の先生がお互い話し合い、承諾すれば、それは可能なのだった。

そのことを、パパとママはともよるこんでいたな。二人とも実現可能は難しいと思っていたようだったからだ。というのも、ボクが住んでいる州では、統合教育をまったく行われていなかったからでもあった。

でも、ママとパパの熱意が、特別支援学校と普通学校の先生二人に伝わったのだ。

パパとママがこの普通学校の父兄会に招かれた時、パパが集まった親たちの前で語ったのだ。

「ハンデイがあるなしに拘わらず、子供同士がお互いに遊び学ぶことは現在だけでなく、将来も意義があることです。今後、この州の学校当局がどのような判断を下していくのかわかりませんが、是非統合教育を進めてほしいのです。ただ、残念なのは、週二日の午前中だけで、果たして真の交流ができるでしょうか。先生方も中途半端でやりづらいのではないのでしょうか。二年間で終えるのはさびしいことですが、その期間、息子は地域に住む子供たちと知り合いになり、今後いろいろな面でお互い関係を持つことが、親としてはうれしいのです。通りで息子に会ったら、ぜひ声をかけてやってください」

パパは大勢の人の前で、ドイツ語で語るのを苦手としていたが、ボクのことになると勇氣が出るのだ。そのあと、ママも同じようなことを言ったのだった。

この普通学校で、ある時のことだった。ボクは、パパとママが作ったまぜご飯を、皆と一緒に食べていたのだ。ボクが箸でご飯をすくっていると、まわりの仲間も真似して箸を使おうと試みたが、難しいのか、皆フォークで食べ出したのだ。それを見たボクは、皆と同じようにフォークを持って食べ出したのだ。ボクも自分から皆に合わせようとして、インテグレーションをしたのだった。

この学校に週二回通っていた頃、ママとパパは町の図書館で布の絵本展を開いたのだ。ボクが日本に住んでいた時、パパは布の絵本を作っている横浜の布のグループと交流をしていて、そのグループの人たちがボクに三十種類以上の布の絵本を送ってくれたことがあったのだ。その絵本を、ママは町の子供たちにも見せようとしたのだった。また、ママが日本にいた時に集めた二百冊以上の絵本も一緒に、展示したのだった。

二ヶ月間展示して、町に住む多くの子供たちとその親たちが見学に訪れていたな。ボクが普通学校で知り合った子供たちも来てくれて、一緒になって布の絵本で遊んだのだ。

この国には、布の絵本はなく、皆驚きの目を向けていたな。絵本に書かれてあった日本語は、ママがドイツ語に訳してあったので、わかり易かったに違いない。

このような機会を通して、ボクは学校での時間だけではなく、それ以外でも近所の子供たちと知り合いになっていったのだ。ボクはこのようにして、この町の住民となつてのだ。

この布の絵本展はとても好評で、近くの町々や特別支援学校からも展示の要望があったりして、貸すことにもなったのだ。ボクは日本のお母さんたちが作った、この布の絵本に誇りを感じたな。

また、ボクが住んでいる町では、夏休みの期間、六歳から十五歳までの子供たち四百名が、前期と後期の三週間、毎朝八時半から夕方六時半まで、一グループ二十名前後で近くの森の中で泥んこになって遊ぶプログラムがあるのだ。ボクも、もちろんそれに参加して、地域の子供たちと一緒に遊ぶようにもなったのだ。

そのようなこともあって、近くに住んでいる彼らと通りで会うと、挨拶をするようにもなったな。これが、ボクにはとてもうれしかったのだ。ボクもここで暮らしているのだから。また、知り合った彼らも親たちもボクの家に来て、一緒に食事をするようにもなったのだ。

このようなことをしていると、今まで週二日通っていた学校の通学が、二年間だけではなく、さらに一年間延長になったのだ。パパとママはともよろこんだな。もちろん、ボクもよろこんだのだ。

パパがママに言ったのだ。

「彼ともう一人の生徒だけでなく、特別支援学校の他の生徒たちも同じように普通学校に通えるようになるといいな」

「そうね」

そのようなことをしていると、学校だけではなく、町の行政も動き出したのだ。

町に住むボクたち仲間五十名と、市長及び数名の市議員との話し合いが、ある日もたれたのだ。

この話し合いの前、ママがパパに言ったのだ。

「テュービンゲンの市会議員は六四名で、そのうち女性は三分の一。それに、ほとんどの議員は何らかの職業を持っているのよ。学校の先生とか弁護士とか医者とか。とにかく彼らには、議員としての給料が無いのよ」

「給料がない？」

「そうなの。でも、週に一回開かれる市議会と、各種専門委員会に出ると、わずかに手当を得るようだけれど。それでも一回の議会に、四千円もいかないよ。ただ、市長は給料をもらえるけれど……」

それを聞いたパパは、「それは驚きだな。まさに市民による政治だな」と応えたのだ。

ボクはパパとママに連れられて、マルクト広場前に建つ、十五世紀に造られた大きな市庁舎内の大会議室で催された『市長と知的ハンディのある人たちとの話し合い』へ向かったのだ。

いつもは議員たちが座る席に、ボクたちは腰かけ、自分たちの希望をのべはじめたな。ボクたち仲間の一人が立ち上がり、前もってノートに書いた文をゆつくりと読み出したのだ。

「町の真ん中に、ハンディのある人もない人も常に出会えるようなカフェー店を設けてほしい。町がその店の家賃を、そして残りの費用は私たちが払い、その店を運営したい」それを聞いた福祉事務所の所長が、応えたのだ。

「そのようなカフェー店は隣の町にもあって、多くの出会いの場ともなっているし、テュービンゲンでもそれを実現するようにします」

続いて、ボクよりも十歳ぐらい上の女性が、マイクの前で、はっきりした声を出して、自分で書いた文を読み上げたのだ。

「わたしには友人が一人もいません。たまには町へ出て、レストランにも行きたい。テレビばかりでは退屈です。両親は年をとってきているので、一緒に町へは行かれませんか。時々兄とは散歩しますが。そうすると、道行く人は、わたしをじっと見つめます。歩き方がおかしいから。まわりの人におかしな者とみられたりするぐらいなら、家にいたほうがいいのかも。それでも、町へ出たいのです。そのようなわたしに、誰か付き添ってくれる人がいるとうれしいのです。そのような人が出てくるのを待っているのです。市長は、ハンデイを抱えて暮らしている人も正常な人であると、すべての人に言ってほしいのです」

市長が立ち上がったな。

「町にはいろいろな人が住んでいます。もしそうでなかったら、町は退屈になってしまいます。もちろん、ここにいる皆さんも町に所属しています。私が正常で、皆さんが正常でないと言えませんか。私が正常でないと言えませんか。もしも誰か付き添ってほしいのです」

こんどは、二十歳前後の若い女性がしゃべり出したのだ。

「今、付き合っている彼と結婚したいの。この市庁舎の戸籍室で結婚できますか。もし結婚したら、誰も私たちを離すことはできないわ」

それを聴いた市長が応えたのだった。

「結婚するには、経済的なことも考えねばならないでしょう。経済的なことを考えた上で必要な書類を揃え、戸籍係に提出してみたらどうですか」

次にボクよりも二十歳以上も年上の人が話したのだ。

「僕は夕方、そして週末にも友人の家を訪れたいが、市内以外の区域では、その時間帯にはバスが走ってないので困る。各路線バスは色分けをしてわかり易くしてほしい。また、時刻表は文字が小さすぎる」

それにたいして、一人の議員が応えたのだ。

「昨年、障がい者センター前にもバス停を設けました。確かに時刻表の文字は小さく、読みづらいですね。もうすこし大きくするように働きかけてみます」

次に、ある人が言ったのだ。

「自分が働いている作業所には一般のバスが止まる停留所がないので、作ってほしい。お願いします」

議員と市長は、その要望を手帳に書いていたな。

少しすると、ボクが町の中でよく見かける、車イスにのった人が語ったのだ。

「僕は市議会のなかで働きたい。そして、町がつくる規則、とくにバス運行についての協力がほしい。僕はどこに何が欠けているかを知っているから。しかし、僕は字を読むことができない。それでも協力可能ですか。それから市議会のなかで、ハンディを持つ人たちが代表している議員はいますか」

一人の議員が答えたのだった。

「議会では多くの書類があって、字が読めないと議会のなかで働くことは難しいかもしれない。ただ、皆さんが市議員に電話して、皆さんの要望なりを伝えれば、その議員がこの

議会のなかで話をするでしょう。ハンディを抱えている人たちを代表している議員はいません」

次に二人が同時に立ち上がり、そのうちの付き添いである人が紙に書いた文を読み上げたのだ。

「町の真ん中に、少人数制のグループホームがあるとうれしい。そうすれば、バスでも電車でも容易に乗れるし、スーパーマーケットやパン屋、郵便局に一人でも行けるし、自立できるのだから。また町の通りも車椅子で容易に動けるように、そして道路標識などは目立ちやすいシンボリックなものにしてほしい」

その他にボクたちの仲間は、いくつかの援助を要望したのだった。

二時間の話し合いの最後に、市長が述べたのだった。

「皆さんに何かの問題が生じたら、新聞などの市民の声欄に、皆さんの要望を訴えるようにしてください。誰かが皆さんのところへ行き、そして皆さんの願いを聞き入れるまで待っていてはいけません」

市長も議員もボクたちの言うことに耳を傾け、とても良い対話時間だったな。

翌日の新聞に、この話し合いの記事が載り、多くの人が読んだことだろう。

パパとママは、「地域の中で、ボクたちの生活ができる限り通常の生活条件に近い状態で行われる」というノーマライゼーションの考えに、とても熱心なのだ。ボクたちが誇りと自信を持って、地域の中で暮らしていけるように見守っているのだ。

ボクたちも、一人ひとりが、その人に合った中で生きていかねば。パパとママは、ボクたち一人ひとりの命が光り輝くような社会であるように願っているのだ。そして、どんな人でも、排除されないでいられる社会を目指しているのだ。

ボクらは黙ってはいけけないのだ。自分の思いを主張しなければならぬのだ。地域の中でたのしく暮らすためにも。ボクは皆の発言から、勇気をもったな。

ボクは皆の前で何も言わなかったが、毎日の暮らしの中で、自分自身を出しているのだ。

たとえば、買物でもそうだ。

学校のない日は、ボクは一人で家から百五十メートル先のパン屋に行き、焼きたてのパンを十個買ってくるのだ。

買ってきたパンをママに渡すと、「ごくろうさん」とママはいつも笑顔で浮かべて言うのだ。そうすると、ボクも笑顔になるのだった。そのあと、パパとママそれに一緒に住んでいるおばあさんとの朝食になるのだ。

そのおばあさんが、

「彼が買ってきたパンは、いつもおいしい」

と、いつも言うのだった。

パパとママは、将来はボクが家から歩いて一分もしないマルクト広場で開かれている朝市で、一人で買い物できるように望んでいるが、ボクは先のことによくわからない。ボクは、今の自分を有りのままに出しているの、未来のことは頭の中にまったくないのだ。

その他にも、学校のある日は、四時に家に帰るので、パパと買物に出かけるのだ。

パパが、「今日はマーボー豆腐にするよ」と言うと、ボクとパパは自然食料店に行き、ボクが豆腐を見つけ、それをレジに持っていくのだ。お金の勘定はできないボクなので、パパが支払い、つり銭をボクがもらい、パパに渡すのだった。

次は、いつも行く肉屋で豚挽き肉を買うのだ。ボクはこの店の馴染み客となっているので、おばさんが必ずハム一枚をくれるな。これがまた美味しいのだ。

それから、マルクト広場に面した小さなスーパーでいくつか必要なものを買って、レジでパパがお金を払っている間、ボクはレジ係の人からいつもアメ玉を二つ、三つもらい、外に出るのだ。でも、ボクはアメやチョコレートはあまり好きでないで、それをパパに渡すと、パパはそれを口に入れるのだった。

パパは甘いものが好きで、歯が痛くなると近くの歯医者のところによく行くが、ボクは年二回の歯の検診でいつも虫歯がなく、褒められるのだ。寝る前に、パパが歯磨きの指導をよくしてくれたからだろうな。自分の歯の痛みを、パパはボクにさせたくないのだろうな。

そのあと、マルクト広場でいつもお店を出している八百屋へ行き、パパがネギや果物を買っている間、ボクは近くで奏でているストリートミュージシャンの音にあわせて、体を動かしたりするのだ。と、まわりの人は、音に合わせて踊るボクの姿を見て、ニッコリとする人も多いな。特に、女の人が微笑んでくれるのだ。ボクは自分を出しているだけなのに。

パパとボクは、時々チュービンゲン駅から出る電車に乗り、隣の駅まで二人で買物に行くことがあるのだ。

ボクはハンディのある人たちが所持している手帳を持っているので、ボクとボクに付き添う人はドイツ国内の乗物なら、どこに行こうと無料なのだ。

車内に車掌が来ると、ボクは自分の手帳を見せるのだ。車掌はもうボクのことを知っているの、検札をしないことも時々あるな。その時は、車掌のあとを追って行って、自分の手帳を見せるのだ。

パパは電車に乗っているのが好きで、黙ってよく外を眺めているな。その時は、ボクも外を見ているが、時々退屈になるので、パパの足を蹴ったりして、

「話しをしてくれ、遊んでくれ」と、意思表示をするのだ。そうすると、パパはボクに話しかけてくれるのだ。

ボクは特有な顔をしているし、パパは髪の毛をうしろで結んでいて、この町でも近くの町でも、「何か変わった父と子」と見られているようだが、パパはそんなことにお構いなく、ボクと一緒に買物をするのだ。

パパは、ボクと一緒にいる時がたのしそうで、それはボクも同じだ。買物だけではなく、夏休みもたのしいのだ。ママとパパと一緒に毎年山登りをするからだ。

## 第八話 アルプスの夏

ママが、コップに入ったリンゴジュースをパパに手渡しながら、訊いたのだ。

「チュービンゲンを発って、もう六時間が過ぎたわ。あとのくらいで着くの？」と訊くと、パパは片手でジュース一気に飲んだあと、

「オーストリアとイタリアの国境を越えてからに一時間経ったので、あとすこしこの高速

道路を走り続け、四十分後には、目的地の地であるザイス村に到着するよ」と、答えたのだった。

ボクもママからジュースをもらい、それを手にしながら、窓の外に映る山々を眺め続けていたな。

少しすると、ママが体を半ひねりしながら、

「向こうの山々の頂上近くにある白い形をした雪を見てごらん。ほら、あれはウサギのような姿だわ。その隣はウシのようね」

と指差しながら、言ったのだ。ボクは、肯きながらその方向に目をやっていたな。

車が高速道路から出ると、まわりは草原となったのだ。と、ママが、

「赤や白や黄色の花々が見えはじめたわね」

と、声を出したのだった。それを聞いたパパが、言ったのだ。

「今年は、いつもよりも早い山歩きとなったね。この六月下旬は山が開くときで、一斉に花が咲きはじめるころなのだよ」

「そうなの。今年の山登りは、わたしの希望が叶ってうれしいわ。以前から、高山植物の花が咲き揃う時期に、山に入りたかったから。胸がワクワクしているわ」

ニッコリしたママの顔だ。

目的地に到着したボクたち。パパは早速村の観光案内所へ行き、これから九日間宿泊する休暇用貸住宅がどこにあるかを聞き、ボクたちはそこへ向ったのだ。

その貸住宅の玄関のベルを、ママが押すと、頬が赤くなった、腰の曲がったおばあさんが出てきたのだ。そのおばあさんと、ボクたちは挨拶をしたのだ。そして、そのあと、おばあさんが住宅内を案内してくれたのだった。

そのおばあさんと別れたあと、ママがパパに言ったのだ。

「住居内は広いわ。三つの部屋とキッチン付きで一人千六百円、安いわ。それに、見晴らしのよいバルコニーもついているわね。村はずれの森近くに建っているし、気に入ったわ」

パパは肯いていたな。

翌朝、ボクは小鳥たちの鳴く声で目が覚め、バルコニーに出たのだ。と、パパとママもバルコニーに立っていて、二人で話していたな。

「小鳥たちがピーピー、キュロキュロ、ヒューヒューヒと明るい声で鳴いているわ」  
「さっきから聞いているのだけど、鳥たちの大合唱だ。こんなにも鳴き交わしているのを今まで耳にしたことがないよ」

「わたしもよ」

パパは、前に立ち並ぶ大きな木々を眺め続けていたな。と、ママが、  
「あら、カッコー鳥の呼ぶ声だわ」  
と、声を上げたな。

ボクたちはパジャマ姿のまま、小鳥たちの声を聞き続けていたのだ。

朝食を済ませてから、パパは昼食用のおにぎりを作り。ボクがそれを見てみると、パパが一口で食べられそうな小さいおにぎりをボクにくれたのだ。それを口にしてしまうと、お昼に大きなおにぎりを食べるのがたのしみとなったのだ。

朝食の片づけをしてから、山登りの準備を終え、今日の目的地へ車で向ったボクたち。十分もすると、パパがママに、

「ヨーロッパの中で一番広いとされている、緑の高原地ザイサーアルム（標高一八〇〇メートル）まであとすこしだ」

と伝えると、ママがパパに言ったのだ。

「どのような花が咲いているのかしら。透いた青空だし、あとすこししたら、天気はよくなるわ。歩くのがたのしみだね。あなたも花の名前をいくらか覚えてでしょ？」

「毎夏、アルプスに来て、きみから教わっているの、だいたい覚えてたよ」

車は、薄暗い森の中をゆっくりと走り続けていた。すると、急に目の前が明るくなり出したのだ。それにつれて、草の匂いが漂いはじめてきたのだった。

さらに進んでいくと、パパが、「車は、これから先は入れない」と言ったのだ。そこで、ボクたちは車から降りて、小さなリュックサックをそれぞれ背負い、歩き出したのだった。十分もすると、ママが声を上げたのだった。

「今までうつすらと立ち込めていた朝霧が晴れて、濃い青空が見え出してきたわね。山の新鮮な大気が体中に流れ込んでくるわ。爽やかな気分になるわね。あたり一面緑の草原。なだらかな曲線の道が、数キロ先まで続いているわ。優美だね」

パパは、草原の奥に望める高い岩峰を眺めながら歩いていった。そのパパが、ママに説明し始めたのだ。

「向こうに見える三千メートルの岩峰群には、ドロミテ特有のマグネシウムが含まれているのだよ。どの峰々も、天を突くように連なっているだろ」

「怪奇的だね」

しばらくすると、ボクの前を歩いていたママが、足元に咲いている花々を見ながら、「あ、これはアネモス、トリカブト、キンバイソウ、アザミ……」と声を上げたのだ。

歩き続けていたボクたち。ママが立ち止まり、小さな花を指差したのだ。

「あなた、見てよ。息を飲むほどの鮮やかな青紫色したエンチアン（リンドウ）だね」

パパはその花をじっと魅入っていたな。

ママが、まわりに咲く花々を目にしながら、また弾んだ声を出したのだ。

「高山植物が競い合うように咲き乱れ、あたり一面がいろいろな色をした花々で膨れ上がっているわ。花に優しく迎えられたような気分になってくるわ」

柔らかい土道を踏み続けていると、ボクの山靴が沈み込んでいった。と、体が浮いたようになるのだった。

ママが感嘆した声で言ったな。

「見渡すかぎりの大草原だね。緑と花と岩とが視界を独占していて、まるで絵本のなかに出てくる光景だね。それに、牛のカウベルの音色が風に乗って、あたりに響き渡っているし」

ボクは、道行く人とすれ違うたびに、「モルゲン（おはよう）」と声をかけていた。すると、相手からはボンジョルノ、グッドモーニングなどの言葉が返ってくるのだった。ボクは笑顔を浮かべながら、ルンルン気分だ。

夕方の五時近くに宿に戻ると、疲れが出て、棒のようになった足をソファに伸ばしたボクたち。すると、外で鳴いている小鳥たちの声が聞こえてくるのだった。

パパが、呟くように言ったのだ。

「彼らと一緒に歌っているような気持ちになってくるな」

しばらくしてから、ボクとパパはバルコニーに出て、長椅子に体を横たえたのだ。少しすると、パパが呟いたのだ。

「沈みかけた朱色の陽が、松の樹間からキラツキラツと射し込んできて、夕暮れの光り輝いている星のようだな。心が洗われ、解放された気分になってくるな」

パパは若い頃、山小屋の主人になりたかったとママに話したことを、ママから聞いたことがあったな。新婚旅行は、山登りだともママは話してくれたな。

ボクは、パパと一緒に、目の前で輝くように咲いている赤や黄色の花を見るではなしに眺めていると、ウトウトとなつてしまい、眠ってしまったのだ。

翌日も翌々日も、ボクたちはこの草原が気に入って、澄み切った青空の下、毎日十キロほど歩き回っていたのだ。

そのあとの二日間は雷のともなう雨だったので、部屋の中でゲームをしたり、外に買物に出かけたりして過ごしていたのだ。時々、雷が鳴り響くと、ボクはパパの傍に行くのだ。そうすると、パパが、

「明日は、晴れるぞ。きっと晴れる。そうしたら、また山歩きだ」と、言ったのだ。

二日間、降り続いた雨が止んで、ボクたちが期待していたような青空になったのだ。車に乗り、しばらくいくと、高い山々の連なりが目の前に現れ出てきたのだ。

ママがパパに、話しかけたのだ。

「あの山を登るの？」

「ああ、薄ねずみ色をしたいくつもの険しい岩峰が、角を立てたように天に向かって聳え立っているだろ。ローゼンガルテンという山だよ」

「数日前に目にしたお花畑とは、まったく違う景观ね」

「これからは、本格的な山登りとなるよ」

車から降りてから、二人乗りのリフトに乗ったのだ。ボクはパパと一緒に怖くはなかったな。隣に座っているパパが、

「標高二三〇メートル地点まであとすこしだ」

と、言ったな。

岩場の狭い道を南へ向かって登り出したボクたち。少しすると、ママが、「周囲には樹木はなく、岩だらけね。岩場の合間に、薄黒くなった残雪がこびりついているわ」と手に息を吹きかけながら声を出すと、パパが、

「朝日は反対側の岩壁を照射しているので、こちらは日陰だ。吐く息は白く、立ち止まると、ヤツケを着ているも身震いするほどの寒さだな。このようなときは、歩き続けることだ」

と、応えたのだ。

二十分もすると、ボクの体は少しずつ暖かくなり出したな。それにつれて、前に出す足の運びがスムーズになっていったのだ。ママが足もとに目を落としながら、前で歩いているパパに、

「ピンク色の小さな花シレネ・アカウリスだわ。大きな石の上に張りついたように密集して可愛いわね」



と言うと、パパが、

「草原に咲く花もいけれど、このような険しい道を踏みながら、ふと出遭う花もいいね。花と交差する瞬間、『ああ、きれいだ』と感嘆の声は自然と出てくるよ」

と、応えたな。そして、続けたのだ。

「高山に咲く花は、身丈が低く葉も小さいが、品と気高さを備えているね。そして、なによりも清楚さがあって、可憐だ」

二人ともその花をじっと見つめていたな。

再び歩き出したボクたち。しばらくすると、パパがママに言ったのだ。

「陽が次第に高く昇るにつれて、前に立つ岩壁に朝日が照りはじめたな。ここが、赤い壁と呼ばれているところの直下だよ」

「大きな岩だわ」

「直立するこの大岩壁に落日の陽があたれば、赤みを帯びるらしいよ。その残照はさぞ美しいだろうな」

ボクたちは、しばらく大きな岩のまわりを歩き続けていたのだ。そして、こんどは下り道となったのだ。さらに下って行くと、ママが、

「今までの砂道から土の道に変わった途端、何種類もの高山植物が目の中に飛び込みはじめてきたわ」

と、声を出したのだ。

ママはしばしば足を止めては、「これは、何々よ」と花の名前をボクたちに言い続けながら歩いていったな。

急な坂道になった時だった。道端に浮いていた小石に、パパは足をとられ、山側の斜面に尻もちをついてしまったのだ。と、パパが声を発したのだ。

「あつ、こんなところに！ 岩石の裂け目にアルプスの星と呼ばれる花が、四つ咲いているではないか。エーデルワイスだ」

「えっ、本当なの？」

ママが、パパのところへ駆け寄ったな。

「自生のは初めてだわ。人工栽培で、何回も目にすることがあったけれども、ここで出遭うとはね」

二人はしばらくの間、その花に目を注ぎ続けていたな。その二人の姿を見て、ボクはニコニコ顔だ。

さらに下って行くと、ママが、

「松と樅の樹海の中に入ったわ。今までの暑さから、急に涼しくなったわね。樹と土の香りを帯びた大気が、肌にとても心地良いわ」

と声を出し、エーデルワイスの歌を唄いはじめたのだ。ボクはそれを聞きながら歩き続けていたな。

翌朝、ボクが寝室のカーテンを引いて外を見ると、昨日と同じような青空だ。

宿のおばあさんがママに、「今、アルペンローゼ（アルプス石楠花）が誇るように咲いているところがあるから、そこへ行ってみたら？」と勧められ、ママがそれをパパに伝えると、「よし、そこへ行こう」とパパは肯いたのだった。

車に乗って、しばらく走り続けてから、リフトで目的の地点（高さ二二五〇メートル）

で降りたボクたち。すぐに歩き出すと、パパがママに説明したのだ。

「あの正面の大岩山(三二五メートル)は、セラ岩峰群。その右手奥に急峻な岩山ラングコツヘル(三二三八メートル)が雄々しく聳え立っているだろ。学生時代、あの周辺の山々を歩いたことがあったよ」

「そうなの。まるで大巨岩が、突如平たい地盤を突き破って出てきたかのような格好ね。なんて偉容な山なの。現実の世界とは思えないわ」

ボクたちは、草原の尾根道を歩き続けていたな。ママがまわりに咲いている花を見ながら、呟いたのだ。

「黄色い丸いキンバイ草だわ。それに、色鮮やかな青紫色をしたリンドウと小さなアザミが、競い誇るかのように咲いているわ」

十分もすると、真紅の色をした花々が現れ出たのだ。それを見たパパがママに、「つつじ科の花アルペンローゼだ」

と言うと、ママが、

「赤い帯状が、百メートル以上もなびいているわね。なんて深みのある色なの」と、大きな声を出したのだった。その花々を眺め続けていたパパとママだ。

一時間近く稜線を歩いていると、松と樅の樹で覆われた森の中に入ったのだ。と、ママが、言ったのだ。

「今までの強い日差しから解放されて、急に辺りが薄暗くなったわ。爽やかだわ」と、声を出したのだ。

さらに行くと、パパが低い声で、

「あ！鹿だ。それも二頭だ」

と、言ったのだ。うしろにいたママも、

「ええ、わたしも見たわ」

と、合槌を打ったな。

鹿は、ボクたちの行く先を案内するかのようには、時々、姿を現しては消えていったな。森の奥へどんどん進んで行くと、パパが、

「無人の小さな丸太小屋だ。ちょうど、昼食を摂ろうと思っていたところだ」と言ったので、そこでおにぎりを食べることになったのだ。

小屋前の広い草原に座り込んだボクたち。まわりには色々な花が咲き、近くを流れる沢の音を聞きながら、かつおぶしと梅干入りのおにぎりを食べ出したのだ。そのあと、草の上で三人とも体を横たえたのだ。

ボクは目を開けながら、青い空にポツカリと浮かぶ白い雲を見ていたな。すると、ママがパパに話しかけたのだ。

「この姿勢から眺める花は、今までとは違った姿に見えるわね。蝶たちが花から花へと飛び廻っていて、長閑ね」

「そうだね。風によつて、松ヤニの甘酸っぱい香りが漂い、自分の存在さえも、時の流れさえも忘れてしまうな」

ボクたちは、柔らかい草の上に体を横たえ続けていたな。

昼食を終えてから、再び歩き出すと、こんどは今までとは違った急な下りとなったのだ。と、パパがママに声を高くして言ったのだ。

「地図にも記されていない健脚向きの道だから、彼の手を握って下りるから、きみは慎重に足を運んでくれ。とくに、枯れた松葉が地面に一センチほど積み重なっているので、足をとられやすいので、気をつけてくれ！」

ママは、怖がりではしなかったが、「早く、このくだりを終えたいわ」と声を出しながら、ボクとパパのうしろを歩き続けていたな。

ボクたちは、一步一步足元を確かめながら下っていったのだ。

しばらく続いた急傾斜の途中、ママは一回、ボクは二回ほど転んでしまったな。でも、ボクはパパと手をつないでいたので、安心して歩いていたのだった。

やっと緩やかな道に出た時、ボクたち三人とも笑顔で、

「やった！」

「やったね！」

と声を上げながら、ハイタッチをしたのだ。

パパは何も起こらなかったたので、ホッとしたような表情だったな。そのパパがママに、言ったのだ。

「登山者の姿がないこの道で、急に雨に降られたらと思ったら、ゾツとしたよ。恵まれたと感謝しなければならぬ。まして、彼の筋力は弱いので」

「そうね。でも、毎年の山登りで、彼の足は鍛えられているわね」  
それを聞いたボクはニッコリだ。

宿に戻ると、ママが、「疲れが急に出てきて、わたしの両足の筋肉が張り出してきたわ。痛みもすこし走りはじめたわ」と声を出したので、夕食を済ませてから、ボクたちはシャワーを浴び、早々にベッドに潜り込んだのだ。

翌朝、起きると、昨日の疲れが三人ともまだ残っていたので、一日中、宿でのんびりと過ごすことになったのだ。

最後の日の夕食は、ママの案で、宿から歩いて十分ほどの丸太造りの山荘風レストランで摂ることになったのだ。今回の山旅で、初めての夕食だった。

中庭に置いてある分厚い木の丸いテーブルを囲んでの夕餉。ママがワイングラスを手をしながら、

「夕陽に照らされたシュレーンの大きな岩山、美しいわね。岩壁が時間を追うごとに、オレンジ色から淡い赤に変わり、やがて今は濃い赤色になったわね。なんとという色彩の演出なのでしょう」

と明るい声を出すと、パパが、

「光が醸し出すスペクトルだ」

と、満足そうな顔で応えたな。

ママとパパがグラスを重ねると、その音色があたり一面に響き渡ったのだ。

ママがグラスを手をしながら、

「アルプスの三大花といわれているエンチアン、エーデルワイス、それにアルペンローゼを見たわね」

と、パパとボクを見ながらニッコリして言い、陽に焼けた顔にワイングラスを近づけたのだ。パパも、グラスを持ったのだ。

「明日から、またチュービンゲンでの生活になるな。彼は特別支援学校へ、きみは職

場へ、そして、わたしは主夫の活動だ。三人ともここでエネルギーを得て、戻るのだ」

「そうね。自然から力をもらったわね」

ママがそう応えると、パパはお皿に盛ったものを食べながら、

「このような自然のなかにいると、自分が素直になっていき、謙虚になるよね」と、声を出したのだ。それを聴いたママが、

「有りのままを出している彼のようになるわね」

と、同調したのだ。そして、ボクを見ながら、

「たのしかった？」

と訊いたので、

「ヤアー(ウン)」

と、笑顔で答えたのだった。

## 第九話 森の雪道

夏休みには山登りをして、冬休みになると、自然の中を歩き廻るのが好きなボクたち。家から、パパの車で一時間半ほど走ったところに『黒い森』と呼ばれている森林地帯があるのだ。雪の上を歩くのが好きなパパに連れられて、ボクはそこへしばしば行ったことがあったな。

ボクたち三人は、またその森へ出かけたのだ。

パパが、助手席に座っているママに、

「あと少しで、小さな村サイクに到着するぞ」

と言うと、ママが、

「辺り一面、雪が五十センチぐらい積もっているわね。真白い世界、きれいだよ」

と、応えたな。

しばらくすると、パパが、

「これから滞在する休暇用住宅が見え出したな。あの坂道を上りきればいいのだ」

と言いつつ、ハンドルをしっかりと握りしめていたな。

車は、森の入口前に建つ三階建ての大きな家の前に停まり、これから六日間に必要なものを、ボクたちは運びはじめたのだ。

翌朝、ボクはベッドから起き出し、居間のカーテンを開けると、ママが寄ってきて、

「タンネ(樅の木)が、十五メートルほど先に何本も見えるわね。どの先端にも、白と黒色をした尾の長い鳥が身動きもしないで止まっているわ」

と、言ったのだ。ボクは、窓から外の白い景色を眺め続けていたな。夏と違い、小鳥たちの鳴き声はまったく聞こえないのだ。パパもボクの横に来て 外を眺め続けていたな。

そのパパがママに、

「森閑とした雪景色だ。静かだ」

と言いつつ、さらに続けたのだ。

「標高千メートルの、それも高台のここからは下に村がよく望め、点々と建つ民家の三角形屋根には雪が厚く積もり、レンガ造りのエントツからは煙が立ち昇っている。黒い森地

方に住む人たちの村の姿だ。雪化粧が、さらに静けさを呼んでいるな」

窓に映る風景をしばらく見ていたボクたち。と、ママが、言ったのだ。

「あら、野生の鹿がピョンピョンと雪を蹴飛ばしながら森のなかへ走って行くわ」

と、声を出したのだ。ボクはそのほうに目をやったのだが、もうその姿は見えなかったな。残念だ。

朝食を済ませてから、雪用の装備を身につけ、ストックを持って外に出たボクたち。

五分も歩けば、もう森の中だ。パパが、

「今にも雪が降ってきそうな天気だ」

と、灰色の空を見上げながら言ったのだ。

一時間ほど歩いていると、パパが話したように、雪がパラつきはじめてきたのだ。と同時に、風が吹き出してきたのだ。しかし、ボクたちの歩きには支障はなかったな。

パパがママに話しかけたのだ。

「新雪を踏んでの道は、体が沈むようで気持ちいいな」

「そうね。木と木の間には雪がふつくらとした餅のように積もっているわね。そこに風が吹くと、キラキラと輝きながら粉雪が舞うわ。冬ならではの光景だわ」

雪が枝からバサバサと落ちる音を耳にしながら、ボクたちは雪道を進んでいたのだ。ふと、パパの顔を見ると、髭がツララのようになっていたな。歩き続けていたのだ。

翌日も翌々日もドン曇り空の下、ボクたちは大体平均して七、八キロメートルの雪道を歩き廻っていたのだ。

十二月三十一日になったのだ。今までの三日間と違っての青空だ。歩き出すと、ヤツケを脱ぐほどとなったのだ。ボクは晴れ晴れとした気分であっていたな。

昼食の時間となったので、パパが宿で作ったお弁当をリュックから取り出し、食べはじめたのだ。夏の山でのおにぎりも美味しいが、雪の上での味もおいしいなと思いつつながら、ボクは食べていた。

ママがおにぎりを口に入れていているボクに、小さな声で、「ほら、あそこをこらん」とメートル先の梢を指差したのだ。

ボクはすぐにその方に目を移すと、二匹のリスが見えたな。パパは、すぐにリュックからカメラを取り出し、その姿を撮ろうと構えたが、もうリスはもういなかった。残念がつているパパに、ママが、「ほら、あそこにも」と小声で言ったのだ。でも、その姿をパパもボクも見つけることはできなかったな。

太陽の下、雪道を一日中歩いたので、赤く焼けてしまった顔のボクたち。その顔で宿に戻り、熱い紅茶にこの地で採れたタンネの蜂蜜を入れて飲むと、甘酸っぱい香りと味が口から胃に伝わり、ボクの体は段々と温かくなってくるのだった。

ボクたち三人はソファアの上に足を伸ばし、今日歩いたコースを話し出したのだ。暗くなった夕方、ママがパパに言ったのだ。

「今年、最後の礼拝に出席したいわ」

パパは肯いたな。ママが願うことなら、何でもきく。パパだ。

再びストックを持って、下の村へ向って歩き出したボクたち。

しばらくすると、ママがパパに話しかけたのだ。

「薄暗いなか、雪明りあたりはやわらかい青色になって、明るいいわね。神秘的だわ。そ

れに、両側に立ち並んでいる菩提樹と楓の枝には、氷柱が垂れ下がり、樹全体が裸のまま、自分を誇っているかのように見えるわ」

「そうだね。自分の存在を誇っているのだよ」

「一本、一本の樹々、それぞれ個性があるわね」

「同じ姿の樹がないのが、素晴らしい」

「その通りね」

ママはそう言つて、ボクのほうを見て、ニコリしたのだ。ボクのハンディも個性と見ているママとパパなのだ。

ボクたちが雪道を踏むたびに、サクツ、サクツと音がして、あたり一面に響き渡るのだ。ボクの体は浮いたり沈んだりして、愉快的気持ちだ。

そのボクに、パパが何度も、「凍ってしまった雪の上は、ストックを突きながら慎重に歩くように！」と注意するのだった。

百メートル先に教会の灯りが見え出すと同時に、教会の鐘がカーンカーンと鳴り出したのだ。その音に誘われるようにして、堂内に入ったボクたち。と、十五名ぐらいの人たちが椅子に座っていたな。

パパがママに、

「ギターの演奏で式がはじまったね」

と言うと、ママが、

「この小さな教会、ギターの響きがとてもいいわ」

と、応えたのだった。二人は耳を澄ましていたな。

ボクはギターに合わせて、体を動かしはじめたのだ。

その礼拝が終り、外に出てから再び雪道を登り出すと、ママが、

「大家族が向こうから歩いて来るわね。家族全員、手にたいまつを持っているわ」と、声を出したのだ。

「良い新年を！」

ボクたちは、お互い声をかけ合いながらすれ違ったのだった。

しばらくすると、ママがうしろを振り返ったのだ。

「五つのたいまつが星月夜に照らされながら消えて行くわ。なんとという幻想的な青い美しい光景なのでしょう」

ボクも、その方を眺め続けたな。

宿に戻ると、パパとママは遅くなった夕食の支度に取りかかったのだ。

一時間後、白菜と椎茸、それに薄い豚肉の入った鍋を囲んでの食事となったのだ。ボクたち三人が大好きな水炊きだ。

家から持ってきた箸でボクは肉などはさみ、レモン入り醤油につけ、ご飯の上のせで食べ出すと、ボクの体は少しずつ温かくなっていくのだった。

パパが、湯気立ち昇る白菜を口に入れながら、ママに言ったのだ。

「今日（大晦日）の夜は、日本にいたときはそばを食べたね」

「そうね。でもこれもお醤油の味よ」

ニコリして、ママは応えたのだった。

ボクたちは、「おいしい、オイシイ」と声を出しながら、残った汁をスープ替わりにし

て飲み干したのだ。ボクの額から、汗が滲み出てくるようになったな。

食事を終えると、パパが、「夜中の十二時まで起きていよう」と言ったので、ボクたちはゲームをはじめたのだ。

でも、三人とも今日の疲れが出てきたので、欠伸をするようになってしまったのだ。

しばらくすると、大きな音が外から聞こえ、カーテンの隙間から光が差し込んできたのだ。パパが腕時計をのぞきながら、

「ちょうど夜中の十二時だ。爆竹がはじまったぞ。村外れに建っているこの家周辺は、大晦日の夜は静かだろうと思ったのだが、これもドイツだ」

と言い、窓際へ向ったのだ。ボクはパパのあとについて行ったな。

そのボクに、パパが言ったのだ。

「近くに住む人たちが、打ち上げる花火だよ。ほら、至るところで、ヒューロヒューロと音を出して、光散っていくのが見えるだろ」

ママも来て、一緒に眺め出したのだった。

三十分ほどで静かになったので、ボクたちはベッドに入ることになったのだ。

翌朝、目が覚め、ボクはベッドから起き出し、窓から外を眺めていると、ママが寄ってきたのだ。

「雲の切れ目に、ひと筋のオレンジ色の線が見え出したわね」

ボクとママがそれを眺めていると、パパも寄ってきたのだ。

「オレンジ色の光が拡がり、朝日が照り出したな。新しい年がはじまるのだ」

パパは、そのほうを見ながら手を数回打ったのだ。ボクもパパの真似をして手を打ったな。そのあと、ママが、パパに訊いたのだ。

「何を願っているの？」

「皆の健康をね。とくに、お義母（かあ）さんの健康が守られますようにと」

「そうね」

## 第十話 別れ

下の階にいるおばあさんの部屋に、ボクたちは行ったのだ。と、ソファアに座って、いつものように郵便箱から取り出した新聞を読んでいたおばあさん。その前で、ボクとママとパパは声を合わせて、誕生日の歌を唄ったのだ。

そのあと、ママはおばあさんを抱き、ボクはおばあさんの頬に自分の頬を重ねたのだった。

パパがおばあさんの手を握りながら、「八十七歳の誕生日、おめでとうございます」と言うと、おばあさんはとてもうれしそうな顔になったな。

その誕生日から二ヶ月が過ぎた、ある日のことだった。おばあさんの体調が急におかしくなると、家から救急車で大学病院に運ばれてしまったのだ。

パパとママは病院の先生から、

「八十七歳のお母さんは、心臓が極端に弱くなっています。明日、何が起ころうもおかしくない容態です」

と、告げられたのだった。それを聴いたパパは、「お母さんをどうしても家で介護したい。彼女が安心していられるのは家だし、気を許せる子供たちと一緒に過ごさせてあげたい」

と、希望をのべたのだった。そこで、おばあさんは四週間病院に入院してから、家に戻ってくるようになったのだ。ボクは、おばあさんと毎日会えるだろうと思い、よろこんだな。

家に戻ったおばあさん。何も食べないで、僅かの水分と点滴の日々となっていました。ボクは、ママかパパと一緒に時だけ、おばあさんの部屋に入ることが許されたのだった。

ボクが行くと、おばあさんは意識がすっかりしている時は、ボクの名前を言いながら、いつもの優しい顔を浮かべるのだった。

「おばあさん、おばあさん」と呼びかけると、ボクを見つめてニッコリするおばあさん。でも、すぐにまた目を閉じて眠ってしまうのだ。おばあさんと一緒にゲームをすることが、できなくなってしまうのだった。

ママとパパそれにママのお兄さんたちは、おばあさんを毎晩交代で見ていたな。ボクは何度もおばあさんの手を触れたりして、挨拶を交わしていたのだった。

おばあさんが家に帰ってから一ヶ月経った頃、ママとパパが話し合っていたな。

「昨夜、母を見ていた兄は、聞いたらしいの。母が二十五年前に亡くなった父の名前を何度と呼んだのを。今まで父の名前を口に出したことがなかったのに。それに、母のお母さんと亡くなった、わたしの姉の名前も呼んだらしいの。それから、咳も出て熱も上がったと言ったわ」

「また肺炎に罹ったのかな」

「そうかもしれないわ。心配だわ。母はここまでよく生きていると思うわ」

「そうだね。医者も看護師も心臓が弱い、お義母さんがここまで生きているのが、奇跡だとも言っていたからね。私たちのために、お義母さんは今の今を私たちと一緒に生きていくのだよ」

「そうでしょうね」

「昨日は、ほとんど意識のないなか、『上を開けて、上を開けて』と声を上げていたな」「そうなの」

パパとママがこの会話をした翌日、おばあさんは亡くなってしまったのだ。ボクは寂しくて、寂しくてしょうがないのだ。

パパは、おばあさんが急に倒れ、容態が悪くなったことを知り合いの人に手紙で知らせたり、また亡くなったことを、パパが発行しているテュービンゲン便りに書いたりもしていたな。

そうしたら、日本にいるパパの友人や知人たちから、手紙が届いたのだった。それらの内容を、パパはママとボクに必ず伝えていたな。

テュービンゲンに長く住んで、クリスマスの時はいつもボクの家に来て、食事を一緒にしたパパの友人からの手紙には、

【ご無沙汰しています。久しぶりのお手紙、拝見いたしました。お義母さんの具合が悪いようで、大変心配しています。そして看病をしていらっしゃる皆様も、さぞ心配で辛い毎



日だと思いません。

私も最近、考えるようになりました。誕生して、学校へ、そして結婚、家庭生活、初老の月日、老年の体調の変化、その中で今までいろいろと心配したり・苦労したり・喜んだり・悲しんだり、その時その時に人間が生きて行くと云う事は、大事業だと感じて居りました。でも、最後の死と云うことが一番大切で、その大切さをはっきりと身にしみて感じるようになりました。

自分は信仰も無く、子供も有りません。お義母さんはしっかりした信仰も有り、子供たちにも恵まれて居られるので、羨ましく思います。

神の御心のまし、自然の成りゆきを、お義母さんは感じていらつしやると思います。遠く日本の空より、一日でも長く生きてくださるようにお祈りして居ります。心残りの無いように、しっかりと看病して上げて下さい。………。

誰にも訪れる死の瞬間は、静かで、安らかにしたいものと、考える年齢になりました。奥さんをしっかりと慰めて上げて下さい【

また、ボクの家から三回ほど訪れてきたパパの知人からの手紙には、

【夕暮れと共に秋の虫がうるさい程鳴き、秋を実感しております。

昨秋は、大変お世話になりました。その後、大変ご無沙汰しております。とは申しますものの、私はテュービンゲン便りにて、ご家族のご様子を伺っているので、とても身近に感じておりました。お母様の具合はいかがでいらつしやいますでしょうか。案じております。

テュービンゲン便りでの人間の真理をついた、しかも哲学的な物の考え方の原点はどこにあるのでしょうか。毎回、文章を読ませて頂くたびに、それを思うのです。奥様でしょうか。それとも息子さんでしょうか。それとも、思考の構築の中に組み込まれていらつしやるのでしょうか。宗教家のような感じさ致します。

私は少し前に「地球交響曲」という映画を、一番から三番まで見る機会がありました。この映画は、人間をひきつけて離さない魅力があり、根強い人気を持っております。三回ほど見ました。

オムニバス形式なのですが、その中で佐藤初女という日本女性が取り上げられています。彼女は三十年位前から社会的弱者とされている人々に、自宅を開放している人です。ある時、彼女は『あなたにとつて、祈りとは何ですか』と聞かれ、とっさに『生活です』と答えたとです。生活全てが祈りで、手を合わせるのが静の祈り、動いて働くのが動の祈り、だと言うのです。

私は日本人の多くがそうであるように、いわゆる無宗教に近いのですが、この言葉は心の中にスーと入ってきました。spirit, body, mind, の三つの調和が、人間本来の姿であるとも解説しておりました【

パパの大学時代の山仲間で、一年間テュービンゲンに滞在して、よくボクと遊んでくれた人からの手紙には、

【過日、グロースムターが逝去されたことを知りました。心からおくやみを申し上げます。奥さんも悲しまれたことと思っております。

グロースムターは良きヨーロッパ文化を体現していた方だと思っております。聖書の中に「隣人を愛せよ」という言葉がありますが、常にこの言葉の意味するところを体現されて

いた方だと思っております。

人生は時として、苦しみや悲しみに出会い、耐え忍ぶしかないという時があると思いません。むしろ人生の実相としては、苦しみや悲しみのほうが多いのかもわかりません。

ただ、死と生とは断絶ではなく、継続しているものだと思います。生者は死者のために、死者はまた生者のためにあると思います。悲しみの極にあっても、何か見守っていただける大きな力といったものを信じたいと思います。

奥さんも悲しまれたことでしょうか。どうぞ、心からのお悔やみを申し上げると、お伝え下さい。

又、家族と一緒に日本にお越し下さい】

ボクは知らないが、パパが親しくしている人から届いた葉書には、

【お義母様のご逝去に心よりお悔やみ申し上げます。

天寿を全うされたお義母様は、充分に人生を生きた事と存じます。亡くなられた方には『ありがとう』と『長い人生、おつかれ様でした』の二つの言葉に集約されるような気がいたします。

当分はお忙しい日々が続くと思われませんが、お体をお大切になさって下さいませ】

おばあさんが亡くなってから、ママは元気がなかったな。そこで、パパはボクたち三人で日本を訪れる計画を企てたのだ。ママにとっては、十四年ぶり、よろこびながら、その日を待っていたな。もちろん、ボクもその日が来るのを待っていたのだ。

いよいよ日本へ出発する日となり、二週間の旅に必要なものが入っているリュックをそれぞれ背負い、家を出たボクたち。

十一時間半ほど飛行機に揺られて、関西空港に朝早く降りたあと、リムジンバスに乗り、京都へ向かったのだ。ママが、「ぜひ、古都京都へ行ってみたいわ」と希望したからだった。

ボクたち三人は桜の花が咲きはじめたのを眺めながら、市内に点在するお寺やお城、そして祇園や三千院などを見て、六日間歩き廻っていたのだった。

京都での最後の日、パパが「都おどりを観よう」と言ったので、ボクたちはそこへ行ったのだ。

ママもパパもそうだけれど、ボクも感動しながら、舞台上で舞い踊る着物姿に魅せられしまったな。それに、笛、小太鼓、三味線から出る音に、ボクの体は自然と動き出したのだ。まわりの人は、体を揺すっているボクを時々見ていたが、そんなにはお構いなくボクはたのしんだのだ。ママがパパに、「色彩豊かで、なんと美しいの」と感動した声を言っていたな。

京都でのたのしい滞在を終えてから、ボクが生まれた浜松へと向かったのだ。

ママにとっては、二十年ぶりの訪問だ。ボクは、ママからそこで過ごした日々のことを何度か聞いたことがあったな。懐かしい地、そして人との再会に、うれしそうな顔をしていたママだった。

駅前からバスに乗り、聖隷三方原で降り、パパが以前勤めていた施設の近くに建っている高齢者ホームへ向かったボクたち。

ホームのゲストルームで、リュックを下ろしていたら、ママがパパに、「わたしたちが住んでいた家へ、これからすぐに行きたいわ」と希望したのだ。

ママにとっては、日本に来て初めて暮らした地だ。それに、未熟児すれすれの体重でボクを産み、乳をまったく飲まなかったボクを何とか飲ませようとして一生懸命に尽くしてくれたママだった。日本語も話せずにはいたママでもあったのだ。

パパがその時のことをママと語る時は、いつも目が潤んでいたな。

二人の想い出の詰まった家は、二十年前と同じに建っていたな。五十メートル先からは、「モウ、モウ」の声も聞こえ、それを耳にしたママが、「昔と同じね」と呟いたのだった。ママとパパは小さな平屋建ての前で、言葉を交わさずにはばらく立ち尽くしていたあと、ボクを見ながらニッコリとした顔で言ったのだ。

「ここで君は生まれ、一歳まで暮らしていたのだぞ」

ボクたちがその家周辺を歩き出すと、ママがパパに、

「土と木の匂いがするわね。あなたの休みの日は、彼を乳母車に乗せてよく三人で散歩したわ。その彼、こんなに大きくなって」

とボクを見ながら声を出したのだった。そして、さらに言ったのだ。

「あなたの給料が出たときに、何度かうなぎを食べに行ったことがあったわね」

「そうだったね。当時のことがまざまざと浮かんでくるよ」

そう応えた。パパだった。

ボクたちがここに来たのを知ってか、ママとパパの知り合いの人たちが会いに来て、優しい目でボクたちを迎えてくれたのだ。

その中でも、ママはボクたち三人が暮らしていた家の隣の家族と、二時間に亘って話をしていたな。

最後にママがその家族の手を握りながら、「いつか、わたしたちが住んでいるテュービングェンに遊びに来てください」と誘いかけたのだ。

ボクは日本語がまったくわからないし、思っていることを言葉で表現することがうまくできないので、会話の輪になかなか入ることは難しいのだ。そのことを察した。パパはボクとママを連れて、バスと電車に揺られながら浜名湖へ向ったのだ。

乗り物が好きなボクは、車窓に映る景色を、目を追うようにして見ていたな。

湖に着いてから、湖畔に今まで咲いていた桜の花が少しずつ散っていくのを目にしたが、ボクたちはゆっくりのんびりと二時間近く歩いてきたのだった。所々で黄オレンジ色の夏みかんが顔を出していたな。

お世話になったホームで最後の朝食を摂ってから、ボクたちは再びバスに乗って浜松駅へ向ったのだ。

車内では、信号前で停車する度に一つのメロディーが流れてくるのだった。、それを聞いたママが、隣に座っているパパに、

「うさぎ追いし、かの山、……」

と、小さな声で唄ったのだ。

パパは、ママの声に耳を澄ましていたのだった。

三十八年間、日本で暮らしていたパパには、感傷的な響きのある歌なのだろうな。それに、外では小雨となって今まで咲いていた桜の花が散っているのが。パパの目に映っていたのだ。また、メロディーが流れ出したのだった。

ママとパパの想い出深い浜松を発ち、次はパパのお姉さんが住んでいる茅ヶ崎に行った

のだ。そして、そこで親戚の人たちと会い、伯母さんの家で一泊してから、ボクたちが長く暮らした地へ向ったのだった。

列車の中で、ママがパパに、「まもなく土浦駅ね」と言い、ニッコリしたのだった。十四年ぶりの地、ニコニコしながら、その二人と握手をして、日本語で言葉を交わし出したのだ。日本に十日間ほどいたせいなのだろうな、ママは日本語を思い出したようだった。ボクたちは、これから二泊するその夫妻の家に行つて大きな間に入ると、この地で親しくしていた十五名ぐらいの人たちがボクたちを待っていてくれたのだ。

ボクは六年間、この地に住んでいたが、皆の顔はもう忘れていた。でも、ママは懐かしそうな顔を浮かべながら、皆と握手を交わしていたな。

皆はボクを見て、

「こんなに大きくなつて」

と、驚きの声を上げたのだった。なぜなら、ボクは、小さい頃はモヤシのようなひよろりとした体つきだったからだ。ママと違つて、ボクは日本語が口から出なかったが、自然と出る笑顔で、皆と握手を交わしていたのだった。

ママとパパの横に座つて、皆と一緒にお鮎を食べ出したボク。

家でパパが作る手巻きすしとは違う味なのだ。ママはボクの横で、「美味しいわ、おいしいわ」と盛んに声を出しながら食べていたな。当時の味を思い出していたのだろうな。醤油が好きなボクは、おすしにたっぷり醤油をつけて口に運んだのだ。パパは愉快そうに皆と語り合っていたな。

夕食を終え、しばらくすると、ボクは眠くなつてしまったので、一人で布団の中に入ったのだ。目を瞑ると、いつも数秒で眠つてしまうボクなのだ。

翌朝、ボクたちは友人夫妻と語り合いながら、朝食を摂りはじめたのだ。昨夜は遅くまで話に花を咲かせていたのだろう、パパとママは寝たりなさそうな顔だったな。

ボクは久しぶりの朝食のご飯。三杯お替りをしたのだった。日本にいた時は、朝食はママに合わせてパンを食べていたが、ご飯を食べていた時期があつたのだ。というのも、パパのお母さんと二年間一緒に暮らしていたからだつた。

ご飯での朝食を済ませてから、昔住んでいた家へ向つたボクたち。

しばらくすると、ママがパパに、

「田圃が左右に見えはじめてきたわね」

と言ひ、さらに、

「ほら、あの先を見て。トタン屋根の貸木造住宅が今も建っているわ」と、声を上げたのだ。

その家の前に、ボクたちが立つと、ママがパパに話し出したのだ。

「この家に、ドイツから母が来て、一ヶ月滞在していったわね。家周辺の景色はほとんど変わつてないわね。家の裏のピーナツ畑も今もあるわ。母とあの辺をよく散歩したわ」  
「きみは日本にいた八年間、息子とわたしの母とを看っていたので、日本を旅したことがなかったな。きみには感謝しているよ。今回、旅ができて本当によかつた」

「それは、わたしも同じよ。彼も一緒だったし、たのしかつたわ。それに昔の知人たちとも会えて話しもできたし。わたしが日本にいたときのことを確認でき、人との関係が続い

ているのを感じたわ。ありがとう」  
ママは、パパの手を握ったな。ボクは自然とニコニコ顔だ。

## 第十一話 自分なりに

特別支援学校を卒業したあと、こんどはボクと同じような人たちが働く作業所に通うようになったのだ。そこは、学校を二十一歳で卒業する一年前から実習に行っていたので、自分がどのような仕事をするかはわかっていたな。

働き出して数カ月してから、パパが作業所を訪れてきたのだった。

ボクが働いている室にパパが入ってきたので、手招きで「こっち、こっち」と呼んだのだ。パパはボクの作業台の上に、山のように積まれてある八色の粘土を見て、

「これらを色分けして、小さなプラスチック箱にきちんと入れるのが、きみの仕事か」

と訊いたので、ボクは肯いたのだ。

パパはボクの横に座って、一緒に作業を手伝いはじめたのだった。と、ボクたちを指導しているトーマスが寄ってきて、

「彼は、よく働きますよ。根気があって」

と、パパに話しかけたのだ。

「そうですか。いつもこの箱詰めをしているのですか」

「いいえ、一週間ごとに作業替えがあって、七種類の仕事のどれも上手にこなしますよ」

「それはたいしたものだ」

そう言っ、パパは手を休めて、ボクのほうに顔を向けてニコリしたのだ。

パパは日本にいた時、ボクたちと同じような人たちをお世話していたこともあって、この室にいる九名の人たち一人ひとりのところに気楽に寄って話しかけていたな。ママが以前ボクに、「私たちが日本にいたら、パパはおもちゃ作りの作業所を開きたかったのよ」

と言ったことがあったのだ。

ボクは、仲間たちに話しかけているパパの姿が好きだ。

ボクもそうだが、ここにいる人たちは皆給料をもらっているのだ。ボクは手取りで一万三千円だ。ボクたちはそれぞれの能力に応じて、自分なりに働いているのだ。

自分なりといえば、パパは以前にもまして机に向って、おばあさんをテーマとした物語を書くことに力を入れていたな。そして、それを終え、日本のある文学賞に応募したのだ。

パパは、その結果を待っていたのだった。

そのようなある日、作業所から帰宅すると、いつものようにパパがボクのために用意したパンとジュースがテーブルの上にはなかったのだ。パパを見たが、パパは窓越しに映る垂れ下がった雲を眺めているだけだったな。いつものパパと違って、何かガツカリした表情の顔だった。

そのパパに連れられて、ボクは夕食の買物に行ったのだが、どうも右足の裏が痛く、足を引きずりながら歩いていったのだ。そのボクの様子に、パパは何の表情も示さずにいたな。いつもは、ボクの異常にすぐに気づくパパだったが、今日は違っていたのだ。

家に戻り、ボクはパパに連れられてバスルームでシャワーを浴び出したのだが、立って

いられずに、バス槽に座ってしまったのだ。と、パパが、「どうしたと？」

と訊いたのだったが、ボクは答えずに座ったままでいたのだ。この時、パパは初めてボクの異常に気づき、足裏をのぞいたのだ。

パパは驚いた顔をしながら、バスルームからボクを出して、居間のソファーに横たわせ、焼いた針でボクの足裏を突つきはじめたのだ。

針が刺さる度に痛みが走ったが、ボクは声も出さずにパパの顔を見ていたのだった。

「トゲが深く入って、なかなか引き出すことができない」

パパはそう言いながら、ボクに、

「痛いか、いたいか」

と何度も訊いたが、ボクは歪んだ顔でパパを見つめ続けていたのだ。

トゲをなかなか取り出すことができないでいた。パパは、こんどはまわりの皮膚を針で切り裂きはじめ、やっと一センチぐらいの黒いトゲを引き抜いたのだった。と、その時、血の混じった白い膿が、パツと飛び散ったな。

パパはホツとした顔で、

「出たから、もう痛くないぞ」

と言ったあと、ボクをソファーに横たわらせたのだ。

夕方になって仕事先から帰ってきたママに、パパが、「日本に応募した作の通知が届いて選外となったよ」と伝え、さらに続けたのだ。

「胸が塞がれ、そのことばかりに心が捕らわれて、彼の足にトゲが刺さっていたことも知らずに彼と買物に出たのだ。そして、家に戻り、シャワーのときに気づいたのだ。数時間も痛みがあったことを知らずに。これは、父親として、主夫としては失格だな」

そう言うてから、パパはママに以前勤めていた日本の施設で経験したことを語り出したのだ。

「一人の少年がいつもとは違う足取りで歩いていたが、そのことを気づかずにいたのだ。

そして、その子を入浴させようとしてズボンを脱がせると、大腿部に切り傷があって、そこからまだ血がにじみ出ていたのだ。それを三時間以上も気づかずにいた自分は、彼らをお世話する職員として失格だと思ったよ。それをこんどは最も身近にいる息子にやってしまい、情けないよ」

ママは、パパの話すことに耳を傾けていたな。

翌朝、ボクはパパに言われるままに体温を計ったが、熱はなく、立っても痛くなかったな。

ボクは朝食を摂ってから、パパと一緒に玄関前に停まっていた作業所から迎えにきたマイクロバスのところに行ったのだ。そして、バスに乗ろうとすると、パパが、

「痛くないか」

とボクの顔を見ながら訊いたので、ボクは自分の足先を指差して、

「パパ、パパ」

と、ニッコリしたのだ。ボクの笑顔を見たパパは、ボクと一緒にいる時にいつも浮かべる顔つきになって、

「ありがとう」

と、言ったのだ。

作業所のマイクロバスに乗って家に戻るボク。でも、家にすぐに入らずに、玄関前をゆっくりと走る車を眺めたり、目の前を通る近所の人たちと握手を交わしたりするようになったのだ。ただそれだけでうれしく、疲れが取れるからだだった。

もちろん、週末になると、パパとママと一緒に森の中を散歩したり、車で遠出をしたりして、リラックスもするな。その他にも、最近は自転車乗りがたのしくなり出したのだ。た。

先日、パパが家の玄関前で、

「さあ、走るぞ！」

と声を上げて漕ぎ出したので、ボクは、

「ヤアー、パパ」

と応え、ペダルを踏みはじめたのだ。

走っていると、知り合いの人たちが、「ハロー」と声をかけてくるのだ。そうすると、パパがベルを鳴らすのだった。

走りながら、「あつ、二人乗りのタンデムだ！」との声をボクは何度も聞いたな。

バランス感覚がよくないボクなので、一人用の自転車は乗れないが、タンデムだったらサドルの上に座り漕ぐことができるのだ。

そのタンデムで、週末は町郊外やネッカー川に沿って設けられている自転車道を三人で走るようにもなったのだった。

ボクの前で、ハンドルを握っているパパが、

「道の両側には麦畑が続いているな。ところどころに大きなヒマワリが咲いて、こちらを歓迎しているみたいだ。さあ、走り続けるぞ」

と、声を出すのだ。

「もつと漕げ！」

大人と子供用に作られたタンデムなので、ボクとパパにはピッタリ。パパが前で、

「ヤアー」

と応え、力強くパパと一緒にペダルを踏むのだ。

パパは、うしろにいるボクに何かと声をかけてくるのだった。それに応じるボク。

うしろで走っているママが、ボクたちの横に寄ってきて、

「まわりに映る景色、三人で共有できていいわ」

と、声をかけてくるのだ。ボクは笑顔でニッコリだ。

タンデムに乗りはじめた頃は、家から少し離れた郊外の平らな道を走り回っていたボクたち。少しずつ慣れてくるにしたがって、遠くにも行くようになったのだ。

ある時は、電車に自転車を乗せ、そこから走り出したこともあったな。右と左に赤いリングの実を見ながらの走行だ。ボクはゆったりとした気分となったな。

上り坂となると、パパが、

「もつと力を入れて！」

と背を丸めながら、声高に言うのだった。

ボクたちは汗をかきつつ登り続け、その時は周囲の景色をたのしむ余裕はボクにはまったくなかったな。でも、パパの息づかいが伝わってきて、それに合わせたつもりもするものもいものなのだった。

下り坂となると、風を切つての走り。その心地良さは、言葉では表現できないな。ボクは、「ヒュー、ヒュー」と声を発してよろこぶのだった。これを体験したら、もう止められなくなってしまうのだ。

ボクはこのタンDEMが気に入って、日曜日になると、自分のヘルメットを持ち出して、「さあ、走ろうよ」

と、パパに催促をするのだ。

「漕げ！」

「ヤアー」

うしろから、ママの「気をつけて！」の声が飛んでくるのだった。

パパとたのしさを共有することはいいが、そうでない場合もあるのだ。

最近、ボクはしばしば下痢をするようになってしまったのだ。そこで、パパとママに連れられて家庭医のところに行き、下痢の原因を調べてもらったのだ。

その結果、ミルクアレルギーとのがわかったのだ。でも、治療方法はなくて、お医者さんから、「食べ物に気を配るしかないですね」と言われただけだったのだ。

それ以来、パパとママは、ボクがバターやチーズやヨーグルトなどのミルク製品を食べないように気をつけるようになっていったのだ。

でも、作業所での昼食は多くの仲間と一緒に摂り、目の前のお皿に盛ったバターやミルクなどで作られた美味しそうな料理を目にすると、何でも口に入れてしまうボクなのだ。

ママが、ボクたちの作業を指導しているトーマスに、

「彼はミルクアレルギーなので、昼食のときは気をつけてください」

とお願ひしたのだったが、それを徹底して守ることは難しいのだ。なぜなら、仲間が美味しそうに食べているのを見ているだけなんて、ボクには耐えられないからだ。自分も食べてしまうのだ。と、必ず下痢となってトイレに駆け込むのだ。間に合わない時は、パンツ内ですってしまう。そのような日が月に二、三回はあるのだ。そのあと、シャワーを浴びるのだった。

作業所の人、そしてママやパパは大変に違いない。ママは、汚れたボクのパンツをいつも手で洗うのだ。何も言わずに。

パパもミルクアレルギーで、ボクと同様に二十代半ば頃から、チーズやヨーグルトなどの乳製品を食べると下痢になってしまったのだ。

ボクが下痢をするようになったのは、パパからの遺伝なのだろうな。ママの消化器官を継げば、少しの黴菌でもびくとはしなかったのに。

パパとボクは同じ辛さを共有しているのだ。しかし、パパは自制できるが、ボクは自分でコントロールができないのだ。でも、パパとママはそれを知っているので、ボクは悩みなどしないし、暗い顔にはならないな。

食べ物のことでは、このところうれいしことを、パパとできるようになったのだ。

それはパパと一緒に、いつも夕食を作るようになったことなのだ。



「さあ、今日もまずお米を研いでからだ」

パパにそう言われ、ボクは掌で米を握るようにして洗い、何回も水を替え、炊飯器にス  
イッチを入れるのだ。そのあと、パパが、

「冷蔵庫から卵を二つ取り出して、それをわってほしい」

と言ったので、力加減に気をつけながら器に入れるのだ。

「そのなかに、砂糖を入れてかき混ぜてほしい」

「ヤアー、パパ」

「フライパンが熱くなったので、それを入れて」

ボクは溶けた卵を少しずつ落としていくのだった。

「固くなったね。こんどはそれを包丁で細長く切ってほしい」

大きなまな板の上で、切るのだ。

「次はキュウリだ。卵と同じくらいの大きさに切って」

「ヤアー」

パパは、ボクの手先を見ながら言ったのだ。

「なかなか手が器用だな。その調子で、次はアボガドとシヤケを切ってほしい」

「ヤアー」

「切り終わったら、今までのものをすべてお皿にのせて」

ボクは丁寧の一つひとつを盛っていくのだ。

「さあ、こんどは炊き上がったご飯に、酢と砂糖と塩を合わせたものを混ぜるよ」

「ヤアー」

「これで、でき上がりだ」

そして、ボクはパパとハイテックするのだ。

テーブルにでき上がったものが並んだ頃、ママが仕事先から戻ってきて、三人での夕食  
だ。

ボクは掌に海苔をのせ、その上に酢の香りのするご飯とアボカドと薫製のシヤケ、それ  
にキュウリをそえて包むように巻き、わさびの入った醤油に、それをつけて口の中に入れ  
るのだ。ボクたち三人の好物の手巻き寿司なのだ。

ママがボクの顔を見ながら、

「今日のお鮨は、とくに美味しいわ」

と、声を出したのだ。それを聞いたボクとパパは、目交わしをしてニッコリだ。

ボクがパパと一緒にあって夕食作りをしたからといって、下痢の回数が減りはしないが、  
たのしい時間が増えたことは確かなのだ。

## 第十二話 歴史に映る命

### ① ナチス・ドイツ

主夫をしているパパは、ボクと一緒にいる時間が多いのだ。でも、パパは家のことだけ  
ではなく、まわりの出来事や社会にも目を向けているところもあるのだった。ボク、そし  
てボクの仲間たちの命を通して、社会全体を見つめているのだから。それを、パパと一緒

に暮らしているとよく感じたりするな。

たとえば、パパのところ、年に数回日本から福祉に携わっている人たちが訪れてくると、パパはその人たちをチュービンゲンから車で四十分ほど走ったところにあるマリアベルグという、ハンディを持つ人たちが住んでいる大きな施設に案内するのだ。そこに、ボクはパパとママに連れられて、以前お祭りの時に行ったことがあったな。

パパがその施設に行くと、日本から来た人たちに、先ず見せる場所があるのだ。そこに住んでいた六十一名の人たちが、ナチの時代に殺害されたことが記された石碑なのだ。その際、パパはその施設の資料室に一週間通い続けながら書き上げた数枚のプリントを、その人たちに手渡すのだった。

そこには、次のようなことが記されているのだ。

【当時多くのハンディを抱えていた人たちが、『生きるに値せぬ命』という名のもとに、殺されてしまった歴史がドイツにはある。その史実を知れば知るほど、これから問題となってくる生命倫理について、自分は真剣に考えざるを得なくなってしまうのだ。

一九三九年に第二次世界大戦が始まった。と同時に、ヒットラーは、ある秘密命令を出して、精神病患者を中心とした心身にハンディを持つ人たちを抹殺する計画を企てたのだった。それによって、戦争中に十〜二十万人の彼らが殺害されてしまった。

この安楽死作戦は、綿密かつ組織的に実行された。それを可能にさせた社会的背景には、戦争という非常事態があったとはいえ、ヒットラーが政権を取ってからこの作戦を思いついたわけではなく、彼の青年期、もっと遡れば、一九世紀の後半から社会の中で、その兆候が少しずつ芽生えていたのだった。

それは、ダーウインによる進化論の考えからはじまり、生存競争から自然淘汰が起こり、優生学への考えと進んで行き、有用性と業績能力による人間の価値序列化の考えが浸透していったのである。

その背景には、第一次世界大戦に敗れたドイツでは、経済的困窮も加わり、多額の費用と労力を要するハンディを持つ彼らを、経済的な視点から捉えようとする傾向があったからだった。

一つの例として、一九二〇年の秋、知的ハンディを抱えながら暮らしている施設の子供たちの親二百名に、施設長がアンケートの手紙を送ったのだった。その内容は、次のようなものだった。

「あなたの子供に学ぶ能力がなく、治る見込みがないとわかった場合、その子の生命に痛みのない死（生命短縮）をもたらすことに同意しますか。親のあなたが、もし自分の子供の世話ができなくなったとき、たとえば、あなたが死んだ場合など、子供の生命短縮に同意しますか。あなたの子供がかなりの身体的苦痛を伴ったとき、その子どもの生命短縮に同意しますか」

百六十二通の返答のうち、七十二%が生命短縮に同意すると親たちは返答したのだった。この施設長は、まさに反対の数字を期待していたのだったが、結果は生命短縮に同意する親が多かったのである。

当時の社会では、ハンディは親からの遺伝だということが主な理由だとされていた。そのこともあって、ヒットラーは政権を握った一九三三年、すぐに遺伝病子孫予防法を制定させ、同法は翌年から施行され、それによって三十万人以上の人たちが、断種（男女の不

妊手術）されてしまったのである。

ヒットラーにとつては、有用性と業績能力のある人のみが健康な人間で、それ以外の人には抹殺されるべきものであったのだ。

では、マリアベルグ施設に住んでいた人たちは、どのようにして殺害されるに至ったのだろうか。

一九三四年一月に施行された断種法によって、マリアベルグに住む約二百名の人たちの多くが、強制的に不妊手術を受けさせられてしまった。遺伝的要素が強いとみなされた彼らの生殖機能を絶つことが重要だと、ヒットラーは考えたからだった。これを契機に、人工妊娠中絶の法および精神病のある人の結婚を禁止する法へと進んでいったのである。

そして、一九三九年に戦争が勃発するや、不治の病者には慈悲殺をもたらしてもよいとする安楽死作戦が秘密のうちに行われるようになり、その年の一〇月、早速ベルリンからマリアベルグ施設に、調査用紙が送られてきた。

そこには、一人ひとりの名前と病状と労働能力達成が、どの程度なのかを詳しく書いて、それをベルリンへ返送する旨が記されており。計画経済上の理由でもつけ加えられてあった。

それを受け取ったマリアベルグでは、計画経済上の理由で、その調査は必要なのだろうと思い、労働業績などをその本人の能力よりも低く記入したのだった。というのも、彼らが戦場、または軍事工場に送られてしまい、その結果、今まで彼らがしてきた施設内の掃除や洗濯や料理などを十分にできなくなってしまうと案じたからだった。これはマリアベルグだけではなく、ドイツ国内の多くの施設でも同様だったのである。

その調査用紙を記入し、ベルリンへ返送してから少し経った一九四〇年九月二一日、九十七名の名前が連記されたリストが、ベルリンからマリアベルグに送られてきた。そこには他の収容所へ移動すると書かれてあったが、どこへ移動するかは告げられてはなく、今着ている服だけでよく、他の衣類は保管するようにと書かれてあり、親や家族には、一切知らせてはならないとも付け加えられてあった。

しかし、この時にはすでに彼らが抹殺されているという事実は、各施設の責任者などには伝わっていた。

マリアベルグの施設長も、リストに載った九十七人が、抹殺収容所へ行く候補者だと知っていた。そこで、彼は職員数名の人と一緒に、そのリストに連記された人たちを救おうと、シュツウツトガルトの内務省に駆けつけて抗議をしたが、国の態度は硬いことがわかった。

それでも、粘り強い交渉により、わずか三時間のうちに新しいリストが作成され、施設で労働できる者は死のリストから外されることになった。それによって死の候補者九十七名が五十六名になったのだった。

そして、死の抹殺収容所へ連行される一〇月一日、施設側の粘り強い交渉で、さらに十五名の人が死のリストから外されたのだった。しかし、四十一名はナチ当局の用意した灰色のバスで、抹殺収容所グラーフネックへと連行されてしまったのである。

この時、マリアベルグで働いていた職員たちや同居していた人たちは、どのような心境に陥ったことだろう。胸が塞がった思いになったに違いない。

わたし自身、日本では重度の知的ハンディのある人たちが暮らす施設で働いていたこと

もあり、今はダウン症の息子と一緒に暮らす中で、もし自分がそこに居合わせていたらと想像するだけで、怒りともいえぬ、深いむなしさと悲しさで、地に立っていることもできなかつただろう。

それから二ヶ月経った十二月三日、こんどは一人の医者がマリアベルグを訪れてきたのだった。死のリストから外された人たちを、再度調べに来たのである。

その結果、一月一二日に再び三十名が連記された死のリストが送られてきた。そこには、明日移送バスが来るとも書かれてあったのである。こんどはシュツウツトガルトの内務省に行つて交渉する時間が、施設長にはなかつた。

翌日、灰色のバスがマリアベルグに来たのである。ここでも職員たちは何とか交渉して、三十名のうち、十名を死のリストから外してもらうことに漕ぎつけることができたのだつた。

彼らが連行された特別（抹殺）収容所グラーフネックは、マリアベルグから車で一時間行つたところにあつた。そこは、以前お城でもあつたのだ。そこで、毎日数十名の人が殺され、煙突からは絶えず煙が出ていたのだつた。

殺された人は、名簿でわかっただけでも一〇五六四名にも及んだ。彼らのほとんどが南ドイツ地方の施設と病院から灰色に塗られたバスに乗せられ、グラーフネックに運ばれたのである。

二十五人乗りのそのバスは、窓ガラスがペンキで塗られ、タオルなどで覆われていて、外からは内の様子をうかがうことはできないようになっていた。車内には、大抵運転手二名と二人の介護人、それに女性を移送する場合は看護師が付き添い、彼らは反抗をする人を拘束するための手錠を所持していた。

収容所に着くと、搬送された人たちはまず長さ六十八メートルの簡単に造られたバラック小屋に入るのだった。もし騒いだり落ち着きがなかつたりしたら、すぐに注射が打たれ、裸にされ、そこで数時間待つたあと、自分の名前が呼ばれたら、バラック小屋内の小さな室に入るのだった。

その室には一人の医師と三、四名の人がいて、一つの机の上には一人ひとりに関する書類が置かれてあり、検査されて行つた。が、検査されたといっても、書類に記されたことを確認する程度だつたのだ。

それが済むと、すぐに他の小屋に移され、騒ぐ人にはモルヒネが投入され、真っ裸にされてから、

『シャワーを浴びるように』

と介護人から告げられて、毒ガス室に入るのだった。

ガスをひねる人は医者に限られ、二十分間密閉され、ガス室の隣は解剖室で、脳解剖の場ともなつていた。

死体はすぐに焼却炉に運ばれ、何体も一緒に焼かれ、わずか数時間で灰になつてしまつたのである。たしかに、バラック小屋には百のベッドがあつたが、それらはほとんど使用されないでいた。それに食事を摂る時間もなかつたのである。

そのようにして、マリアベルグに住む人の二百十名のうち、六十一名が『生きるに値せぬ生命』の名のもとに殺されてしまつたのである。

彼らが連行されてから数日後、着用していた衣類がマリアベルグに送り返されてきた。

そして、家族には通知が届き、そこには適当に書かれた病名、たとえば、肺炎とか脳炎とか風邪、ひどいになると盲腸などで死んだと書かれてあったのだ。しかし、盲腸を以前手術してある者が再び盲腸で死んだという例もあって、実際はまったくでたらめに死因を記していたのだった。本当は、毒ガス、モルヒネ、ルミナール、餓死で殺害されていたのである。

この時の親の気持ちは、いかなるものだろうか。自分の息子や娘がこの世に生存していなかったように扱われ、死亡通知が突然届き、気も狂うばかりだっただろう。ある親が、マリアベルグ宛に次のような手紙を書き送った。

『愛する神様、一体このようなことが、なぜ可能なのですか。いつもにこやかで我慢強いわが子が、たちまちのうちにどこか知らないところへ連れ去られてしまい、私たち親さえも知ることができないなんて。世界が荒れ果ててしまったのでしょうか。わたし自身、病気になるってしまいました』

この安楽死作戦が一時中止になる一九四一年八月までに、判明しているだけでも、幼児や子供を除いて、ドイツ国内で七〇二七三名が殺されてしまったのである。

一時中止になったとはいえ、この作戦はそのあとも継続され、犠牲者は少なくとも十万人以上と推定されたのだった。

ハンディのある人へのこの安楽死作戦は、六百万人とも言われるユダヤ人大量殺害への前段階だったのである。

このナチ政権下による、健康的ではなく、価値も有用性もないと見られた、ハンディを抱えた人たちの抹殺は、一九八〇年代になってようやく明らかにされはじめ、それ以前はタブー視され、公にされてはいなかった。

一九八五年、ヴァイツゼッカー大統領が演説のなかで、第二次世界大戦中に殺害された精神病患者および非人間的不妊手術について触れ、それがきっかけで、翌年の一九八六年に初めて、ナチ時代に断種を受けた人たちに、一時金五千マルクが支払われるようになったのである。

安楽死作戦から五〇年経った一九九〇年には、多くの施設で、記念碑が建てられて、今まで公にされなかった当時の記録が公表されるようにもなり、人々へ語り継がれるようになっていった。それによって、市民は、ナチ政権下にハンディを持つ人たちの抹殺が、戦争中だけに起こったことではなく、一九世紀後半からその芽生えがあったことを知ったのだった。

歴史が語っている意味は大きい。また、歴史の鏡に映るのは、苦しみや悲しみを体験した人の姿だ。

ヒトラーによる安楽死作戦を、戦争を経験していない世代が知ることは大切だ。なぜなら、現代のようにバイオテクノロジー（生命工学）と遺伝子工学が発展する中で、優生学的な考えである、美しく有用的な新しい人間がつくりだされるようになったら、社会が混乱するからだ。それは、ナチ時代の安楽死作戦が示したように、社会が精神的混乱を迎えることになってしまう。

そもそも、いろいろな苦しみ、悩みを各自が持っているからこそ、人間は他の人への思いやりが生じてくるし、そこに真のよこびと生きる意味を見出すことができるのだから。

一九八〇年代後半からドイツにも広がってきた、ある学者が考える生命倫理の思想に危

険を感じるのだ。そこには、自己決定意識や他の人へ働きかけるコミュニケーション能力、および理性的能力を持つという『人格（パーソン）』の人だけが、生きるに値する価値を持つているとする考えがあるように見えるからだ。これこそ、ヒットラーのもとで行われた安楽死作戦に共通するように思えてならないのだ。

それは、ハンディを持つ人たちへの敵対行為ともいえる。彼らだけではなく、これは認知症の人や意識がなくなつた人間や胎児にも適用されてしまう可能性がある。

以前、重度の知的ハンディと接していたわたしの経験からして、どんなに重いハンディを持つ人でも、他の人に働きかける能力を持っていると思つているのだ。

それを感じないということは、その人が他の人に働きかける力が足りないからだ。人格ではなく、一人ひとりの命それ自体に、そうした働きかけがどんな人にも潜んでいると、思うのだ】

パパはプリント数枚を、日本から来た人たちに渡したあと、こんどは話すのだった。

## ② 価値より意味

「この国で暮らしていると、『歴史が、社会そして人間をつくっていく』という考えになるね。テレビなどでは頻繁にナチ時代に何が起こつたかを市民に詳しく放映し、学校では当時のことを隠蔽することもなく生徒に教え、議論をさせているからね。そのようにしながら、この国は過去を克服してきたのだ。今のドイツの民主主義は、この暗い負の歴史から学んだところが多いと思うのだ。歴史は、そのときで終わるものではないし、生き返らせてこそ、私たちに明るい未来をもたらすのだ。歴史は生きているのだから」

パパは続けるのだった。

「わが子と歩いていると、子供たちがよく彼を見つめるね。ダウン症特有な顔付きをしているからだろう。しかし、彼はそれにおかまひなく歩いて行くのだ。そればかりでなく、音楽好きな彼は、時々出逢うストリート・ミュージシャンが奏でるメロディーに合わせて、気持ち良さそうに身体を動かして踊りだすときもあるね。」

そうすると、まわりの人やミュージシャンは彼を見て、ニコニコするのだ。彼が自分の感情を素直に出し、まわりの人に安らぎを与えたと言えるだろう。

しかし反対に、その情景を嫌う人もいるかも知れない。そのような人は、ハンディのある人を身近に見慣れてないこともあって、社会の中にいる彼らの存在に気づいていないからだろうな。

自分など彼らの存在に気づけば気づく程、関わり合えばあう程、そのことを通して社会の中で、自分がどのように生きるべきか、との生きる意味を自分に問うことが多くあるね。とくに、ハンディの重い人は自らの語りかけが少ないこともあって、問いかけるこちら側の真摯な心が大切となってくるからね。

ハンディのある人を見ると、とかくその人の全体があたかもハンディを負っているかのように捉えられがちだが、決してそうではないのを、彼らからよく学んでいるよ。とくに、彼らの生きる力強さに畏敬の念を抱くときがしばしばあるね。

それはハンディを持つなかで、自分に出来得る限りの可能性を積極的に追及して、よろこび、幸せ、生きがいを見つけ、そこに生きる意味を見出している姿なのだ。わたしの友人で、脳性マヒの彼が、

『ハンデイが、自分の生きる源泉だ』

と語ったことを、聞いたことがあったよ。

その姿から、成績、能力、競争などの目に見える『価値』に重きを置く現代社会のなかで、目に見えないその人固有の生きる『意味』を、自分のこととして考えさせられてしまうのだ。

とくに、現代は、自己の欲望を果てしなく無限に追い求め、他者との交わりの中で、自分を制するコントロール力が弱くなってきているとも言えるだろう。そのような中で、ハンデイを持つ人との出会いは大きな意味があるね。

先日、私が住むテュービンゲン駅で、次のような光景に出遭ったのだ。

車椅子に乗った両足の無い人が電車から降りようとしていた。幾人かの人が援助していた。それを見て、思ったのだ。

彼は足のハンデイと共存して、自分の有りのままの姿で、己をコントロールして生きている。彼からすると、私たちこそ、ハンデイを持っていると映っているのではないだろうか。なぜなら、自分の欲望・自己中心的な己を強く持つ私たちは、それに振り回されているからだ。

毎日一緒に暮らしている彼を通して、色々と自分を省みることが多くあるね」

このような考えを持つパパが傍にいて、ボクはうれしいのだ。それに、ママが同じようなことを、パパに語ったこともあったな。

「わたしの姉は、あなたと知り合う二年前に三十八歳で生涯を閉じたわ。それはあなたにも話したことがあったわね。その姉は、七歳までは普通の子供のように成長していたけれど、それ以後急に筋肉の発達が止まり、こんどは反対に筋肉が縮まって不自由な身になって、車イスの移動となってしまったわ。でも、頭の働きは一般の人と同じだったので、学校を卒業したあとは本屋に勤めるようになったわ。しかし、体の痛みと車イスに乗っての仕事だったので、長く続けることはできなかったわ。姉はユーモアに長じ、チェンバロに似たスピネットを弾き、きょうだい仲はよかったわ。その姉と暮らすなかで、命の輝きと尊さを学んだわ」

パパは肯きながら聴いたあと、ママに、  
「自分の場合も、ハンデイを持った人との出会いから、一人ひとりの命の尊厳と相手を尊重する心を学んだよ。それは、今も続けているね」

と、言ったのだ。

### ③原点回帰

ボクが働き出して数年が経った頃だった。パパとママに連れられて、テュービンゲンから車で三十分ほど行ったところにある、やはりボクと同じような人たちが働いている大きな作業所を訪れたのだ。

建物内に入ると、受付でひとりの人がボクたちを待っていてくれたな。その人から、パパとママはその作業所についての簡単な説明を聞いたあと、三百席近くはありそうな椅子にボクたち三人は腰かけ、これからはじまろうとする時間を待ったのだ。ここに来た目的は、この催しを見るためなのだから。

仕事を終らせた約二百五十名の人たちと一緒に、ボクたちは舞台に視線を向け続け

ていたのだ。と、幕が上がると同時に、勢いのある音が流れ出したのだった。

それが一分も続いていると、ボクと同じ仲間の人たちが椅子から立ち上がって、体を前後に横に動かしたり、飛び上がったたり、手を強くたたいたり、音に合わせて自分の体を動かし出したのだ。

二曲、三曲とテンポの速いポピュラーソングが流れ続けると、大半の人が椅子に座ってはいないで、個性あるアクションで自分を表現し出したのだ。もちろん、ボクもメロディーに合わせて、手を上下に動かしてのだ。

ママがパパに言ったのだ。

「舞台では、ドラムやキーボード、アコーディオン、エレキギター、バグパイプなどの楽器をもった十三名の人たちが、力強いビートのある音を出して演奏をしているわ」

「マイクからは、張りのある歌声も聞こえ、いいね」

その二人の会話を聞いていた、ボクらを案内してくれた人がパパとママに話し出したのだ。

「彼ら十三名のうち、十名は知的ハンディのある人たちで、そのなかにはダウン症の青年も二名いますよ。あとのジーパンをはいた三名は、牧師と高等学校の校長、それに特別支援学校の先生なのです」

演奏をしている人も、耳を傾けているボクたちも皆笑顔だ。ボクたちは、皆有りのままの自分を出しているのだ。常に、ホンネのまま生きていくボクらなのだ。

以前、施設で働いていたパパは、過去の経験が一気に蘇ってきたようで、目を潤ませながら横に座っているママに、

「ここには真の触れ合いがある。真の触れ合いがある」

と、何度も声を上げたのだ。パパはボクと同様に立ち上がって、ビートの利いた音に合わせ、両手をたたき出したのだった。

まわりの人たちは、リズムに合わせて手足を動かしたり、カップルでダンスをする人たちも始めたな。ボクもそうだが、皆体でよろこびを表現しているのだ。

「アンコール、アンコール」の声に押され、一時間半の予定を超過して何曲も演奏されていったのだ。

パパは皆の様子を見ながら、足で地面を鳴らしていたな。そのパパが、横に立っているママに、

「時間は昔に戻らないが、以前経験したことが新たな感動をもたらしてくれるね。これが自分の原点だ。過去から今に至るなかで、命のリアリティーを体で感じるよ。ありがたい時間だ」

と伝えると、ママも皆に合わせて両手を打ち続けていたのだった。

## 第十三話 挑戦

夕食を摂ったあと、ボクはいつものように後片付けをしてから自分の部屋に戻るのだ。そして、好きな日本とドイツの童謡、それにモーツアルトの曲を聞くのがたのしみおなっ



てきたのだ。

そのようなある日、パパとママ宛に一通の封書が届いたのだ。日曜日になると、ボクが時々訪れていた福祉センターからだったな。ボクたち仲間が自立を目指すことができるようなグループホームをテュービンゲン市内につくる計画があるので、関心があるようなら連絡してほしいとの知らせだったのだ。

それを讀んだママは非常に積極的だったが、パパはボクがまだその年齢に達していないと思ったようで、そう乗る気ではなかったな。

そのパパに、ママが、「彼の行動を見ていると、これは一つのチャンスかも」と言ったのだった。

この手紙が家に届く半年前、二十七歳になったボクは、福祉センターが企画した一つのプログラムに参加したのだった。それは、大学生のいない学生寮で、ボクたち仲間が夏休みの一ヶ月間そこに住み、親から離れて、自立するための生活を訓練するためのものだったな。

それから三週間してから、ボクたちを指導してくれた人がパパとママに、

「彼は、結構たのしんでいましたよ」と。

と、話したのだ。そして、さらに続けたのだった。

「ただ、髭剃りが出来ない、トイレのマナーが十分ではない、自由時間に何をしたらよいかがわからないなどの問題点はありましたが、親から離れての初めての経験にしては上出来でした」

それを聴いたママは、ボクがグループホームに入り、そこで暮らして行くことに乗り気になったが、パパはそうでもなかったな。ママはそのパパを説得して、二人揃って福祉センターでの説明会に行くことになったのだ。ボクも一緒だ。

センターまでの途中、助手席のママがパパに、

「この説明会に、どのくらいの人たちが来るかしら」

と訊いたのだが、パパはそれには答えずにハンドルを握り続けていたな。

夕方の八時前にセンターに着き、ボクたちは小ホールに入ると、七十名の人たちがすでに座っていたな。ボクたちが椅子に腰かけると同時に、説明会がはじまったのだ。

先ず、このプロジェクトを推し進めているセンター長が、今までの経過を話し出したあと、「来年の秋にはグループホームをオープンするので、それまで親と専門指導者がよく話し合って、より良いものをつくって行きたい」と抱負を語ったのだ。

センター側と親との質疑応答となって、ボクの知っている人やママはいくつかの要望を出したのだった。特に、ママは、

「地域の人たちと共に仲よく暮らしていけるような、そんなグループホームにしてほしい」と、自分の願いを表現したのだ。

二時間の話し合いのなかで、パパが特に耳を澄ましたことがあったのだ。それは、七十歳のある母親が三十八歳の娘について語った内容だった。

「わたしの娘は五年前に、隣の町のグループホームで月曜日から金曜日まで暮らすようになっていました。最初の一年間は、土曜に自宅に帰り、日曜の夕方にホームに戻るのを娘は嫌がっていました。しかし、父親が病身なのを見て、自分はホームで暮らさねばならないとわかったのです」

さらに、その母親は語ったのだ。

「娘は今ではホームに戻るときは、『また来るね』と私たち親に笑顔で言うようになりました。これも娘の自立の一つなのです。三十八歳の娘が『ミニロックをはきたい』と希望すれば、以前のように、そんなものを着てとは言わずに、それを受け入れる親に、今はなっています。娘の思いを尊重し、認めています。娘が自立するようになれば、親も自立します」

これを聴いたパパは、その母親から勇氣と希望をもらったようになったのだ。ボクがママとパパから離れて、そろそろ自立する方向へ進んでいるのを感じ出したようだったな。

センターを出て家へ帰る途中、ママが車の中でパパに言ったのだ。

「ハンディを持った人とその家族が何組も来て、討論に熱が入ったわね。それに、町の議員と行政官も出席していたわね。いい時間だったわ」

「そうだったな。皆の話しを聞きながら、彼の自立とは何なのかを、考えさせられたよ。でも」

そう応えてから、パパは続けたのだ。

「彼と二十七年間いつも一緒に暮らし、その彼が家にいなくなったら、風船に針が刺さって空気が次第に抜けていくような気持ちになるかも知れないな」

「それは、わたしも同じよ。でも、週末は家に戻ってくるし、彼はいつまでもあなたの子供なのよ」

それを聴いたパパは、ボクのほうに顔を向けてニッコリしたのだ。ボクも笑顔で返したな。

それから半年して、ボクは家から歩いて十五分ほど行ったところにある、三階建てのグループホームに入居したのだった。

ママがパパに、

「一般向きの三十世帯が暮らすアパートね」

と言ったのだ。その一角にボクたち九名が住み、ボクは一階で、同居人は五十七歳と二十四歳の二人だ。二階には女性の仲間たち三人、三階には男性の仲間三人。それぞれ階を違えてのホームなのだ。

ボクの部屋は十五平米の広さ。そのなかにベッド、ソファ、ダンス、机、椅子が置いてあるのだ。それらは、パパとママとボクとで家具屋で選んだものばかりだ。赤色系統が好きなボクなので、ソファとかけ布団の色は赤、カーテンも淡い赤なのだ。同居している二人とも、自分好みの家具を部屋に持ち込んでいたな。

トイレは二つあって、広い居間とキッチンがついていて、庭にはママや他のママたちが植えた花々が咲いているのだ。

垣根の向こうには、ゆっくりと車が走っていて、どんな乗り物でも好きなボクは、それらの車を飽きもせずに見たりすることができるのだ。

ママがパパに話したのだ。

「町の中心地にあるホームなので、近くにはパン屋、肉屋、花屋、ピザ店、中華料理店、それに歩いて二分行ったところにスーパーマーケット、薬局、銀行などもあって、日常生活に必要なものは何でも揃うわ」

ボクがここで月曜から金曜日まで暮らし始めた頃、パパとママと二十七年間一緒に住ん

でいたので、ここでの生活になかなか慣れ親しむことができなかったな。

ボクは自分の意思を言葉でなかなか表現できないので、このホームに移り住んだ最初の数ヶ月間、時々真夜中に起きては自分の部屋の電灯を、朝まで点けっぱなしにしたこともあったし、居間の椅子をひっくり返したりもしたこともあったのだ。

また、土曜日に家に帰り、日曜の夕方にグループホームへ戻る時、ホームの手前百メートルまで来ると、ボクの足は自然と止まって動かなかったことが何度もあったのだ。

そのような時、ボクと一緒に歩いていたママがパパに、

「待つよ」

と、言うのだった。

週日は、ボクは家にいないので、パパはボクとキッチンでの調理をすることができず、また食事を一緒に摂れないので、フォークとナイフが止まり、涙がポロツとお皿に落ちる日が続いたのだ。

それを見たママが、パパに、

「彼の自立のためよ。あなたがそのような気持ちでいると、それが彼に伝わって自立していかないわよ」

と言うと、パパは、

「それはわかるけど、寂しいものはさびしい」

と応え、また一つ涙を落とすのだった。

そのような日々から数ヶ月が経った頃、ボク自身に新しい変化が生じてきたのだ。それは、土曜日に家に戻ると、ボクと同居人とボクたちをお世話してくれる人たちの名前を、よく言うようになったからだ。その時は、ボクは上機嫌なのだ。今までそのようなことはなかったのに。

また、グループホームに戻る時も、以前のようにボクの足は止まることもなく、テンポがより速くなってホームへ行くようになったのだ。ホームでの暮らしがたのしくなってきたからだった。

ボクたちを世話してくれる人たちに親しみを覚え出したし、六時半に朝食をして、作業所から戻る四時半からは、スポーツなどをしてくれる人と一緒に余暇時間を過ごし、木曜日の午後にはいつもパパがホームに来てくれて、一緒に買物に出かけるし……。

それに、八人の仲間たちの誕生日には皆が集まり、一緒にテーブルを囲んでケーキやジュースを飲んだりもするのだ。また年に二回、近くに住んでいる人たちを呼んでのパーティもあるのだ。学生ボランティアもよく来てくれし、退屈しないし、何しろたのしいのだ。

それからしばらくして、ボクの三十歳の誕生日となったのだった。

グループホームで暮らしている仲間八名とボクたちをお世話してくれる八名、それにボクのおじさん、おばさん家族を招くことになったな。そうになると、家に全員を呼ぶことは難しいとママは考え、もつと広いところであることを考えたのだった。

その場所は、町のマルクト広場に面した教会のゲマインデハウス（教区信徒会館）の小ホールだった。

パパとママとボクは準備に取りかかり、招待した人たちが集まって来たのは、日が

暮れかけた六時過ぎだった。

夕食の支度は、ママが二日前からこの地方の郷土料理であるマウルタアシユを家で作っていたので、それを暖めるだけでよく、サラダと食後のケーキは、参加者が持つてくることになっていたのだ。

三十七名の人たちが集まったところで、ママが、ボクのおじさんやおばさんや従兄弟、それにグループホームの一人ひとり、それにボクたちをお世話している人たちを紹介したのだ。

少しして、パパが、壁に映し出されたスライドの画像を見ながら、ボクが生まれた浜松や六年間暮らした土浦の日々と、ボクが十八歳の時に、パパと二人だけでリュックを背負って十八日間日本を旅したことや、毎夏アルプスの山々に登っていることなどを皆に語ったのだ。

ボクが山道を一日十キロメートルは歩き、それを一週間も続けていたと話すと、皆驚きの声を上げたな。ボクは自慢気に肯いたのだった。

夕食の時間となり、ママが作った料理と何人かが持ってきたサラダを食べながら、グループホームで世話をしている人がビデオで撮った、ここ一年間のボクの生活ぶりを皆で観たのだ。

それが終わると、こんどは皆で歌を唄ったり、ゲームをしたりとなったな。ボクは絶えずニコニコ顔で、各テーブルを回り、誇らし気に、皆からもらった贈り物を披露したのだった。

九時過ぎ、ボクと仲間たちがホームに戻る時刻になったので、最後は全員でボクのために歌を唄い、それもアンコールとなったのだ。

ボクはうれしくてうれしくて、両手を上げて「やった！」とのポーズをしたのだった。それを見たパパとママは微笑みながら、両手を打ち合わせ、皆も同様に拍手してくれたのだった。ボクは皆に見守られて、うれしかったな。

ママが横にいた。パパに、

「彼、ホームにだいぶ慣れてきたわね」

と言うと、パパは、

「そうだね」

と、肯いたな。そのパパに、ママが、

「すこしずつ自立してきているわね」

と、付け足すと、パパは、

「彼の自立か？」

と、思案顔で応えたのだった。

三十歳の誕生日から一年経って、ボクに一つの事件が生じたのだ。それは、パパが日本に行っている間に起こったのだった。

夜の十一時過ぎ、ボクがグループホームの自室で眠っていると、作業所で見たことのある背の高い人が部屋にノックもしないで入ってきて、眠っているボクを起こし、急に顔を殴ったり、爪でボクの顔を何ヶ所も引っ掻いたりしたのだ。それに加え、右手小指を骨折する暴力を受けたのだ。ボクは何がなんだかわからず、本能のまま少し

は抵抗したが、なされるままにしていたのだった。

彼はボクのグループホームの三階に住む友だちの部屋を訪れ、遅くまでいたのだった。あまりに遅くなったので、学生アルバイトの人からすぐに家に帰るように言われ、カッとなって友だちの部屋を出て、一階のボクの部屋に来て、意味もなく暴力を奮ったのだった。

ボクたちのグループホームには、夜の九時以後は専門の職員はいないし、当直者もない。ただ、アルバイトの学生二名が同じアパートの独自の部屋に住み、夜中ボクたちを二度見回っているだけなのだ。そのうちの一人が、ボクの傷ついた顔を見て、救急車を呼んだのだった。

ボクは大学病院に運ばれたな。

少ししてからママが家から駆けつけてくれて、ボクの左目周辺が青く腫れ上がったのを見て、びっくりしてボクを抱きしめてくれたのだ。

そのママに連れられて、ボクは眼科やレントゲン科を廻ったのだ。ママは、警察官と学生アルバイトの人から、その時の状況に耳を傾けていたな。

そのあと、ボクはママと一緒にグループホームではなく、家に四時過ぎに戻り、朝を迎えたのだった。

ママが日本にいるパパに、ボクに何が起こったかを話したら、パパはあと二週間の日本滞在を取りやめて、急遽テュービンゲンに戻ってきたのだった。

パパは家に帰るや、ボクの骨折した指と腫れ上がった顔を優しく撫でてくれたな。ボクはニッコリだ。

傍にいたママがパパに、

「三週間ほど、グループホームではなく、家にいることになったわよ」

と話すと、パパは大きく肯いたのだった。

翌日、パパはホームの職員であるフェーシングから詳しい事情を聴いていたが、なぜ二十三歳の人がこのような暴力をしたのかを知ることができなかったのだ。

それから二週間しても、その人からも彼の親からも何の謝りの言葉もなかったのだ。パパはフェーシングに、「その青年と親と話がしたい」と申し入れたのだった。

四日後、パパ、ママ、その人と彼の両親、それにボクの世話をしてくれているフェーシングの六名で話し合いの場を持ったのだ。ボクは再び彼と会いたくなかったのだ、一緒ではなかったな。

パパとママは一時間半の懇談を終え、パパとママが家に戻ってきたのだ。ボクは一人でパズル遊びをしていたな。

パパが紅茶を飲みながら、ママに言ったのだ。

「彼が、なぜ暴力を奮ったかを訊いたが、自分ではわからないと返事をしたね」

「そうね。父親が息子は精神病の薬を飲んでいて、高血圧でよくカッとなると話してくれただけだ」

「それにしても、彼は数回警察沙汰になるような暴力を奮ったことがあるので、注意人物だと警察官にも知られているらしいね」

「そうね。親も大変だと思うわ」

「父親は赤ら顔をして、アル中らしい話し方だったな。母親は一言二言のべたあとは、

ずっと黙り続けていたし、病身のように見えたよ」

「かもしれないわ」

「彼は息子に今まで謝っていないと言ったね。そのあと、きみが、『謝ったほうがいいわよ』と勧めたけれど、彼は黙り続けていたね。でも、すこししてから父親が、『謝ったほうがいいぞ』と声を出したら、彼は、『お詫びします』と私たちに言ったわね」

「そのほうが、二人にとつていいわよ。これから、作業所で会ったりするのだから」

「最後に、きみが、『半年したら、また会いましょうよ』と言ったら、彼は肯いていたね。フェーシングさんも、それはいい案だと賛成したし…」

「あなたは、彼にセラピーを勧めたが、フェーシングさんが、『知的ハンディを持ち、なお且つ精神病に罹っている人の場合、セラピーは難しいところもある』と話したわね。とにかく、彼は一年間グループホームに来てはいけないことになったわ」

「そうだったね」

さらに、パパは続けたのだ。

「息子は、何ごとも引きずらない性格なので助かるよ」

「でも、気持ちの切り替えが難しい一面もあるので、気をつけていきましよう」

この事件のことは、ボクはしばらくすると忘れてしまったな。とにかく、ボクはボクなりに、グループホームと家で暮らしているのだから。

## 第十四話 関係自立

ボクがホームで生活すようになって、四年が過ぎた頃だった。パパが以前働いていた土浦にある施設の理事長から、

「息子さんが暮らしているグループホームについて、職員の前で話してくれませんか」と頼まれて、パパはよろこんで日本へ行ったのだ。

そして、十日間の日本滞在を終え、テュービンゲンに戻ってきたのだった。もちろん、ママは、パパがその施設職員前で何を話したのかを訊いたな。

パパは皆の前で語ったことを、ママに伝えたのだ。

【息子は、グループホームで月曜から金曜日まで暮らし、土曜日の昼に家に帰り、日曜の夕方になると、家から歩いて十五分のホームに戻る日々となりました。

グループホームで暮らしはじめたころの半年間は、日曜の夕方になってホームが近くなると、彼の足は止まり、前へ進まないことが何度もありました。しかし、しばらくすると、彼の足取りは軽く、テンポも速くなってニコニコしながら、うれしそうに行くようになったのです。

その姿を目にして、グループホームでたのしく暮らしているのがわかったのです。一体、何がそうさせるようになったのだろうかと考えました。

彼は、はじめの半年間一緒に住む同僚の名前と、世話をしている人の名前をめったに口に出さなかったのですが、しばらくすると言うようになったのです。そのときの彼の顔は、いかにもうれしそうなのです。それを見て、わたしはまたひとつ学んだようになりました。

一般に自立というと、身辺自立、経済的自立、職業的自立となりますが、それだけでは

ない自立もあることに気づいたのです。

彼の住居には、あと二人の同居人がいます。三人の知的能力はさまざまで、年齢も六十二歳、三十四歳、二十五歳と異なっています。その三人が一緒に暮らす姿に、共生という語が当てはまると思っただけです。

ハンディの程度が違う三人が共に暮らすには、寛容を必要とするでしょう。そのような中で、彼は同居人と世話をしている人に積極的に働きかけて、関係を築いていたのです。仲間との繋がりのなかでたのしく暮らしている息子の姿から、人は共生のなかで、よるこびを味わえるのだと思っただけです。他者との関係を持つことが彼の自立だと知っただけです。

彼の場合、身辺自立や目に見える自立は未だできていません。しかし、他者との関係を持つことで心が安定し、今では家よりもグループホームでの暮らしに、彼はよろこびを得るようになったのです。

ハンディの子を持つ私たち親は、自分が亡くなったら、わが子の将来のことが心配で、死んでも死にきれないという思いが日本にもドイツにもあります。しかし、ドイツに住み、また息子の同居人たちの親と話をして知ることがあるのです。

それは、ドイツでは、ハンディを抱えている子にも、その子の独自の個という生があり、それを認め見守り、尊重しているためでしょうか、親が死んだあとは、日本ほどに心配してないように見えるのです。その背景には、この国では経済的支援が整っているからのように思えたのです。

日本でもドイツでも介護保険があります。ドイツでは介護を要するなら、高齢者だけに限らず、ハンディを抱えながら暮らしている人たちにも介護保険は適用され、介護をしている人が、年金をもらう年になったら、年金を得ることが出来るのです。つまり、介護が仕事と見なされているのです。その恩恵を、自分は享受しています。

それに、息子が暮らしているグループホームにかかる費用約三十数万円は、すべて公から出ていて親の負担はまったくありません。また、夏や冬の長期に、グループでどこかに行く費用は、介護保険から出ます。

それら全て、ホームの財源となる金額はすべてガラス張りとなっていて、息子本人の口座手帳に支払われるのです。そして、それは、親が管理しているのです。ですから、親の責任と役割は、以前と同様に大きいものがあります。でも、それがプラスとなっているのです。

また、親が亡くなったあとの、法的な手続きとして後見人制度もあって、息子の場合、きょうだいがいけませんので、妻の姪がそれを引き受けてくれることになっています【パパが伝えた内容を聞いたママが、言ったのだ。

【ええ、確かにそうね。わたしの国では、社会が子供を育て、それは障がいを持つ子供にもいえるわ。と同時に、親は彼らを一人の個として見て、彼らは彼らなりに暮らしているし、それを見守ることがわたしたち親とまわりの人の役割よ】

それを聞いたパパは、再び施設の職員前で語った内容に戻ったのだった。「とにかく、ドイツに住んでいると、家族を軸にして、社会が成り立っているのを感じるのです。それを支えているのが、ドイツの整った社会保障制度です。

最後になりましたが、今も常に思っている自分なりの思いがあります。それは、短い

言葉で言えば、

『小さなよろこび、大きな幸せ』です。

息子の笑顔一つで、わたしは幸せになるのです。そのことを自分の心に刻みながら、わたしはわたしの道を歩いているのです。それは今後変わらないでしょう！

パパがママに語った翌日、パパは自分で発行しているテュービンゲン便りに、今回の日本滞在中で思ったことを綴っていた。ボクはこの便りの発行の際、切手を貼ったり、スタンプを押したりすることをいつも手伝っているのだ。

パパは、《個を自覚してこそ》という題で、次のようなことを書いたのだった。

【日本に滞在中、わたしが生まれ育った東京、それにいくつかの地を訪れて、二回ほどマイクを持って、若者から高齢者の前で、ドイツの福祉事情、特に、息子が暮らしているグループホームについての話をしてきました。そして、毎日様々な人たちと会い、とくに若い人たちと多く語り合う機会がありました。

その際、あることが気になったのです。それは、個ということでした。

わたし自身、長い間ドイツの社会で暮らしているので、この個を深く意識しながら生活しているし、また妻がドイツ人なこともあってか、多くのドイツ人とコンタクトを持っていきます。そのような状況にいますと、一人ひとりの個についてよく考えさせられるのです。

誰でもどのような人にもその人独自の存在があって、それは他の人が決して代わることはできません。そのことを自覚すればするほど、毎日の日常生活のなかで自然とよろこびが湧いてくるものです。よろこびは、自分自身に近づけば近づくほど大きくなります。

今のドイツの民主主義の礎になっているのは、人権を個の権利として尊重しているからです。そこには、自立という『自己実現へ向けて、主体的に生き、実践をする』との考えが軸にあるからです。

また、実践をするからには、いくつかの選択肢から自分で判断し、責任を引き受け、多少の冒険も伴う中で行動することにもなります。それだからこそ、身も震えるようなよろこびを肌で感じ取ることができるのです。今の状況の中で、尻込みをしないで生きていくことが大切であることを、わたしは知ります。

わたしは今も主夫をしながら、それを体験しています。それに、自分の個を大切にしながら暮らしていくと、他の人の『個の尊厳』をも大切にしようようになってくるのです。恐らくそこには、苦しみや悲しみの人間的共感が存在するからだと思うのです。

ここ日本で、さらに考えたことがあります。

それは、日本では至るところモノと情報が溢れ、過剰気味だったことです。そのような中で、自分で選択し、自分にあつたものを判断するのは大変なことです。人の不幸は欠乏から生じるのではなく、過剰によって起こるのではないかと思つたほどです。

それに、携帯、スマホを歩きながらも、また電車の中でも操作しているのを目にしていると、『これで果たしていいのだろうか。人との真の触れ合いができるのだろうか。人間は社会的存在だし、これで触れ合いのある社会となっていくのだろうか。人との関係を浅く広くとはなっても深くはなれずに、自分の心の内をこの触れ合いのなかで表現していけるのだろうか』と思つたのです。



わたしの家族は携帯もスマホもない暮らしをしているから、そのような考えに至ったのかも知れませんが。

もう一つ、考えを巡らせられたことがありました。

それは、若者たちの数は多いとは言えませんが、彼らが何となくクリスタルのように映ったことでした。自分独自の個を表現してないように思えたのです。ドイツに住んでいる男女の青年とは違うように見えたのでした。いつもまわりを、そして見られる自分を気にして、自分の考えを表現してないように映ったのです。

そのような青年、とくに男性に言えることは、生育する過程で、家庭での父親の存在意義を感じ取っていなかったのではないのでしょうか。

日本の父親は、家庭の中で自分の存在意義をしっかりと捉え、それにパートナーシップをしっかりと築き上げる必要があるのではないかとの思いになったのです。

親同士が仲良くハッピーなら、子供もしあわせを感じ、自分の将来に肯定的なものを見出すのではないのでしょうか。

女性と子供が、伸びやかに穏やかに暮らしていくためにも、父親の意識が大切だと思ったのです。

それに日本では地域創生、少子化問題、女性の地位向上の問題などが問われていますが、そのどれにも関係しているのが男性の意識変革だと思ったのです。

男性そして父親が家庭生活及び地域生活の中で、居心地良い場を創っていけば、女性と子供が暮らし易い社会となるのではないのでしょうか。

働いてお金と地位を得ても、それがその人の幸せになっているのかどうか。

わたしはそれよりも、その人の独自の存在が『在る』ということに生きる意義があると考えるのです。一人ひとりが生きる中で苦しみや悲しみを共感し合うためにも、個の尊厳を自覚することが大切に思えるのです。

そのような考えを持つ男性が多くなっていくためにも、国や政治家は人間を長時間働かせないシステムや社会保障制度を充実させてほしいものです。

最後になりましたが、本来、福祉の仕事はたのしいものです。なぜならば、人を助けるために働くことができるからです。その過程の中で、助けられている自分を見出すことができるのです。

あと、福祉に携わる人たちは、既成の在り方に疑問を持ち、批判する精神を養うことも大切で、それを表現する勇氣を持ってほしいのです。

三十七年間日本で暮らしていたわたしなので、祖国に戻ると、その社会が気になるのです】

## 第十五話 いのままでいい

パパのところは一年間に、日本から数名の人たちが訪ねてくるのだ。その人たちが来ると、パパもママもボクも一緒に食事をしたり、どっかを訪れたりして過ごし、もちろんボクが住んでいるグループホームも案内するのだ。

二年前の夏だった。ある女の人が家に五週間滞在していったことがあったな。ちやうど

仲間と一緒に二週間のギリシャ旅行をしていた時だったので、その人はボクの部屋で寝泊りをしていたのだった。

そのあと、家に戻ってからも、その人はボクの部屋にいたこともあって、ボクは居間のソファアをベッド替わりにして寝ていたのだった。その間、その人と一緒に過ごし、たのしかったな。

その人は家に滞在したあと、次の目的地へ向ったのだった。

パパとママは、その人が家を出たあと、居間のテーブルを囲んで話し出したのだ。ボクはまだ夏休みが続いていたので、テーブルの片すみでジクソーパズルをしていたのだった。ママがパパに話しかけたのだ。

「日本から来たあの女学生、もうすでにある種の国家認定の資格を持っていると、誇った様子もなく淡々と語ったわね」

「そうだったね。大学に通いながら、よく取得したと思うよ。まだ二十歳そこそこだよ。たいしたものだ。一般の人とは違う、知能指数が高いのを感じたね。それも、脳のある一部がとくに優れているように思えたよ」

「そうね」

「家に来たとき、彼女は『自分はアスペルガー症候群です』と先ず言ったよね。そして、手首の深い傷跡をみせながら、自分は自殺をしたと顔の表情も変えずに言ったのには驚いたよ。痛みはまったく無かったとも語ったね」

「そうだったね。彼女の話を知っていると、過去の出来事にこだわりを持ち、それがなかなか消え去っていかず、心の奥底に今も残っているように思えたよ。でも、おもしろいことに、そのことを全然反省をしていなかったね。過去のマイナスのことを反省する自分とは違っていたな」

「あなたは、そういう面が強くなるから」

「とにかく、彼女と話をしていると、会話が何か噛み合わなかったところがあればあったよ。彼女は、聞いている相手の気持ちを『おしはかる』ことができないようにも映ったね。ひたすら、自分が思っていることを一方的に話しているようにも見えたよ」

「自分に素直に語っていたのでは？」

「それが、良いか悪いかを別にしてね。とにかく、こちらの言うことを理解しようとする力が、彼女にはあまりなかったと思うね。それに、社会的常識があまり通じないようにも映ったよ」

「そうだったかしら？」

「きみには、彼女が話したことをドイツ語で伝えていたが、訳しづらかったところがしばしばあったよ。多分、彼女は聞く側の身になって話しをせず、相手の言うことに耳をそう傾けなかったからかもしれないな。そのようなことで、コミュニケーションがうまく繋がらなかったところもあったように思うのだ」

パパはそう言うてから、ボクのほうをチラッと見たな。

「彼が今しているパズルとか絵合わせゲームを彼女と一緒にすると、彼女、ものすごく強かったね。特別な能力を感じたよ」

「そうね。その能力を磨いていけばいいわね」

「それにはまわりの人たち、とくに家庭で彼女の存在を親や兄弟たちが見守り、後押しを

することが大切なのだろうな」

「そのことは、知的ハンディの子を持つ私たち親にも言えるわね。先ず、親がわが子のマインス的なこともプラス的なことも認めることよね」

「きみの言う通りだ」

「私たちはアスペルガー症候群という言葉を知らなかったわね。彼女が私たちの家に来る前、彼女の母親があなた宛に長い手紙を送り、そのなかで私たちは初めてその言葉を知ったわよね」

「その長文の手紙に、娘が半年間ドイツのフライブルク、テュービンゲン、ハイデルベルクでドイツ語を学びたいとの趣旨が書かれてあったね。そして、娘の希望を是非叶えさせてあげたいと記されてあったからね」

「わたし自身、アスペルガー症候群（広汎性発達障がい）の人と接するのは初めてだったので、家に滞在してどうなるかと心配したわ。でも、あなたが彼女のお母さんが書いた手紙を言葉洩らさずにわたしに伝えてくれたこともあって、わたしの心は動いたのはたしかだったわ」

ママは、さらに続けたのだ。

「昔、おもちゃライブラリーで、知的ハンディを持つ幼児や自閉的傾向のある子供を持つ親たちと話したりしているうちに、お互い共感しあい、支える気持ちがより増してきたことがあったわね」

「そうだったね。その親たちと今も年賀状などで連絡を取り合っているよ。日本に行ったとき、彼らと会ったりもしているからね。当時を思い出すと、おもちゃを通してハンディのあるわが子と遊び、遊びながらコミュニケーションをとることをしていたよね。そのようなことをして、彼らが居心地のよい場、くつろげる場となるように、先ず家庭がそれをつくり出すということを、私たち親はよく話し合ったりしたよね」

「そうだったわね」

ママはそう言いながら、ボクのほうを見たのだ。

パパが、再び話し出したのだった。

「彼女が家に滞在するようになって数日後、彼女の母親と二回ほど電話で会話をし、さらによくわかったことがあったよ」

「何が？」

「アスペルガー症候群の娘の願いを叶えさせてあげようとするには、相当な勇気が必要だったことをね。たしかに彼女とのコミュニケーションには、ちぐはぐさはあったが、娘のより優れた特性を生かそうとしていた母親だと思っただね。娘のあるがままの姿を受け入れ、あなたは今のそのままでもいいから、その姿で外国へ行つてらしゃいと言ったものを感じたよ。あるがままのなかで、娘に幸せを体験させたいと願っている母親の姿だと思っただね。勇気がないとできないことだよ。と同時に、娘自身にも勇気がないと外国に長期に亘って滞在できないだろうし」

「そうね」

「真面目に、そして真剣に生きていこうとする娘に寄り添う母親だと思っただよ」

「親と子がお互いに認め合っている姿とも言えるでしょうね」

「彼女は、『彼の気持ちがよくわかる』と何度もいったね」

「ええ、そうだったわね。何か共感するものがあつたのかしら？」

「よくわからないけれど、二人とも感受性はより強いね。彼の場合、人の動作などを眼でよく見ていて、物まねがうまいよね。彼女の場合、絵合わせゲームなどの視覚的記憶力は抜群だったね。反対に、二人とも耳から入ったことを理解する力は弱いね。そこに共通点があるかもしれないな。とにかく、相手の気持ちをそう考慮しないで、自分が相手に承認されようがされまいが話す彼女。自分を素直に出しているのだから。相手がいてこそ、自分の存在を知ると思っているわたしとは違うな」

「パパはボクのほうに目をしばらく向けていたあと、ママに再び話したのだ。」

「ハンディのある子を持つ親として、私たちはわが子が暮らし易いように行動しているが、最も大切なことは、わが子が何を必要として、どんな支援ができるかを知ろうとすることだよ。愛情の強さのあまり、子を理解しない親もいるだろうし。親というのは、わが子がハンディを持っていようがいまいが、弱い立場の存在のようにも思えるのだ」

「そうね。でも、そうだからこそ、そのなかで生じるよろこびも一段と大きいわね」

「実際、息子を通して、また社会のなかでなかなか適応することができない人たちによって、私たちは生かされていることを知るし、救われているのを年齢とともに感じたりするね。まわりにいる困った人を世話したり、援助していると、こちらが彼らから力をもらい、生き生きとした気持ちにさせてくれるから不思議だね」

「そうね」

「彼と暮らしていると、ありがたさを感じるよ」

「それは、たしかに言えるわ。お互いが支えあっているからでしょうね。そういえば、以前あなたを頼って、癲癇の発作をもった人が日本からひとり訪れてきて、テュービンゲンに八ヶ月間滞在したことがあつたわね」

「ああ、わたしより一歳年上の人だったね。私たちの家に二週間過ごしたあと、歩いて数分のところにあつた、きみの知人宅の貸し部屋で暮らしていたよね。夕食は、大体私たちと一緒に摂っていたけれど」

「夏の休暇も、私たち家族と一緒に過ごしたわね」

「そうだったね」

「そう言ったパパが、再び語り出したな。」

「テュービンゲンに滞在中、彼は何回も発作を起こしたね。ネッカー橋の上で二回ほど意識がなくなり、大学病院に運ばれ、また自転車に乗っていた際、交差点のところで他の自転車とぶつかって救急車で運ばれたりもしたね。病院で意識が戻っても、ドイツ語がそうできなかった彼だったので、自分で説明するのに苦労していたね。わたしたちが病院へ迎えにいくと、ホッとした表情を浮かべていたからな」

「そうだったわね」

「癲癇発作の身で、あこがれのドイツにしばらく住みたく、やって来た人だったね。東京の山谷で暮らすホームレスの人たちに、数年間奉仕活動をしていた時期もあったとも語ったよね。困った人を助けようとする熱意に、頭が下がったよ」

「人は、困った人に援助するようになってきているのよ」

「そうだろうな。彼の勇気と強い意思がないと、こちらに来られなかっただろうし」

「パパは続けたのだ。」

「八ヶ月の期間中に、日本から老いた母親が二回ほど訪ねてきたよね。わが子を見守る姿に、胸が打たれたよ」

「それは、わたしも同じだったわ。彼、無口な人だったけれど、よく笑顔を見せていたわ」  
「そうだね。息子と二人で日本を旅した際、彼の住んでいる九州の家にも寄ったことがあったよ。その際、ご両親から大歓迎されたね。そのご両親から、数年前わが子が他界したとの知らせが入ったね」

「そのことは、あなたから聞いたわ」

「とにかく、彼は自分に正直に誠実に自分の生を生き抜いた人だったと思うよ」

「パパは、さらにママに話したのだ」

「ダウン症の人を、アスペルガー症候群の人を、ハンディを負っているとか病気を有しているとかで捉えるはなく、一人ひとり尊い命を有す特徴のあるキャラクターを持つ人だと捉えるべきだね」

「そうね」

「その人を、あるがままに受け入れ、その人に寄り添い、その人に『そのままの姿で暮らし、あなたのそのままの姿で生きていけばいいのですよ。そして、そのなかで幸せを見つけてください』と声を大にして言いたいよ。他者がいて、その関係のなかでこそ、私たちはまさに人間らしく生きられるのだから」

「そうね」

「子を持つ父親として思うのだ。くつろげる場の家庭を築き上げ、家族そしてまわりの人たちと共に幸せを見つけていけば、それが豊かな社会となっていくのだと」

「わたしも同感よ」

「そう言うてから、パパとママはボクのところへ寄ってきたのだ。そして、パズルが完成するまで見ていたな。」

## 第十六話 平和への祈り

ボクたち三人が、カレーライスを食べている時だった。ママがパパに、

「外では雨が降っているけれど、明日はぜひ晴れてほしいわ」

と言うと、パパが、

「天気予報では、明日も雨らしいよ」

と応えたあと、続けたのだ。

「でも、毎年いつも晴れるので、雨は降らないよ」

「だと、いいわね」

その二人の会話を聴きながら、ボクは大好きなカレーライスを口に入れていたのだ。夕食が終り、ボクとパパはキッチンで後片付けをはじめたのだ。それが済んで居間に入ると、ママが何か作業をしていたな。パパは、ママの傍に行き、その作業を手伝い出したのだ。その二人の様子を、ボクは見えていたな。

パパとママは日本の藍染の布地からいくつかの文字を切り取り、それを長さ三メートル幅一メートルの白い布に縫いはじめたのだ。ボクには難しい作業なので手伝いはしなかつ

たが、二人の手の動きなどをしばらく眺めていたな。

そのボクに、ママが、「もう十時になったから、ベッドに入りなさい」と言ったので、ボクは自分の部屋へ行ったのだ。

翌朝、起き出してカーテンを引くと、雨は止んでいたが、灰色の空だったな。

朝食を摂り出したボクたち。パパとママは昨夜遅くベッドに入ったのだろう、眠り足りなさそうな顔でパンを食べていたな。それも終り、八時半三人一緒に家を出て、近くの教会前広場へ向ったのだ。

パパとママは、ガスボンベ、風船、折り紙、それに印刷物などがのった手押しワゴンを引いていたな。もちろん、ボクも押すのを手伝ったのだ。

毎年の八月六日、ボクはパパとママといつもこの広場に来るのだ。日本からドイツに移り住んで数年してから、それはずっと続けているのだ。パパはこの八月六日には、深い思い入れがあるのだ。ドイツから広島原爆記念館を三回ほど訪れているパパだ。

これからテュービンゲンで平和運動をしているドイツ人のグループの人たちと日本人数名と一緒に、教会前広場で鶴を折り、それを道行く人に手渡したり、また、一緒に折ったりしながらの、平和を訴える活動をするのだ。

それに加え、今年ママの案で、色とりどりの風船の下に、

《広島・長崎を再び繰り返してはならない》

《戦争が終わって市民の苦しみがはじまる》

《核の無い世界を求めて》

などの平和の願いを書いた小片を付けたりして、それを空へ放すことになっているのだ。手伝いに来てくれた二組の日本人家族と数名のドイツ人、それにボクたち三人は、机や椅子それにパネルなどを教会堂から広場の中央へ運び出したのだ。

それがちょうど済んだ時、十時を知らせる鐘の音が教会の塔から鳴り響き出したな。と、

警察官二人がパパとママのところへ寄ってきて、催し物の許可書を見せてほしいと言われ、パパとママが一週間前に市役所に提出した集会の証明書を提示したのだ。それを見た警察官は去っていったな。

そのあと、パパが皆に、

「さあ、これから一時まで、道行く人たちに平和を訴えるのだ」

と、声を上げたのだ。

パネルには、パパが広島原爆記念館啓発担当室で手に入れた大きなポスター八枚が貼ってあり、その横には、パパとママが作った長さ三メートルほどの横断幕が垂れ下がっていたな。そこには、『広島に原爆が投下された日』と記されてあったのだ。その前で、パパとママは日本人家族とドイツ人数名とで椅子に座り、鶴を折り出したのだ。

ボクは、パパが作成したビラを道行く人たちに手渡すことをはじめたな。

そのビラには、原爆が落とされた被害者の立場からの見方だけではなく、なぜ原爆が落とされるに至ったかなども書かれてあったのだ。それをしっかりと見つめていくことが、未来に戦争のない平和な世界を創り出すことにもなるのだと、パパはママに話していたな。

また、地元の平和グループの人たちが書いた『ドイツは世界のなかで、アメリカ、ロシアについての武器輸出国なので、それをストップしなければならぬ』とのビラを手にとって、ボクは道行く人たちに配ったのだ。

前日の新聞に、パパたちのことが記事に載り、それを讀んだ多くの人たちがママたちに話しかけ、また町の中心地にあるマルクト広場では朝市が立っていたので、ボクたちの前を横切る人も大勢いたな。それに、夏休みなので子供を連れた家族がカラフルな風船を見て、寄ってくるのだった。

パパやママたちはドイツ人に鶴の折り方を教えたりしていたので、ボクたちのまわりはとても賑やかだったな。それに、戦争体験を語ったりするドイツ人や、さりげなく寄付をする人もいたのだった。

十一時と十二時になると、皆が椅子から立ち上がって、平和を願う黙祷をしたのだ。ボクも皆と同じように目を瞑ったな。日本人とドイツ人、それにアメリカ人も一緒だ。ちょうど、教会の鐘が数分間鳴り響いたのに合わせての祈りだったな。

最後に、参加した人たち十二名が手に風船を持って、一斉にそれを空へ向けて放すと、風船は空に吸い込まれるようにして飛んでいったな。

それを見ながら、パパたちが、

「響け、私たちの願い！」

と、声を上げたのだ。

午後一時過ぎになったので、ボクたちは後片付けをしたのだ。そして、歩いて三分もしないで行けるボクの家へ、先ほどまで一緒に活動していた九名と一緒に向ったのだ。

テーブルを囲んでの昼食となったな。その中には、机や椅子を運んだり、片づけをしたリ、風船にガスを注入していた日本人の中学生もいたのだ。

お皿に盛ったサラダ、チーズ、ソーセージ、それにピザを食べながら、戦争のない平和を創っていくにはどうしたらいいのか、との話し合いになっていったのだ。

パパが語ったのだ。

「一九六七年、日本政府が公表した非核三原則、『核兵器をもたず、つくらず、もちこませず』を今も国是としている私たち日本人だ。戦争を避けるためにも、広島と長崎に落ちた原爆のことを、さらに世界に伝えていかねばならないのだ。それと同様に、加害者体験もしっかりと伝えていかねばならない。そうしないと、お互い真の信頼関係が構築できないからだ」

話し合いの終り頃、ボクは皆から、「ピラを歩いている人たちに百枚以上手渡してくれて、ごくろうさん」との褒美の言葉ももらったのだ。ボクはニコニコ顔になって、自分でも手をたたいたのだ。

何名かの人が、「雨が降らずによかった」と口々に言っていたな。そして、二時間の昼食を終え、皆それぞれの家に戻ったのだ。

そのあと、パパとママは居間のソファに腰掛け、ボクはテーブルの上で好きなパズル合わせの時間となったのだ。

パパがコーヒーを飲んでいるママに話しかけたのだ。

「今回、日本の中学生がいて、よくやってくれたね。若い人に、このような活動をしながら世界平和を伝えることができたと思うと、それがとてもうれしいよ。若い世代に、この広島・長崎に投下された原爆をどうしても語り継いで行きたいね。世界に核戦争を起こさせないためにも。世界に戦争の恐ろしさを知らせるためにも」

「そうよね。それは大切なことだわ」

ママはまたコーヒーを一口飲んだな。そのママに、パパは一人でパズル合わせをしているボクのほうに顔を向けたあと、言ったのだ。

「今年も、彼はニコニコしながら一緒に行動してくれたね」

「彼はどこまで理解しているかわからないけれど、笑顔でビラを多くの人たちに手渡していたわね」

「彼のような笑顔をすべての人がもてれば、世界が平和になるだろうに」

パパはそう言うことから、ママの目を見ながら話し出したのだ。

「今まで広島に三回行き、その度に人間一人ひとりの尊厳と命の重さをひしひしと感じたのだよ。亡くなった人たちのことを思い、またハンディのある人たちと出会い、わが子と暮らしていると、そう思わざるをえないのだ」

それを聴いたママが、

「それは、わたしも同じよ」

と言い、ボクのほうを見てニコリしたのだ。

二人ともソファアールから立ち上がり、ボクの傍に寄ってきて、ボクがなかなかできないところを手助けしてくれて、六十片のパズル合わせが完成したのだった。

翌朝、パパが新聞を読み終えたあと、ママに伝えたのだ。

「昨日の私たちの活動が、カラー写真入りで新聞に載っていたよ」

その記事を読み出したママ。そのあと、パパに話したのだ。

「あなたが初めて広島に行き、家に戻るや、広島と長崎で体験したことを、わたしに熱い言葉で詳しく語ったことが、ふと浮かんだわ」

それを聴いたパパは、

「もう大分前に話したことだね」

と言うことから、当時ママに話したことを想い出したのだった。

【きみも知っている、広島に住んでいる知人宅で荷を降ろしてから、すぐに平和公園へ路面電車で行ったのだ。そして、電車から降りて少し歩くと、無残な姿の原爆ドームが見え出したね。そこでしばらく立ち尽くしてから、また歩き出すと、

『安らかに眠って下さい 過ちは繰り返させぬから』

と、刻まれた慰霊碑があったね。その前で手を合わせてから、今年から開館した原爆死没者追悼平和祈念館へ向ったのだよ。

館内に入ると、壁にかかっているパネルに『…国の誤った政策により…』と記されているのを目にして、深い溜め息が出たね。

一九四五年八月六日午前八時一五分に落とされた一つの原子爆弾によって、その年だけで約十四万人が亡くなってしまったのだよ。そのことを思いながら、館内を歩き出すと、死没者一人ひとりの名前と遺影が映っているコーナーに足を踏み入れたのだ。

すると、大きな画面に、被爆した幼児からお年寄り一人ひとりの顔と姿が、絶えまなく映し出されてくるのだよ。それを観ていると、十四万という数では計れない一人ひとりの命の重さを感じ、胸が締めつけられそうになってしまったね。映像にひたすら目を注ぎ続けていたよ。

そのあと、被爆した人の体験が集められているコーナーに入り、ノートに書かれた文に目を落していると、鼻をかまざるをえなくなってしまうたね。



一瞬にして廃墟となつてしまった広島市。半世紀が過ぎた今も、被爆者は健康に不安を抱えているのだよ。まわりを見回すと、中学生と高校生の団体が多かったね。皆、真剣に被爆記を読んでいるのだよ。彼らも、文字が重なっているに違いないと思つたね。

その館を出てから、長方形型の平和記念資料館に行くと、入口前に中学生らしい生徒たちが整然と並んでいたね。五十円を払い、館内に入ったのだ。

当時の生々しい惨状の写真と解説を目にしていると、胸が慄いたね。こんな惨いことがなぜ許せるのだ、これを再びどのようなどころでも起こしてはならない、これは戦争で勝つた負けたをとおりに越した、私たち人類への挑戦だと思つたね。

外国の人たちも多量いたね。彼らもこの惨状を見て驚いたことだろうな。原爆の惨慄を知つた彼らに、

『国に帰つたら、一人でも多くの人にこの惨状を伝えてほしい』

と、切に願つたよ。そのことが、平和運動の源となると信じたからね。

館を出て平和公園に架かっている橋を渡っていると、先ほど見た被爆者の絵が浮かんできたね。

『水を下さい。水を下さい。助けてください…』

下から叫ぶような声が、聞こえてくるのだよ。立ち尽くしながら、流れ行く水を眺め続けていたね。私たちの代わりに亡くなった人たちの声だ。「すみません」との言葉が自然と口から洩れたよ。

翌朝、ベッドのなかで一筋の涙がツーンと耳の方へ流れ落ちたね。悲しみとも怒りともいえぬ、人間が生んだ愚かな行為への涙だったよ。

広島に三日間滞在してから、こんどは長崎へ向かったのだ。

長崎駅近くのビジネスホテルで荷を下ろしてから、早速原爆資料館に行き、館内に入ると、広島と同様に中学生と高校生の姿を多く目にしたね。外国人の姿を見かけないと思つていたら、前にいる生徒たちは韓国の人たちだったよ。長崎でも、多くの朝鮮半島の人たちが被爆していたのを知つたね。

しばらくの間、館内を歩いてみると、鼻で呼吸するのが難しくなつてしまつたね。

出口前に置いてあつた感想ノートには、

『戦争は恐ろしい。戦争をする人はバカだ。平和をつくっていかねば』

と、生徒たちが綴っていた文を読んだね。誰でもこの被爆の惨禍を目にすれば、平和を求めぬ気持ち一段と高まるのは確かだよ。

二時間ほど館内から、平和公園内を巡ろうとしたのだが、日が傾きかけてきたので、ホテルに戻ることにしたのだ。

次の日、朝食を摂ってから、路面電車に乗つて平和公園へ向つたのだ。

電車を降り、花で囲まれた石段を上り切ると、高さ七メートルの噴水が目の前で飛沫を上げていたね。そこを通り過ぎると、長崎の鐘が目に留まつたのだ。この鐘が地球上の至るところへ、平和の音として響き渡るようにと両手を合わせたよ。

さらに行くくと、高さ約十メートルの男性が座っている平和祈念像前に出たのだ。

像の右手は上方を指して原爆の脅威を、左手は水平に伸ばして平和を意味しているという。目を閉じると、昨日資料館で見た様々な惨状を撮つた写真が浮かんで来たね。

一九四五年八月九日十一時二分、ここであつたという間に七万以上の人が倒れてしまつた

のだよ。戦争を早く終わらせたい、ソ連よりも有利に立ちたいとアメリカは考え、原爆を落としたのだよ。この時は、もうドイツとイタリアは降伏していたのに。

でも、これによって、日本の領土が分断されずに済んだのかもしれない。日本は、なぜ戦争に走ったのだと考え続けたよ。

瞼を開けると、四、五羽の鳩が像の左手の上に止まっているのが見えたね。それを眺めながら、あの鳩たちも当時被爆した鳩の子孫かもしれないと思ったよ。

被爆した人の子孫のなかには、親や祖父母が原爆に遭ったことを話すのを控えている人もいると言われているのだよ。次の世代に影響が出るかもしれないという不安が残っているからだろうな。その心の内は計り知れないよ。戦争が終わってから、市民の心の苦しみがはじまるのだと思ったね。

再び歩き出すと、原爆落下中心標に立っていた大きな母子像前に出たのだ。母が死んだようになっていて子を、腕のなかに抱えている慰霊碑のような像だったね。

その子が心の奥から、  
『お母さん、お母さん』

と、呼びかけているように映ったね。母はわが子の声を聴き、何もすることができずにいる姿のように見えたよ。母ほど優しく、信頼できる人はこの世にはいないというのに。しばらくの間、眺め続けていると、涙が出たきたね。

翌日、長崎を発った列車の車窓に映る佐賀平野の広々した景色を眺めていると、人と人が殺し合う戦争が、この世界から消えてほしいとつくづく思ったよ。そのためにも、広島と長崎の被爆の惨状を世界の人に、語り伝えなければならぬと決心したのだ。亡くなった人たちの命が、自分の心に入り込んでいる今、それをしなければならぬと意を強くしたね。と同時に、平和を担う意識がさらに増してきたね。

毎年八月六日、テュービンゲンの教会前広場前に立たねばと思ったよ。戦争のない世界を創っていくためにも』

ママは、あの時、パパの語ることに耳を傾け続けたあと、「わたしも立つわよ」と声を出したあと、続けたのだった。

「いつか、わたしも広島を訪れてみたいわ」

そのママの望みを、パパは未だ叶えさせてあげていないのだ。ママの夢が実現できるように、パパ、しっかりとしてほしいな。

## 第十七話 繋がり

ボクが三十九才の誕生日を迎えた時だった。パパがママに、

「三人で日本へ行こう」

と、言ったのだ。それを聴いたママは、とてもよろこんだな。それはボクも同じだった。

その日が来るのを待ち続けたのだった。

パパは二週間に必要なものが入った大きなリュックサックを、ママは旅行かばんを、ボクは小さなリュックを手にして、関西空港の荷物検査場を出たのだ。と、見たことがある人がボクたちの前に立っていたのだ。

その人は、パパが学生時代だった頃の山仲間で、昨年の夏チュービンゲンに来て、ボクは、何回も一緒に食事をしたことがあったな。それに、その人はパパと一緒に車で南チロルへ行き、山々を一週間も歩き廻ったりしていたのだった。その時に撮った写真を、ボクは観たこともあったな。

その人の車に乗って、飛行場をあとにしたボクたち。そして、その人の家に行き、一時間ほどお茶を飲んでから、その人がママに見せたかった大阪城へ車で向ったのだ。

車の中で、ママがその人に話したのだ。

「わたしと息子はドイツ人なので、外国人向け用のところでパスポート検査を受けたですよ。そのとき、指紋と写真を撮られたりしたわ。それに、これから滞在する宿泊するところの住所を訊かれたりもしたわ」

「そうでしたか。日本に入る外国人はすべてが、指紋と顔写真を撮られ、それに泊まるところの住所を知らせるのですか」

「ええ、わたしが前回の十九年前に日本に来たときは、そんなことはなかったのに」

「今はテロ対策や難民の受け入れに、問題が生じているからでしょう」

「でも、指紋を取られるのは何か嫌だったわ」

その会話を聴いていたパパが、「時代がそうさせているので、しかたないよ」とママに伝えたのだった。

ボクたちが八階の展望台に立つと、パパがその人に、「天守閣からの眺めはいいね。お城の堀も真下に見え、五月の陽をいっぱい浴びている大阪市が一望でき、心が広がるようになるよ」と言ったのだ。

しばらくしてから、城外に出たボクたち。と、ママが、「日差しが強いわ」と声を出しながら五十メートル先へ向ったのだ。ボクたちはママのあとについて行ったのだった。

すると、ママが小さなお店の前で止まり、丸太でつくられた椅子に腰掛けたのだ。ボクもパパも座ったな。

少しすると、パパの友人が、ボクとママにはイチゴ汁、パパにはレモン汁のかかった氷のカップを、小さなテーブル上に置いたのだ。

それを食べていると、ママが、「日本で暮らしていたとき、暑い夏はこのようなカキ氷を口にしていたわね」と声を出しながら、小さなスプーンで雪のような氷を口に運んでいたな。

食べ終えたあと、ボクたちはミニ電気バスに乗ったのだ。ボクが歩いている人たちに手を振ると、同じ服を着た人も手を振り返してくれるのだ。パパが、「中学生だろうな」と言ったあと、その友人にボクの行為を説明したのだった。

「息子は、通りに歩いている人たちと出会うと、知らない人でも手を挙げる仕事をよくするのだ。そうすると、すれ違う大体の人は、笑顔で『ハロー』と声を出すのだよ。彼の挨拶なのだろうが」

バスを降りたボクたち。昼食を摂るために大阪の市場へ向ったのだ。

その人が案内してくれたところは、魚料理専門店。店内に入ると、大きな水槽に何匹もの魚が泳いでいたな。生きた魚を目にしたことがないボクは、じっと見ていたのだ。と、パパが寄ってきて、「あれらは、フグだよ」と教えてくれたな。

ちやうど昼食の時間だったので、多くの人たちがテーブルを囲んでいたな。しばらくす

ると、ふぐ料理が次々と運ばれてくる。ボクたちは、「旨い、うまい」と声を出しながら食べ続けていたのだった。ママとボクはふぐの毒を気にもせずに口に入れ、ボクはふぐの唐揚げ、ママはふぐの鍋をすべて平らげたな。

お腹が満腹になったら、眠たくなってしまったボク。それを見たパパが友人に、「すこし早いが、予約したホテルへ行ってくれないか」と頼んだのだ。

再び車に乗って、これから一泊するホテルへ向ったのだ。

ボクたちの部屋は、広く、静かだ。室内に入ると、二十四時間以上も眠ってなかったせいでろう、ベッドに入ると、三人ともばたんきゆうだ。

二時間半ほどしてから目が覚めたボク。お風呂に入ったりしながら、ゆっくりと過ごしていたのだった。

夕食は、パパがホテルの近くにあったスーパーで買ってきたお握りを、部屋内で食べ出したのだ。パパがママに、「日本の米は旨い。この味だ」と言うと、ママが「あなたの作るお握りも美味しいわよ」と応えたな。もちろん、ボクは肯いたのだった。

しばらくすると、パパが、「もう十時だから、寝よう」と言ったので、ボクは歯磨きをしてから、ベッドに入ったのだった。

ママは、明日待望の地を訪れるので、うれしそうな表情を浮かべていたな。そのママが部屋の電気を消したのだった。

### ①平和を共有する公園

ホテル内で朝食を摂ったあと、新大阪駅へ向ったボクたち。

駅に着き、改札口のところ、新幹線が乗り放題のジャパンレイルパスを係りの人に見せてから、駅構内に入ったのだ。すると、売店が幾つも並んでいたな。パパはその中のあるお店に立ち寄り、昼食用のお弁当三つを買ったのだ。そして、ボクたちは列車に乗ったのだ。

一時間して、そのお弁当を食べ出すと、ママとパパはしあわせそうな顔を浮かべていたな。もちろん、ボクもだ。パパが食べながら、

「お弁当を食べて、日本人を知る」

と呟き、ママも、

「ご飯の上ののっている様々な色合いがいいわね」

と、ひとりごとのように言ってから、

「このお弁当箱、気に入ったわ。ドイツに持ち帰ることにするわ」

と、パパに伝えたのだった。

広島駅に着くと、インフォメーションセンターで宿探しをはじめたパパ。

そのパパが、ボクたちの前で言ったのだ。「広島カープの野球試合があるので、市内の安いホテルはどこも満室だと断れてしまったよ。でも、ここから新幹線の列車で十分ほど走った東広島駅近くに、安く泊まれるホテルが見つかったので、そこにこれから行って、三泊するよ。夕食に、カレーライスを無料で提供しているらしい」

それを聞いたボクは、うれしかったな。日本にいた時から、大好きなメニューだったからだ。

再び新幹線の列車に乗り、東広島駅へ。

ホテルに着き、夕方になったので、ボクたちはカレーライスを食べ出したのだ。パパとボクはお替りをしたな。そのあと、近くを三人で散歩したのだった。

翌日、ホテルで朝食を摂ったあと、ママがどうしても訪れたかった平和記念公園へ向ったのだ。

青空の下、ボクたちは広島駅から路面電車に乗り、原爆ドーム前で降りてから歩き出したのだった。

パパは、ここを三回ほど訪れているのだ。そのパパから、ママは公園内に何かあるかを前もって聴いてはいたが、それが目の前に現われるので、ママの足取りは弾んでいたな。ボクが住んでいる町で、平和運動を繰り広げているママだ。

そのママに、パパが原子爆弾によって大破し、全焼したドームを見ながら、何かを話していたな。

そこを通り過ぎて行くと、川に架かっている橋の上に立ったボクたち。と、一人の女性が行き過ぎていく人たちに何かを渡していたな。ボクもその人から、シッポを引くと羽が動く、折り紙の鶴を一羽貰ったのだ。それを動かしていると、ママがパパに、

「今年の八月六日は、この鶴をテュービンゲン市民と一緒に折りましょうよ」  
と言うと、パパは肯いたな。

さらに歩いて行くと、パパが立ち止まってからママに、「高さ九メートルの頂上に折り鶴を捧げ持つ少女のブロンズ像だ。千羽鶴の塔と呼ばれているところだ」と説明をはじめたのだった。

また歩き出すと、パパが大きな石造りの屋根前で手を合わせたのだ。その隣で、ママも目を瞑っていたな。そのママに、パパが伝えたのだ。

「あの奥に、燃え続けている炎は、『核兵器が地球上から姿を消すまで燃やし続けよう』との願いを託しているのだよ」

さらに歩いて行くと、パパが目の前の建物を見ながら、「ここが平和記念資料館。平和の尊さを考えさせられるところなのだ。今は工事のため、全館見ることができないのが、残念だけれど」と言ってから、中に入ったのだ。

ママもパパも館内に展示されている写真や資料のパネルを目にしながら歩いていたな。と、被爆者証言ビデオコーナーのところでママは立ち止まり、画面の前に並んでいる椅子に座ったのだ。そして、写し出される生き証人の言葉に耳を傾け出したのだった。ボクは日本語も英語も理解できないので、パパに連れられて、館内をさらに歩くことになったのだ。

しばらくしてから、ビデオコーナーのところに戻ると、ママはまだ画面を観続けていたな。ボクたちが来たことを知ったママは、椅子から立ち上がり、再びパネルを見るために歩き出したのだ。

一通り見学してから館外に出ようとすると、ママがパパに、  
「生き証人たちが話す内容には、身をつまされてしまったわ。ビデオコーナーで、もっと話を聴き続けていたかったわ」  
と言い、さらに続けたのだ。

「館内のいくものパネルを見ていたけれど、以前あなたがわたしに話してくれた、原爆が

なぜ落とされたかを詳しく説明したパネルがなかったように思うの。わたしは、そのことをよく知リたかつたのに」

「いや、あつたよ。きみが見落としたのだろう」

「パパはそう声を出してから、続けたのだ。」

「それなら、案内所にいた人に、きみの知リたかつたことについて訊いてみてはどうだろう？」

「そうね」

「パパは早速、案内所に行き、ママが知リたがつていた内容を話すと、英語を話すボランティアの人が、ママに詳しく説明してくれることになったのだ。」

「ママは椅子に腰かけて、その人と英語で話しをはじめたな。ボクは退屈になったので、パパと一緒に館外に出たのだ。」

「三十分ほどして戻ると、ママはその人とまだ話をしていたな。」

「ママが知リたかつた話が終つたあと、パパがその人に、

「アメリカにも、このような資料館があるのですか」と、訊いたのだ。」

「いや、ありません。今まで、アメリカは正しいことをしたとの認識でずっといましたので。でも、ここ十年來、原子爆弾を落としたことは、愚かだつたと思う人も出てきたようですが…」

その人はさらに、

「昨年の追悼式には、はじめてアメリカのオバマ大統領が出席しましたし…」と話したあと、パパに語つたのだ。」

「戦争は無くなりませんが、核戦争はなくなると私は信じています」それを聴いたママが、その人に、

「毎年八月六日、私たちが住んでいるテュービンゲンでは、この日を『広島の日』として、町の広場で平和運動をしているのです」

と伝えると、その人は、

「それは、よい活動ですね、続けてください」と、言つたのだ。そのあと、ママが力強い声を出したのだつた。」

「ここに来て、また新たな気持ちでやっています。戦争のない世界を目指して。このような悲惨な場を、世界で起こしてはなりませんので」

ママの隣にいたパパも、言つたのだ。「核兵器廃絶を訴え続けていきます。世界でこのようなことが、再び生じないようにねがいながら」

ボクたちはかなり長い時間、この公園にいてから、再び路面電車と新幹線の列車に乗り、ホテルに戻つたのだつた。」

翌朝、ママが、「一日のはじまりは、美味しいコーヒーを飲んでからがいいわ」と言つたので、ボクたちはビジネスホテルで提供している簡単な朝食を摂らずに、広島駅構内のカフェーに行き、コーヒーとパンでの食事となつたのだ。」

そこでの朝食を終えてから、再び路面電車に乗り、潮のにおいがするところで降りたボクたち。と、大きなフェリーが浮かんでいるのが目に入ったのだ。」

ボクたちはそれに乗り、十分ほどで棧橋に着き、海岸沿いに歩き出したのだった。すると、何頭もの鹿が食べ物欲しさに近寄ってくるのだった。ボクは犬が近くに来ると、避けるが、鹿は怖くないのだ。

パパがママに、「それにしても、鹿の数がなんと多いのだろう」と言い、さらに続けたのだ。

「海に浮かぶ大鳥居、それに朱色に囲まれたまっすぐ続く回廊の厳島神社など、この宮島には、伝説に残る史跡がいくつもあるよ」

「そうなの。島全体が歴史なのね」

そう言ったママに、パパが、

「昨日の見学のこと、頭から離れないのでは？」  
と、訊いたのだ。

「ええ、朝早く目が覚め、それからというものは、広島でいのちを落とした人たちのことを考え続けていたわ。あそこで、苦しみ、悲しみを体験したのね」

「歴史の鏡には、人の一生が映るのだろうか」

「そうね。それを、こんどは未来にも伝えるためにも、あの公園は尊いものとなっているわ」

パパは黙って、ママの言うことを聴いていたな。

しばらく通りを歩いてきたボクたち。と、ママがパパに、

「それにしても、どこを歩いても大勢の人ね」

と話かけると、パパが、

「今日は日曜日、それに母の日なので家族連れも多いな」

と、応えたのだった。そして、ボクに顔を向けたのだ。ボクは肯いたな。

再び、フェリーに乗ったボクたち。海をほとんど見たことがなかったボクは、風に揺られて輝いている海面を眺め続けていたな。どんな乗り物でも好きなので、それだけでたのしくなってくるのだ。そのボクの様子を見て、ママはニッコリだ。

フェリーから降りて、広島駅へ向っている電車内で、ママがパパに、

「日本の車掌さんは、お客さん一人ひとりに親切だね。優しい言葉かけをしているわ」と言うと、パパは肯いていたな。

ホテルに戻ったあと、パパが、

「さあ、明日からは東京だ」

と、声を上げたのだった。

## ②東京のユースホステル

朝食を摂ったあと、新幹線の予約席に座ったボクたち。

生まれ育った地へ行くのがたのしそうなパパ。長く住んだ地は、パパの気持ちを弾ませているのだろうか。

東京駅に列車が停まると、日本から年に一回はボクたちの家を訪れているマリが、窓の外で笑顔を浮かべ、手を振って歓迎してくれたのだ。ボクも笑顔ですぐに手を振り返したな。

列車を降りると、ママはマリと頬と頬を合わせたのだった。

ボクたちがリュックを背負い歩き出すと、パパがボクに、「今日から三泊する東京セントラルユースホステルへ行くよ」と言ったのだ。

こんどはゆっくり走る電車に少し乗ってから、小さな駅で降りると、目の前に高層ビルが立っていたな。そこに入り、エレベーターで十八階にあるユースホステルの受付へ行き、パパが手続きをしたのだった。そして、シーツを手にして部屋に入ったボクたち。

すると、パパが大きな窓から外を見ながら、「大きな窓から東京の景色が眼下に一望でき、まさに大都会の展望だ。下に飯田橋駅も見える」と声を上げたのだ。そのあと、ボクたちは二段ベッドにシーツをかけはじめたのだった。ボクとママは下、パパは上だ。ボクのベッドを整えるのに、マリが手伝ってくれたな。

それが終わると、マリがユースの食堂へ行き、数分後、熱いコーヒーを持ってきたのだ。それを飲みながら、部屋内にあったソファアに腰かけ、ボクたち四人は話をはじめたのだ。

しばらくすると、ボクのお腹がグーと鳴ったのだ。それを聞いたマリが、ボクたち三人に、「すこし早いけど、どこかで夕食にしましょうよ」と言い、ママに、「何か、食べたものはありますか」と訊いたのだ。ママが、「まだ、おそばを食べてないわね」と答えると、マリが、「ビル近くにお蕎麦屋さんがあるから、そこに行きましょう」と言ったのだ。

お店に入り、ボクたちはトロロそばなどを食べ出したのだ。皆「美味しい、おいしい」と声を出しながら、話に花を咲かせ続けていたのだった。ボクは二杯お代わりをしたな。

夕食を終え、十八階の部屋に戻ると、パパが、「寝るまでには、まだ時間がある。これから、一緒にお風呂に入ろう」とボクに言ったので、パパと一緒に、十九階にある大浴室へ向ったのだ。

広い浴室には、ボクとパパ二人だけ。大きな窓からは、外の夜景が見えるのだ。パパは湯船に浸かりながら、目を瞑っていたな。

そのパパが湯船から出たあと、ボクに、

「背中を流してほしい」

と言ったので、タオルで背中を撫でるように洗ったのだ。と、パパが、

「もっと強く」

と声を出し言ったので、ボクはゴシゴシ洗ったのだった。

再び、湯の立っている浴槽に入ると、パパが、

「やはり、日本の風呂はいいな」

と、声を出したのだ。

ボクたちが部屋に戻ると、ママはいなかったな。

少しすると、ママが戻ってきて、「このビルの下にある本屋にいたわ」といつもより大きな目をして言い、さらに続けたのだ。

「三十九年前に、日本にいたときに買った五冊の絵本が、今も売られてあったのを目にしたのよ。その五冊の本、買うかどうか迷ったわ」

「もちろん、きみが購入したいなら、そうすればいいのでは」

「そうね。その本は、発行して一九七刷、九八刷など、今も日本の子供たちに読まれているのよ」



ママはそう話してから、部屋を出て、また本屋に行き、その五冊の絵本を手にして戻ってきたのだ。昔、幼稚園の先生をしていたママだ。

翌日、ユースの食堂で朝食を摂ったあと、ボクたちはパパのお兄さんが住んでいるところへ向ったのだ。そのあと、パパのお姉さん、妹さん、そして八十九歳になる伯母さんたちなど十名と一緒に食事をしたのだ。テーブルを囲んでの賑やかな時間となっていたな。

親戚の人たちと昼食をしたあと、パパのお父さんとお母さんが眠っているお墓を訪れたのだ。パパは手を合わせ、ずっと目を瞑っていたな。そのパパはママに、「二人とも、七十歳を前にして亡くなってしまった。自分の歳には、もういなかった。もっと生きていてほしかった。残念でならない」と語ったな。

墓地を出たあと、パパが、「近くにある浅草の雷門に行くよ」と言ったので、そこへ向ったのだ。

目的地に着くと、ボクたちのような外国人が多かったな。至るところで、皆写真を撮っていて、とにかく賑やかなのだ。

パパがママに、「歩いている人の九割近くは、欧米人、中国人、韓国人、それに南アジア人だろいな」と伝えていたな。

ママは、通りで軒を出しているお店の前で立ち止まっては、日本模様の大きな財布を幾つも買ったりしていたな。パパは、好きなおせんべいや饅頭のお店をのぞくように見ていたな。

かなり歩き続けていたので、ボクは疲れてしまい、ゆっくりと歩くようになってしまったのだ。それを目にしたパパが、「ユースに戻ろう」と言ったのだ。

ユースに着いてから、パパは一人で部屋を出て、三十分後、夕食用のお握りや稲荷寿司、巻き寿司を持って戻ってきたのだ。

部屋の大きな窓に映る景色を見ながら、それらを食べ出したボクたち。

それが終わると、ママがパパに、

「このビルの下で、百円ショップの看板を見たわ。ちょっと寄ってみたいわ」

と、希望したのだ。と、パパが

「よし、それでは三人で行ってみるか」

と、応えたのだ。

食料品から文房具、その他何でも百円で売られているショップに入ったボクたち。パパとママは興味深そうに一つ一つ手にとっていたな。

ボクはお握り用のパック五つ、ママは小さなカップ、パパはボールペンとノートを買ったのだ。

パパがママに、「こういうお店はいいな」と言うと、「一つひとつ、見てみるだけでも、たのしくなるわ」と応えたママだった。

次の日、パパがユースを出る前、ボクに話したのだ。

「今日は、数人と時間を違えて会うことになっているよ。その人たちは、チュービンゲンを訪れたことがあったので、顔を見ると、きみはわかるかもしれない」

しかし、ボクは覚えてないだろうな。

結局、合計で六名の人と会ったが、ボクはやっぱり名前など忘れていたな。でも、八十

四歳と八十六歳の人の顔は覚えていたな。といのも、チュービンゲンのボクたちの家に何度も来たことがあったからだ。

その人たちと別れたあとだった。立ち止まりながら、ボクたちに今も手を振っている二人に、パパは何度も手を振り返していたな。

少しすると、パパがママに話したのだ。

「あのご夫妻とは、花を媒介にしてコンタクトが今も続いているね。チュービンゲンの植木屋にも一緒に行つたし。日本から花に関する本が幾冊も送られてきたことも、再三あつたし」

「そうだったわね」

「日本で会うたびに、ドイツの花の種を渡したりもしていたからね。もうドイツには、行けそうにもないとも語つたね。ご夫妻がずっとこちらを見続けていた姿に、なんとも言えぬ気持ちになつたよ」

ママは、パパの言葉を肯きながら聴いていたな。

### ③肩を組みながら

翌日、再び列車に乗つたボクたち。

しばらくすると、パパがママに言つたのだ。

「あと三十分で、私たちが暮らした土浦だ。きみにとっては、思い出の多い地だね」

「もちろんよ。彼が幼稚園に通い出し、特別支援学校には一年半近くいたし。合計六年半もいたところだわ。それに、あなたのおもちゃライブラリーに、彼を連れて毎日曜日には行つていたし」

「そうだね。そこで、坂本九さんとも会つたりもしたね」

「『幸せなら、手をたたこう』の歌を、今も覚えているわよ」

小さな声で歌を唄い出したママ。

「土浦の地は、わたしにもいろいろな思い出があるよ。知的ハンディを抱えながら暮らしていた子供たちが住む施設で、大学を出てからすぐに働き、おもちゃ作りに心を燃やしたりしていたところだったからね」

パパはさらに続けたのだ。

「その地にこれから行き、昔の知り合いの人たちと話しをしたりするのがたのしみだ」

「それは、わたしも同じよ。幼稚園や学校で知り合ったお母さんたちと会えるし。とくに、ダウン症の子を持つお母さんから、その家に招かれているし。そのお母さんには、当時何かと助けられていたわ。再会がたのしみだわ」

ボクを見て、ニツコリしたママ。

その会話の通り、ママとパパは多くの人と会い、たのしそうにしていたな。

ボクにもたのしいことがあつたのだ。それは、ボクと一緒に幼稚園そして学校に通つたR君の家に行き、再会したからだつた。

ボクはR君をまったく覚えていなかったが、すぐにボクたちは仲良くなれたのだ。彼と一緒に、日本の童謡を肩を組みながら、家庭用の小さなカラオケから流れるメロディーに合わせてマイクを持ち、声を張り上げて唄つたのだ。

そのボクたちの様子を見ていたパパが、ママとR君のお母さんに、

「言葉が通じなくても、コミュニケーションができる二人。とてもいいね」と言うと、R君のお母さんが、

「二人がひとりになったようだよ」と、応えたのだった。

パパが隣にいたママに伝えたのだ。

「二人は、それぞれの個性を出して、それがまさに光のようになっていて、私たちは感じるね。二人に、何か共通する心があるからだろうな」

「そのとおりだと思うわ。彼ら二人だけでなく、私たち親たちも、お互い共有できる心を持ち合わせているわ」

「そうだね。その心とは、相手を思いやる気持ちだろうな」「ええ、そうね」

ボクたち二人は、さらに声を合わせて唄い出したのだ。

ママとパパそれにR君のお母さんとお父さんは、笑顔でボクたちの歌を聴いていたな。